三つの祖国を持つ ある中国人

旅順工大生の手記

K・KAN 口述

松尾謙吉 編著

はじめに

此れはもと関東州（現在中国東北遼東半島）の大連で生まれた中国人が、小学校、中学、大学予科、本科何れも日本人の学校を卒業、それが為に終戦後中国共産党の追求を受けることになり、家族の誰にも告げずに、共産党に逮捕される寸前に、奉天（瀋陽）、安東（丹東）瀋陽、錦州、北京、天津と逃れ、友人に助けられて台湾に渡り二十余年を経て、民間会社にて、仕事の実績を買われて、シンガポールの永住権次いで市民権を得て、今はかって追われた中国に、台湾資本の製粉工場を立ち上げるべく奮闘する、当年七十八才の中国人の手記を、大学同窓が口述を筆記して上梓に至ったものです。

同じ時期に数々の辛苦を舐めながら引き上げられた多数の日本人同窓生や同胞が居ました。同じ中国人でありながら政治の波に流されて、九死に一生の逃避行を支えてくれたのは、彼の親戚、同窓生、教え子でした。彼の常に前向きに、落ち込むことなく、苦難を苦難と思わず切り開いて来た一生は、日本人にも多くの感銘を与えるものと思います。彼の長時間の口述を聞きましたが、彼は一度も、ぼやき、愚痴、悲憤慷慨することがありませんでした。

大連の大連中学校時代、校長先生が皆に課した、教育勅語の暗唱、筆記で同級二百名の生

徒の中で、一字も間違えず書けたのは、ＫＡＮ一人、校長が合併教室の修身の時間に、ＫＡＮを立たせ皆に「満洲人のＫＡＮが一人、一字も間違えず書いた。日本人の生徒はしっかりしろ」と誉めたたえ、他の日本人生徒は厳しく叱られたたそうです。此のお陰でＫＡＮは中学四年終了まで、修身の点は98点、おまけにＫＡＮの弟は無試験で入学を許可されました。校長はＫＡＮの学級だけでなく、他の学級にもＫＡＮのことを伝え、それ以来ＫＡＮのあだなは「教育勅語」になってしまいました。ＫＡＮは大連中学から当時難関の旅順工大に四年終了で入学して居り、穏やかな彼の風貌からは想像出来ない秀才でありながら、少しも外に出さず、数々の不運、苦難に会いながら、国を捨て、妻子を捨てて、何回も裸一貫になりながら、今は理想郷のシンガポールで市民権を得て、今も尚、シンガポール、台湾、中国、日本を結んで活躍して居ります。毎年の日本に於ける、聖徳小学校、大連中学、旅順工大の同窓会には欠かさず出席し、親交を深め、一緒に今は中国の学校になったかっての大連の母校訪問をして居ます。

　日本では不況で中高年には厳しい時期が続きます。かって五十年前多くの在満同胞は全てを失って二〇Kgの荷物だけで、日本に引き上げ、苦難の後今日の日本の繁栄を築きましたが、今の中高年の方々に、日本人と丁度裏の場面で同じ苦難を味わい、ひたすら故国に向かった日本人とは反対に、広大な土地、資産を全て失い、祖国を捨てて、全くの身一つで台湾に渡った彼の淡々たる話し振りにも窺われる、常に明るく前に前に進んだ生き方は今再度の苦難に

立ち向かわれる方々に、勇気を与えるものがあればと思い、ＫＡＮの口述をまとめました。
御愛読をお願いするものです。

（編著者記）

旅順工大生の手記
三つの祖国を持つある中国人　目次

はじめに　3
生い立ち　10
旅順工大　17
南 順三先生　21
木谷 要一先生　23
城野 和三郎先生　23
西川文吉先生　24
小倉 勉先生　25
卒業証書　26
ソ連侵攻　29
最初の結婚　41
大連脱出　42
瀋陽に辿り着く　53

瀋陽から安東へ 55
安東脱出 59
瀋陽脱出 63
天津へ 69
台湾へ 70
第二の結婚 82
台北聯華実業公司 88
シンガポールの友人 97
台湾の友人 99
台湾の将来 101
中国山東省烟台 104
大連と上海 107
台湾の企業 109
好朋友、新幹線博士 111

シンガポール 116
ライトブイ会社 120
最初の烟台行き 121
初めての訪中 123
旅　順 126
母の棺桶 130
文化大革命で自殺した旅順工大生 134
支　那 136
南京大虐殺 137
結　び 142
編著者の思い 144
K・KANの年譜 160
関係地図 163

三ッの祖国を持つ、ある中国人

旅順工大生の手記

K・KAN　口述
松尾　謙吉　編著
（文責　在編著者）

生い立ち

Ｋ・ＫＡＮは現在中国遼寧省、大連市内に一九二二年（民国十一年）に生まれました。父は昔は貧乏な百姓でしたが、同じく貧乏ながら私塾の先生をしていた、祖父に字を習い、大連の汽船会社に見習生で就職、始めの三年間は無給でした。会社は出来たばかりで、住み込みの父は小使いとして朝夕ボスの寝所の始末をし、寝所の便器や痰壺の清掃をしました。自分はトタン板の屋根の下で寝て、冬には雪が降ると麻袋の夜具に一面に雪がかかっていました。父は自分の将来の為と思い、愚痴一つこぼさず、骨身を惜しまず良く働きました。而も仕事の合間に、ソロバン、習字、会計をたたき込まれました。

父は字が上手で、真面目に働くのでボスに見込まれ、次第に一歩一歩と昇進、会社も大きく発展して、後に中国でも指折りの三十八隻の汽船を所有する船会社政記輪船股簡有限公司となり、父も株主となり、董事（重役、株付きのマネージャー）にまでなり、毎日運転手付きの自家用車で会社に通っていました。ＫＡＮが六歳のころは、住居地の岔溝会近郷で一番の金持ちとなり、多くの土地を買い取り、ＫＡＮの子供時代には大きな四合院（中央に庭があり、周囲に部屋が並んだ、中国独特の住宅）を二棟建て、北側は山、南に川が流れ、中央を東西に貫

く道の両側には、玉蜀黍（とうもろこし）、高粱（コーリャン）、粟、蕎麦の畑、野菜畑が有り、りんご、苺、さくらんぼ、杏子、桃、さんざし、梨、葡萄、海棠（かいどう）等の果樹が季節季節に一杯に実をつけていました。樹木と樹木の間には、西瓜やメロンが栽培されていました。

四合院の真ん中の庭には、大きな半月形を二つ重ねた石臼があり、大きい馬がぐるぐる回って穀物の脱穀をしていました。他に石の円盤の上に乗せた石のローラーをやはり馬がぐるぐる回って曳く石臼もありました。馬には横が見えない様に目隠しをして、自分の畑でとれた玉蜀黍、粟、麦などを、休み無くぐるぐる回って脱穀をしていました。

この谷溝の里にはＫＡＮが中学在学中に初めて電気が引かれ、それまではケロシンのランプや蝋燭（ろうそく）を使っていました。水はずっと井戸水を使っていました。道はどろ道で、荷車の轍のあとがついて歩きにくい道でした。荷車を曳くのは騾馬（らば）（馬と驢馬（ろば）の混血で一代限り、生殖能力はありません）で馬より小さく、驢馬より大きく、粗食に耐え大変丈夫なもので、当時の中国の農村では沢山使われていました。

祭日には父が運転手付きの自動車で里帰りしますと、沢山飼っていた犬がまるで怪物が来たかのように、追いかけて吠えていました。

近郊の山には狼が居り、家畜だけでなく人まで襲いました。一番年長の伯父（大伯父＝ダーボーフー、大連では大爺＝ダーエーと呼びました）の長男（ＫＡＮより三十才年長）が小さい頃狼に噛みつかれて山の方に引っ張って行かれたことがあったそうです。此れを見た家族が皆

で大声を上げながら追いかけましたら、狼はその長男を離して山に逃げましたが、長男の顔の左の目の下には大きくなっても深い傷痕が残っていました。

又狼にまつわる話で、遠い親戚の人が里近くの夜道で狼に出会い、側にあった大きな石を持ち上げ、狼目がけて投げつけて狼を殺しました。翌朝皆の前でその石を持ち上げようとしましたら、どんなに頑張っても石は動きませんでした。所謂「火事場の馬鹿力」で、あとあとまで皆の語り草になりました。

岔溝会の近くには学校がなかったので、ＫＡＮの父親は四合院のなかの二室を私塾にして遠いところから高齢の先生を家族の一員として、住まわせ、七才から十六才くらいまでの家族に漢文を教え、数キロ先から他人も皆徒歩で勉強に通って来て無料で教えて貰っていました。

事業経営に長けていたＫＡＮの父親は積極的に果樹園の土地を買い増して行き、関東州北の端の普蘭店近くの三十里堡、現在の旅大北路の営城子、旅順近くの龍頭等に広大な土地を買い求め、果樹園を開きました。此等の果樹園は果樹栽培に多大な興味を持っていた伯父の次男、つまりＫＡＮの従兄弟を派遣して、四方山に囲まれた三十里堡の果樹園の経営に当たらせました。此の従兄弟はあるとき日本に果樹園見学の団体に入って、日本に行き、帰りにひそかに日本の二十世紀梨の苗木を上着のポケットに入れて持ち帰り、果樹園の梨に接ぎ木をして育て、日本の二十世紀梨より大きく薄黄色のみごとな梨が出来ました。それを次第に増やして行く間に、日本敗戦となり、内戦となり、従兄弟は逮捕され、果樹園は人民公社になって、果樹はす

べて切り倒され、大連産の二十世紀梨は絶えてしまいました。誠に惜しいことでした。この従兄弟は非常に工夫に富んだ、頭の良い男で、農園内の山の斜面に穴を堀り、農園内を流れている川から冬に氷を切り出し、穴のなかに貯蔵して、大きな冷蔵庫を作り、氷をあちらこちらに旨く配置して、恒温室を作り、秋にとれる国光と言う品種の林檎を貯蔵して、翌年の夏の時季はずれに高値で販売して利益を出していました。

三十里堡の土地は非常に肥沃で、何を作っても良く出来ました。近隣の百姓は「宝の地」と呼んでいました。ＫＡＮは今更ながら父の先見の明に感心しています。ＫＡＮの父は大連市内にも多くの家作を持って居り、その中の一軒は繁華街の浪速町（今の天津街）に三階建の道路に面した大きな建物でした。ＫＡＮの父が住んだのは大きな一軒建の家で、他にそれぞれ形式の違った八軒の家作がありました。此等の家作も日本敗戦後すべて没収され、沢山あった政記輪船公司の株券も全て紙切れとなりました。

従兄弟は又多くの家畜も飼育して居り、羊が数百頭、鶏が数千羽いました。当時は家畜の伝染病もあまりなく、良く育っていました。旅順工大時代、ＫＡＮが友人を連れて農園で一泊しますと、従兄弟は羊や鶏を殺して、御馳走をして皆を喜ばしてくれました。ＫＡＮ達は空気銃で農園の鳥や針ネズミを撃って遊びました。悩みの種はベッドに集まる南京虫で、従兄弟がベッドの脚を洗面器に水を張って乗せ、これで安心と安眠しましたが、数日すると南京虫は天井に登り、そこからベッドに落ちて襲撃して来ました。

果樹園に行った時は、よく木になった林檎をもぎって食べましたが、或るとき一番美味しそうなのをもぎっていますのを、伯父に見つかり、厳しくしかられました。いくら食べても良いが、食べるならカラスが食べて穴のあいたのを食べろ、カラスはどれが美味しいかよく知っているし、穴のあいたのは売りに出せない。それから食べろと言われました。

ＫＡＮは男四人、女一人の三男で、小さいころから良く出来たので、当時の金持ちの中国人が皆そうした様に、最初中国人が通う小学校、**西崗子**（せいこうし）公学堂に通っていましたが、五年の時、一夜、公学堂校長宅を訪ね、上手な日本語で、一年落第でも良いから、是非住宅近所の日本人の通う聖徳小学校に入学させて欲しいと頼み、その翌日ＯＫを得て大連の聖徳小学校の五年に編入させて貰い、中学校は大連中学、そこを四年修了で旅順工大を受験、合格しましたが、父は此の入学許可を聞かずに、長年患った糖尿病で病没しました。

ＫＡＮの祖母の実家も大地主で財閥でした。子供のころ、祖母の実家の大きな四合院の別棟の先祖を祭る家廟に親族一同、衣装を改めて先祖の礼祭に出席していました。母はＫＡＮが台湾に居る頃に亡くなり、未だ改革解放前で、亡くなったことも知らず、解放後初めて知りました。この様な家庭環境でしたので、ＫＡＮは終戦まで金の苦労はせずに大学を卒業出来ました。美人の妹はＫＡＮが聖徳小学校に入学した翌年に、下の弟も六年後に、成績の良かったＫＡＮの頼みで聖徳小学校に入学出来ました。長兄は東京麻布獣医専門学校卒業後、奉天（瀋陽）農大教授、父の昔の会社、大連政記公司、五金部ハルビン支店長を歴任、日本敗戦後は大連衛

生局長、軍の広東獣医処長、貴州獣医処長を経て、定年退職とＫＡＮと違い割と順調な人生を送っています。次兄は余り勉強が得意でなく、大連商業講習所の入学試験には、ＫＡＮも一緒に受験、隣に座って、受験番号を取り替え、次兄は合格、ＫＡＮは不合格で無事、次兄は入学出来ました。いわゆる替え玉受験です。妹も聖徳小学校卒業後、日本人の女学校、昭和高女に入学しました。弟はＫＡＮが大連中学校長に頼みに行きましたら、勅語の暗記で一、〇〇〇人の日本人生徒の中でただ一人、立派な字で一字も間違えず書き上げ、修身の時間に皆の前で誉められ、その後修身は卒業まで九八点の実績が物を言って、ＫＡＮの弟ならと無試験入学にして貰えました。

ＫＡＮが中学校で得意な学科は、歴史、数学、図画、と習字で一番の苦手は日本語で、どんなに頑張っても七〇点を越すことは希でした。それと辛い思いをしたのは柔道の時間に正座することです。中国人は生まれて以来座って居りませんから、一時間も二時間も座らせられると、あと立てなくなり、足の痛みが二～三日続きました。それと軍事教練の査閲で何時間も寒い中を立たされると本当につらい思いをしました。隣に立っている友達が、小便を漏らしてしまい、それがずぼんに凍りつき血が滲んでいることもありました。ただＫＡＮが住んだ大連は北の満洲国と違い日本が統治する関東州と言う行政区画で北の瓦房店から南の中国人は州民と呼ばれ、学校では満洲人と呼ばれました。

しかし旅順工大はもともと日中共学を学是としていましたから、所謂差別を受けたことは

ありませんでした。父は四人兄弟の三番目、長男は他家に養子に行きましたが、あとで戻っています。次男四男は百姓で、農園と畑を経営、父だけが祖父に学問を教えてもらい、大連に出ました。ＫＡＮの遠い親戚で満人専門の中学校、旅順高等公学校卒業後、日本の陸軍士官学校に入学したのが居ります。家は旅順の今の大連北路沿いの黄泥川と営城子の間の山の中の人家のないところにあり、良く土曜日には大連のＫＡＮの家に来て、仲よく付き合っていました。陸士卒業後、行方が判らなくなり、彼の家の方も困っていましたら、或る日突然日本の憲兵が彼の辺鄙な山の中の家にやって来て、色々訊問されましたが、家族は何一つ知りませんでしたので、結局要領を得ずに帰ったようです。あとで聞いたのでは、従兄弟は東京から直接重慶に行き、国民党に入り、中国軍軍人になったのだそうです。

この従兄弟とは、ＫＡＮが大連脱出後、奉天（瀋陽）で会いました。国民党中央軍の立派な将校となって来て居り、当時中校＝中佐だったと思います。毎晩ダンスホールでダンスに耽っている様な生活でした。当時の国民党の腐敗の一面でもあった様に思われます。彼は共産軍が瀋陽占領後、乞食同然の姿で歩いて瀋陽から六〇〇㎞離れた天津まで脱出、途中では玉蜀黍（とうもろこし）（包米＝パオミー）の黴（かび）の生えた餅子を貰って飢えを凌いだそうです。そこから彼は中央軍と一緒に台湾に渡り、国民党が支配する台湾で、軍籍を復活され、情報局に勤務していました。ある期間は郵便物の検閲をして居り、台湾に渡った後、ＫＡＮは一晩彼と一緒に食事をした折り、「ＫＡＮの日本の友人宛の手紙は皆読んでいる、内容も人も良く覚えているよ」と謂われ、ＫＡＮ

は驚きました。何か蒸気を当てて封を開くのだそうで、共産党との交信を防ぐ為だと言っていました。勿論ＫＡＮが日本の女性に当てた手紙も皆読まれていました。

台東の東の海に緑島と言う島があり、思想犯や黒道（やくざ）が多数収監されて居り、重罪は銃殺で、その他の者がここで服役していました。（編著者注記＝日本でＴＶ放送された、山崎豊子さんの「大地の子」の陸一心の辺境での思想改造と軌を一にするものです。）

旅順工大

こうしてＫＡＮは旅順工科大学予科に入る前に予備科に入学、ここで当時の中国人留学生はすべて、一年間日本語を習いました。

旅順工大は日露戦争後、満蒙開発には技術者が絶対必要と言う信念で、後の東京市長、後藤新平伯爵が日露激戦の地、旅順の西地区を副官を従えて馬で駆け回り、此の地に工科の大学を作れの号令で出来た学校で、最初は旅順工科学堂と称し、昇格後旅順工科大学となり興亜を其の目標とした学校でした。大学本館は帝政ロシアの海兵団の建物で、ロシア風の三階建ての美しい建物で、現在は中国海軍の病院になって居ります。

当時の予科生は全寮生制度で、学校の側の月見ヶ丘に建てられた、全部で四寮、東、中、

西に北の寮があり、北は炊事部委員、雑誌部委員室の外は、各運動部の合宿用に使われ、他の三寮は各四室に分かれ、廊下を挟んで西側にずらっと並んだベッドを置いた寝室、反対側に各学生の机を並べた自習室が有りました。ベッドの南端が中国人留学生のベッドでした。日中共学をモットーとした旅順工大は、其の一割位を中国人留学生が占めていました。日本人学生はＫＡＮが入学した頃は、軍部の締めつけが次第に厳しくなって来てはいましたが、皆大いに遊び、運動し、試験の前だけ優秀な学生の回りに座って「山掛け」をして貰っていましたが、中国人学生は皆熱心に勉強するので、一番は各学年とも中国人が占めていることがあり、それでも日本人学生はおおらかなもので、大分留年して六年かかって予科三年を終えた豪のものもいました。

　中国人学生が驚くのはいわゆるストームです。日本人学生は何かあると今で言うコンパを旅順旧市街（新市街は学校地区で所謂飲み屋はありませんでした）で、出来上がった学生は、早ければ十二時頃から最終バスは二時頃まで、デカンショ節を歌って十二の部屋を回って来ました。ですから今日は何部の会と分かると、何時も騒ぐのは決まっていましたから、今夜は誰それが来るぞと皆覚悟して寝ていました。大体は中国人に遠慮して上に乗って来ませんが、中には上に馬乗りになり、酒臭い息を吐きながら、満蒙の経倫を説く人もいました。中国人予備科生、予科生のなかに、ＫＡＮと一緒に入学した、吉林から来た袁（えん）と言う男は此のストームに恐れをなして、学校をやめて帰ってしまいました。

この予科の興亜寮時代も、中国人留学生への日本の憲兵の監視はきつく、ちょいちょい同窓の留学生が憲兵隊に連れて行かれ訊問を受けました。ある日ＫＡＮの机の引き出しに国民党や共産党の宣伝ビラが入って居り、読んで又引き出しに戻して置きましたら翌朝には両方とも無くなって居りました。ビラの内容は「中国を愛せよ、祖国を忘れるな」と言うようなものでした。留学生の中には憲兵隊に連れて行かれ何日も拘留されたり、予科の途中で国民党の重慶や、共産党の延安に走ったものも居りました。

ＫＡＮは予科時代はクラブ活動はア式蹴球（今のサッカー）のフルバックをやっていました。中国人留学生は此のア式蹴球と籠球をやっていました。日本人は柔剣道、弓道、野球、陸上競技、ラグビー、グライダー、乗馬、射撃と多彩なスポーツに取り組んでいました。射撃は大学専用の三〇〇ｍの射撃場を大学の裏山に持って居り、三八式歩兵銃で実弾を毎日バンバン撃っていました。そのほか毎年、寮飾りと言って三日間学校は休みで、自習室に色々飾り物をして、当日は旅順高女を先頭に、一般父兄が見物に来て、投票、一等には当時で十円の賞金が出て其の部屋は、旧市街に出て祝賀会、あとは恒例のストームでした。

寮生大会はやはり自作自演の芝居を各室が何日も猛練習をして演じ、やはり賞金が出ていました。中国人留学生も手伝いましたが、どちらかと言えば見る方でした。寮の部屋は一年毎に替わりますが、ある年、ＫＡＮの居た部屋が「上海の花売り娘」と言う題で作った寮飾りが一等賞になり、当時で十円の賞金を貰い、部屋の皆で旧市街の工大生出入りの木村屋と言う料

亭で大騒ぎをしました。

寮には中央に光風閣と言う立派なホールがあり、興亜の額と一緒に窓はステンドグラスが入り、椅子テーブルも立派なもので、弁論大会などがあり、何か創立者が学生の時代からこの様な風格のある場所で集会を持ち、人格を形成する様にと作られたものだそうです。毎晩の様に皆で当時で二十銭位を出し合い、新市街の泰豊楼と言う中華料理店に一ヶ二銭の「ぶたまん（今の焼餃子）」を頼み、新聞紙に包んで（新聞紙で包むと焼餃子が柔らかくなって、大急ぎで食べやすくなります）中国人の小核（しょうはい）（ボーイ）が自転車で、寮の入口の新聞閲覧室まで持って来るのを受取り、部屋で皆で一緒に箸をつっついて一緒に食べました。早い人は二十も三十も、遅い人は五ヶと言う状態で食べましたが皆でワイワイガヤガヤ食べた記憶は楽しいものです。

忘れられないものにチフス騒動があります。ＫＡＮが予科一年の時、寮内でチフスが発生、三十七人が旧市街の白玉山麓の伝染病専門病院に入院、其の中の八名が亡くなりました。全部日本人で中国人からは患者は出ませんでした。中国人は当時は二〇〇人が一緒に入る大食堂の東の隅に、中国人専用のテーブルで別の賄いの中国料理を食べていました。朝の饅頭とおかゆの食事は美味しく、自治であった日本食から炊事部委員の文句を押し切って中国語の勉強になると理屈をつけて何人か日本人も食べて居り、何時も朝寝の日本人が此の朝食を食べたくて早起きすると言っていました。此のチフス騒ぎの時、中国人の賄いが中国人の皆を集め、にんにくを出して「此れを生でかじれ、そうすればチフスに罹からない」と言って食べさせました。

このにんにくの殺菌力で中国人は一人もチフスにかかりませんでした。

此の中国人料理もあとになって、「時局柄そんな贅沢は出来ない。皆同じものを食べろ」と言う当時の寮監の指示で廃止させられ、皆味噌汁の朝食になりました。そのお陰で刺身と海苔が苦手の中国人も、なれで刺身と海苔を美味しく食べることが出来る様になりました。このチフス騒動のときは一ヶ月間秋の臨時休暇となり、全員、四ｍ×七ｍの大きな寮の風呂に消毒水を入れて、身体を消毒、検便後帰郷しました。

結局、チフス発生の原因は判りませんでした。ＫＡＮはこの休暇を利用して、華北の天津、北京、塘沽などを回り、北京では京劇を見たり、東安市場の料理店で薪で焼くジンギスカンを味わいました。

一九四四年には中国四川省から飛んで来たＢ29が大連、旅順の上空にも飛んで来て、大連の鞍山昭和製鋼所のビルが爆撃を受けました。

南順三先生

予科で最も印象に残っているのは、ドイツ語の南先生です。大変な語学の天才で、ドイツ語の他に、英語、ロシア語、中国語もしゃべられました。大変シャイな先生で、ドイツ語の授

業の時は、教科書で顔を隠すようにして教えて居られました。先生がドイツ語を読まれる時は、余りにも美しいドイツ語に皆聞きほれていました。先生は数少ない独身の先生で、たまたま先生が旅順高等法院の招聘でロシア語の通訳をされ、そのロシア語の堪能さに、高等法院長に見込まれ結婚を勧められ、高等法院長のお嬢さんを貰われましたが、予科生の予想通り勉強一筋の南先生は奥さんをほったらかしにされ、日ならずして離婚され、終身独身でした。良く学生が行った旧市街のロシア人経営の喫茶店でロシアケーキとロシア紅茶をすすりながら、ロシア人経営者とロシア語で話をされていました。

　此のロシア人は戦争末期、敗色濃厚で頭に来ていた、特高（特別高等警察）につかまってしまいました。終戦後、ロシア軍が旅順にも進駐して来て、たまたま街でうろうろしていた、日本人予科生が捕まり、伊藤博文総理をハルビン駅頭で暗殺した朝鮮人安重根（あんじゅうこん）が絞首刑にされた十三階段の死刑台がある、旅順監獄につながれ、たまたま廊下を見ていたら、南先生がロシア軍人と一緒に通られ、声を限りに叫んで、「どうしたの」と言うことで、直ちに釈放されました。

　先生は帰国後関西大学でドイツ語を教えられた後、引退されましたが、此の予科生は命の恩人南先生の恩を忘れず、後年亡くなる前は須磨の老人ホームで過ごされた南先生を皆でカンパして生活費の補助にと差し入れたり、終生お世話をしたそうです。先生は亡くなるまで、外国語の翻訳をやって居られたそうです。

木谷要一先生

ＫＡＮは本科は機械工学に進みましたが、物理担当の木谷先生は大変優れた先生でした。物理実験の際に「此の課題をしっかり覚えなさい。卒業後此の中の一つや二つは必ず使う機会が出て来る」と言われた言葉を今も覚えています。何時も研究に励んで居られ、或るとき学生全員を集められ、原子爆弾の話をされ、核分裂の理論を学生に判りやすく説明され、「各国が競って研究して居り、此の実現をした国が此の戦争に勝つ」と説いて居られました。

終戦後引き上げ船を待って大連に居られた先生は、引き上げ者の荷物は一人二〇Kgに制限されるので、先生の膨大な資料は持って帰れず、先生は皆頭の中に詰め込むべく、寝食を惜しんで勉強され、とうとう大連で発病、帰国を目の前にして無くなられました。先生は色々の物理学の著書を書いて居られ、誠に惜しい人を失いました。

城野和三郎先生

応用化学の先生でＫＡＮは直接教えを受けて居りませんが、終戦後先に引き上げられた先生は、文部省の臨時嘱託となり、引き上げ時持ち帰られた全員の名簿を外務省に預けて、卒業

証書、在学証明書の発行のもとを作られ、一年後次々と引き上げて来る、在校生を本科生は主に京都、東京、九州の各大学に同学年で編入、予科生は主に一高、三高に無試験で編入させて貰われ、在校生の皆の大恩人で、今も九十七歳、同窓会にも出席され、大きな声で皆としゃべって居られ、ＫＡＮも何時も同窓会でお会いしていましたが、この原稿を書いている間に二〇〇一年六月二十九日に大阪府泉南市の御自宅で、九十七才で急逝され、葬儀に参加した旅順工大卒業生は、校歌「平和の鐘」を歌ってお送りしたそうです。先生は旅順工大の学士論文で博士になられた唯一人の優れた方です。

西川文吉先生

旅順工大の先生ではありませんが、ＫＡＮには忘れ得ぬ先生です。西川先生は旅順民政署（関東州の行政組織）の庶務課長時代から、ＫＡＮの父親とは兄弟の様に仲良しでした。先生は中国語が大変お上手で、中国人からも尊敬されて居りました。毎月一回はＫＡＮの父親の自宅に見えて、父は家庭料理や水餃子を作ってもてなして居りました。ＫＡＮが旅順工大に入学しますと、保証人が要りますが、西川先生はすぐ捺印して下さいました。

よく旅順旧市街の西川先生の官舎をお訪ねしましたが、油絵の好きなＫＡＮが、北京の北

海公園の白塔の絵を描いたものを差し上げましたら、終戦のときまで、御自宅の客間に飾って居られました。戦争が厳しくなり、食料が不足して来ましたが、ＫＡＮは長兄と一緒に旅順民政署に玉蜀黍（とうもろこし）や大豆などを貰いに行きましたが、先生は係長に命じて、麻袋の穀物を倉庫から出して下さり、翌日人夫に頼んで、馬車で頂きに参りました。

戦後先生とは連絡が途絶えましたが、ＫＡＮは台湾から、旅順工大同窓生の蒲原さんに頼んで捜して貰いましたら、幸いに同窓生の父親も旅順市役所に勤務されていたので、短期間に捜して下さり、米原に居られることが判り、ＫＡＮが日本に参った折りに、連絡を取り合い、大阪でお会いすることが出来ました。次の機会にはＫＡＮは台湾製の銅の火鍋子の鍋を持って、同窓生の蒲原さんと一緒に米原の御自宅をお訪ねし、火鍋子（ホーコーツ）を囲んで、御家族一同と楽しい一日を過ごしました。先生に次いで奥様も亡くなられた後も、お子様の生存者と連絡を取り合い、お盆には御家族と一緒に、何回も先生のお墓にお参りしています。

小倉勉先生

地質の先生で、満洲国を作った関東軍の悩みの種は石油でしたが、石油を求めて遥か南の現在のインドネシア、パレンバンに落下傘部隊を降下させて、石油資源を確保しましたが、輸

送ラインをアメリカの潜水艦に脅かされ次々と輸送船を失いました。小倉先生は地質構造からチチハルの近所に石油が眠っていると発表されましたが、当時の日本陸軍は満洲（現在中国東北）には石油は出ないと思って居り、この意見を無視しました。当時南満洲鉄道株式会社の調査部に居られた、旅順工大の大先輩は国境周辺を、トラックに警備の陸軍の一分隊を乗せて、具に調べて回って居られましたが、チチハル周辺で、油徴と称する、溜り水に油が浮いているところがあると言う報告が耳に入りましたが、やはり軍は無視してしまいました。最近此の先輩は、奥さんの妹さんの主人の戦死された、東北の西の国境、ハイラルを訪ねられた折り、汽車でチチハル近傍の大慶油田を通られ、当時の日本の全体の石油使用量が海軍を入れて、年二〇〇万トン、現在大慶油田では毎年五、〇〇〇万トンを産出しているのを考え、感無量だったと同窓会誌に書いて居られます。

小倉先生はチチハルの南とおっしゃって居られたそうですが、終戦後中国の著名な地質学者、李四光先生はチチハルの北と考え、試掘しましたら、地下数百メートルで石油が出たそうです。此の石油を日本側が見つけていたら、大分歴史は変わったかも知れません。

卒業証書

ＫＡＮは半年繰り上げて昭和二〇年九月に、卒業論文も書かずに、旅順工大を卒業しました。既に同年八月十五日に戦争は終わって居り、大連の第一中学校に旅順工大の本部がありそこで安達学長から直接卒業証書を手渡された時は、ＫＡＮは涙が出る程感激しました。安達学長は先代の学者肌だった野田学長に替わって日本中央から派遣された学長で、私共中国人留学生から見れば、日本軍国主義の象徴のような方でした。戦後山梨大学長になって居られますが、戦後はお会いする機会はありませんでした。大学に通勤するのに、学長専用大型自動車に乗らずに、乗馬服姿で馬に乗って通勤されていました。こうして手に入れた旅順工大の卒業証書は脱出時には持ち出せませんでした。今となっては何処にあるかも判らず、行方不明となりました。

中国人卒業生は例の文化大革命と言う政治動乱で、紅衛兵と言う赤いネクタイに、手には毛沢東語録を振りかざした人々に例外なく、つるし上げられ、本人のみならずその子弟までいじめられました。（編著者注記＝此れは山崎豊子の「大地の子」で良く説明されて居ります。）卒業証書が共産軍に見つかったら大変でしたが、このため台湾に渡った後に、友人の勧めで公務員の先生になるのには、此の資格審査の為、卒業証書が必要で、その後日本に行ける様になって、旅順工大同窓会本部にお願いすれば外務省で城野先生が持ち帰られた名簿を元に、卒業証書も在学証明書も発行して下さるようになり、あとでＫＡＮも外務省で元大連中学同窓のグアム総領事だった永島さんに頼んで卒業証書を貰いましたが、当時はやむを得ず、偽造を考え、同じく台湾に渡った大学先輩の本物の卒業証書をお借りして、友人に教えて貰った、台北

万華区（比較的に低級な地区）にある、小さな印刷屋に頼みに行きました。印刷屋は印鑑だけは自分で作れ、絶対に誰にも判別出来ない物を作ると言いますので、当時台北に居た、旅順工大同級生と二名で頼みました。割と高い前金を払わせられました。数日後取りに行きましたが、写真製版で用紙も同一で本物と変わらない立派な卒業証書が出来ていました。友人と早速芋を買って来て、本物の印鑑のところに薄い紙を当てて、型をとり、芋に彫刻刀で彫り込み、印鑑を作り、押して見ましたら、立派な卒業証書になりました。此れに安東、瀋陽の職歴証書を揃えて、教育部に資格審査の申請書を送りました。

一ヶ月位して、二名とも中国の三年制高等工業学校の学歴資格を証明すると言うものです。二名とも母校旅順工大は東大とも肩を並べる、入学の難しい大学と思って居りましたから、大いに不満で、公務員の給与も一般大学卒に比べてずっと低く査定されました。此れは当時の台湾政府の教育部（文部省）の認識不足によるものですが、最近の日本の入国管理局も中国人技術者の就労審査の際、やはり三年専科は条件を悪くして、四年制なら卒業後直ちにでもＯＫが専科は専科を含めて十年以上の実務経験を条件にして居ります。

いずれにしても卒業時の学制が替わってしまっていますので、抗議のしようもありませんでした。こうして就職した台北工専の職も、やはり資格審査の問題で夏休みが終わって新学期が来て止めざるを得なくなりました。日本でも学歴詐称で議員を辞めた方が居られますが、ＫＡＮにとっても卒業証書は問題多いものでした。結局ＫＡＮは公務員への就職をあきらめて、

民間企業への就職の努力を始めざるを得なくなりました。当時は台湾の公務員は学校の先生は別として、一般の公務員にはなかなか就職出来ず、背景（即ち親戚や友人関係＝コネ）に偉い人が居ないととても無理だったのです。

ソ連侵攻

旅順工大本科三年の八月初め、ソ連に対抗する為、学生全員が動員されるとの指令が出ました。中国人留学生も全員だとのことでした。しかしこの指令実行の直前に日本が天皇陛下の詔勅で連合国のポツダム宣言を受諾して、全面降伏する昭和二〇年（一九四五）八月十五日の一週間前にソ連軍は満洲の国境を越えてなだれ込んで来ました。アッと言う間に大連にも侵攻して来ました。

彼らの暴虐行為は日本で沢山報じられていますが、何故日本は戦争最後に此のソ連に和平の仲介打診をしたのでしょうか？　その四十年前に、日本は当時の帝政ロシアと此の大連、旅順で死闘を演じて、この地を手に入れたのをソ連が忘れてくれていると考えたのでしょうか。

最近湖北省のある中国人が日本の大分県の国際交流課に一年契約で来日、所謂官費で大連、

旅順に来る機会があり（大連、旅順は東北の中国人には新婚旅行のメッカ、南の人たちも海岸線の美しい此の地は、一度は観光に訪れたいところです）二〇三高地や東鶏冠山北堡塁などの日露の戦跡を回り、帰国後知人の日本人に「旅順、大連は日本がロシアと戦ってロシアから取り上げたから、日本の敗戦で中国に戻った」と言うのです。

確かに若しロシア、ドイツ、フランスの三国干渉で日清戦争の勝利で日本が清国から租借した、此の遼東半島を清国に返還させ、それをロシアは強引に租借して、永久要塞や大連の美しい街を建設していました。不凍港を持たないロシアには念願の港だったわけです。このロシアの本質を日本の松岡洋右外相は見抜けず、モスクワに出向いて日ソ条約を結び、丁度ＫＡＮが予科時代に大連飛行場経由帰国しています。此の湖北の中国人が言う様に、若し日露戦争で日本がロシアから取り返さなかったら、今の北方四島の権益どころでない、遼東半島は革命後暫くは、ソ連に色々助けて貰う他なかった。中国共産党も容易にはソ連から返して貰えなかったと思います。

しかし今回の侵攻は相手が内部が麻の如く乱れた清国と違いますから、永久占領とは行きません。此の時ソ連は同時に、中国西の方の敦煌などにも侵攻しています。そして莫高窟のなかで駐屯して、炊飯の煙で貴重な文物を台無しにしています。大連でも侵攻後真っ先に、時の関東軍司令官官舎や関東州長官官舎に乗り込み、所蔵されていた泰西の名画を真っ先に持ち帰っています。予め何が何処にあり、何が値打ちがあるか調べていなくては出来ないことです。

旅順に侵攻して来たソ連軍はかっての彼らの海兵団であった旅順工大本館に入り、貴重な文献資料はもとより、高価な冶金の資料なども皆廃棄してしまいました。泰西の名画や予め調べていた工業施設と違い、最高学府の資料は、ソ連軍にはただのゴミであったわけです。

満洲国は其の設立は早くから、旅順に日本軍が助けて逃げて来ていた、粛親王を担いで、川島浪花と言う日本人が画策して居りましたし、溥儀を担いで初代皇帝にしたのも、甘粕陸軍大尉などですが、其の前に東北の軍閥、張作霖が北京で国民党と会談を行い、瀋陽に帰って来ていましたが、関東軍は瀋陽南部の皇姑屯で張作霖が乗った列車を爆破して殺してしまっています。張作霖とその息子の張学良が満洲で力を持っている間に、何故日本は取引で工業の満洲進出を考えなかったかと思います。

ソ連侵攻当時、瀋陽は国民党軍が押さえていました。大連市民は共産党軍より国民党軍が来るのを期待していましたが、ソ連軍がいち早く大連に入った為に、国民党軍は普蘭店まで来て止まり、ソ連は石河までで対峙していました。ソ連は軍隊を駐留、行政は山東半島から船でやって来た共産党軍が治めていました。共産党軍は大分ソ連に気を使い旅順にはミイラで有名な旅順博物館前に中ソ記念塔を立てて中ソ合作を宣伝していました。此の記念塔は今でも残っています。ほかにも大連、瀋陽、長春の駅前にも中ソ友好記念塔を作りましたが、今は殆ど残っていません。

共産党は大連で先ず大連神社の鳥居、本殿を壊し、旅順でも関東神宮本殿や白玉山にあっ

た納骨堂は壊しましたが、明治時代に建てられた旅順を象徴するろうそくの形をして高さ五〇余ｍの日本時代の表忠塔はそのまま残しました。名前は白塔となりました。日露の激戦で有名な二〇三高地の乃木将軍の筆になる**塁霊山**（じれいさん）の記念碑もそのまま、露天博物館として残しました。韓国では日本統治のうらめしい遺物として、朝鮮総督府の塔も最近壊されましたが、台湾では日本時代の総督府庁舎はそのまま台湾総統府として使用していますし、この辺が大分違います。大連でも関東州庁は今も大連市庁として使用されていますし、その横の地方法院は今でも地方法院、警察署は今でも公安局として使っています。

　共産党は最初の大連市長には民間の有力者を据え、副市長にＫＡＮの長兄の中国人高校の先生で早くに延安に行って共産党に入り、教育を受けて来た領導が就任していました。長兄は此の先生の依頼で獣医だったのに、衛生局長に就任、毎日市庁舎に通っていました。此のロボットの市長は阿片窟の経営者でしたが、後に銃殺されています。

　共産軍は装備は貧弱でしたので、共産党は当時瀋陽を押さえていたすべて米国装備の最新鋭の兵器を持った、国民党中央軍の最精鋭の第一軍、第六軍に対抗するため、東北民主聯軍を組織し、ゲリラ戦術で対抗し、大連ではこの地区を占領したソ連と手を結んで治めていました。ソ連軍をうまく利用したのだと思います。ソ連軍が来てからは、ＫＡＮが使っていた日本紙幣は紙切れとなり、ソ連の赤い軍票を使うことになりました。此れも一歩石河を越えて国民党軍支配下に入ると紙くずになります。国民党は東北では、東北九省流通券を発行して使っていま

した。中国は所謂軍閥が各地に割拠していた時代、それぞれ地方の軍閥が紙幣を発行しましたし、日本軍も軍票を使っていましたから、頼りになるのは金の延べ棒で、普通サイズ一本十両と言う単位で使われていました。此れに多少小振りですが、純度の高い香港製のものが、香港条と呼ばれ一本五両で皆に歓迎されていました。日本統治下でも一般の人は余裕のある金はすべて金の延べ棒に替えて持っていたのです。

兎に角何処に金が隠してあったのか、例えばＫＡＮが教え子のお陰で当時国民党が押さえていた瀋陽から錦州まで空路で軍の家族切符で無料で脱出しましたが、此れが一般には最低で金の延べ棒五本、五十両以上と言う相場でした。

当時話題になりましたが、或る金持ち連中が、民間航空機で金を一杯積み込んで、瀋陽から北京に脱出を計りましたが、積み荷が重すぎて、瀋陽離陸直後、瀋陽郊外で墜落しました。乗っていた金持ち連中は全員死亡、附近に散乱した金の延べ棒は国民党政府に没収となりました。

終戦直前ソ連侵攻に備えた日本軍は数も少なく、片方ソ連は最新鋭の戦車を多数並べて侵攻、日本軍の一部は守備していた東寧から徒歩で、牡丹江にたどり着いた時には、郊外に並んだソ連戦車の一斉砲撃を受けて、更にソ連戦闘機に繰り返し銃撃を受け、この近所の道路には日本軍の戦死者が累々と折り重なっていたと言います。

ここらの事情は日本で数多く状況が出版されて報告されていますが、日本の国策で、農村の次男、三男が満蒙開拓団として、多数ソ満国境に入植、このソ連侵攻で多くの犠牲を生みま

した。日本では世界に向けて平和を訴えていますが、戦争は一向に減らず、教育の荒廃も叫ばれながら、なかなか好転しません。マッカーサーの命令と聞きますが、ＫＡＮが叩き込まれた教育勅語の精神は今はどこに行ったのでしょうか？

ソ連の侵攻の狙いは、日本の残した沢山の工業施設でした。大連には旅順工大の大先輩相田さんが社長をして居られた、従業員が一万人も居た大連機械株式会社がありましたが、ＫＡＮは本科三年の時に、実習で行った工場でしたので、ある日わざわざ見に行きましたら、残っているのは建屋だけ、中の工作機械は一切ソ連が撤去してしまっていました。機械の基礎ボルトまで抜いて持って行って居りました。その外の戦車製造工場、機関車製造工場も残ったのは建物だけでした。ソ連は全く戦争をせずに巨額の工業設備をそれこそ根こそぎ手に入れたのです。中国領土内の略奪なのに、国民党も共産党も互いに戦って居りこの暴挙に対して一言も言えない状態でした。

瀋陽でも日本が建設した最新鋭の鉄西工業地区の各社の機械は全てソ連が運び去りました。ソ連は日本が最後の和平仲介を頼んで来たのを見て、此の機会を逃さず予め調べていた工業施設を根こそぎ持ち出したわけです。あの巨大な鞍山製鉄所も運べる設備は皆運び去ってしまいました。同時に満洲に居た日本軍人、軍属五十万人以上はまるで奴隷の様にシベリアやソ連各地に連れて行かれました。

共産党は全国平定後も此の工業復興にやはりソ連の力に頼らざるを得ない状況に有りましたし、旅順名産の林檎は中国人民の口に入らず皆新しい工作機械のソ連からの輸入の代品としてソ連に送られました。ソ連は自分等が持ち出した後の補充に今度は高い代金でチェコのスコダなどの機械を送ったのです。鞍山の製鉄所にも非常に高給を払ってソ連の技術者が来ていました。当時の毛沢東の給与が七〇〇元、京劇の名女形、梅蘭芳が一、〇〇〇元の時代にソ連の技術者には五、〇〇〇元払っていました。そして宴会の度に外国からの来客にはソ連の人が居ないのに、「偉大なる盟友ソ連の」と演説していましたが、やがて其の蜜月も終わりました。

共産党が大連に来る前、ＫＡＮは大連臨時中学で数学を教えました。他に日本の教育を受けた大学卒の中国人がどうせ仕事がないからと無給で教えていました。此の時の教え子がＫＡＮの脱出の際、各地で助けてくれました。今も一部の教え子は台湾に居ります。住まいは父が全盛時に大連市内に八軒の大きな住宅を建てて居り、其の中の一軒に下に長兄、二階にＫＡＮが住んでいました。日本降伏後一年位の間に、引き上げ船が来る度に、同窓生や日本人は次々と引き上げ、其の都度ＫＡＮは大連埠頭に見送りに行きました。他に残留を望まれ人たちが各地の工場で技術顧問として、指導に当たって居られ、旅順工大の先輩も多数留用されて残って居られました。木谷先生も大連に居られ、後に病気で亡くなられますが、お伺いして、大連臨時中学の生徒に新しい科学のお話を中学生に判る様にお話し下さる様にお願いしましたら、喜んでお出で頂き、一時間程お話し下さり、生徒も熱心に聞いて居りました。、旅順工大の中国

人の大先輩の一人張さんも大学卒業後一時青島に居て、その後太源に走り共産党の教育を受けて大連に戻って居られ、大連市工商管理局長になって居られ、一日大連臨時中学に来られて全校の生徒に一時間程話をして行かれました。そして「今の中国の点（都市）と線（道路と鉄道）は国府軍が占拠しているが、面の方は全て共産軍、即ち共産党が押さえている。最後には共産軍は必ず勝つ、国府軍は必ず負ける。それは絶対的だ。これから皆見て置いてくれ」と演説して行きました。

其の当時は半信半疑でしたが、後に大連を脱出して瀋陽に行き、装備はアメリカ式で一流でも軍規は乱れ、蒋介石の第一軍と第六軍は広東省人が多くビルマで作戦をしていた兵隊で広東語しかしゃべれず、民意をつかめず、一般の農民より上の階級だと威張り、馬車に乗れば金を払う代わりに御者を鞭で殴るなどの暴挙を行い、幹部は日夜酒食に溺れて居り、共産党軍の様に、百姓を手伝い一切暴行を行わないのと比較して「勝負あった」と思いました。共産党は盛んに教育を行い、ＫＡＮも何回も教育を受けました。今でも共産党は共産主義の教育を幼稚園から行い、所謂通信簿の最初は共産党教育の点数がついて居り、何処へ就職するのにもついて回ります。各工場には必ず、工場長より実権のある共産党書記が居り常にあらゆる面を調査をして居り、めぼしい人物は共産党入党を勧めます。現在の中国では日本の所謂官僚機構はすべて共産党員が押さえていますから、工場の工場長を含め、合弁会社の社長も共産党員でないとなれません。共産党員でなければ偉くなれない仕組みになっています。日本の一種高等文官

試験に合格した人が所謂キャリアー組と呼ばれて、出世街道を約束されているのと同じです。日本では教育荒廃が叫ばれていますが、ＫＡＮが一生懸命覚えた教育勅語は天皇制護持の為であったとして、戦後いち早く無くなっていますが、「父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、」と全て子供に小さい頃から教えるべき項目です。日本で子供の殺人事件が起こる度に校長先生の決まり文句は「人の命の尊さを教える」だけです。教育勅語で教えられたＫＡＮとしては全く納得の行かぬことです。日本人は戦後工業、経済に素晴らしい発展をとげて、経済戦争の勝者になっていますが、ＫＡＮの見る範囲では、中国に三十五ヶ所の工場を進出させ、何れも黒字経営をしている松下電器産業株式会社の様に、いいかげんな仕事をする中国人を、朝礼で松下の信条を唱和させ、松下イズムをたたき込んで行くやりかたが、日本の教育にもあって良いのではと思います。

ＫＡＮは旅順工大で本科三年となり、卒業後何をするか考えた時、このままでは何か物足らない気がして、もう少しドイツ語を勉強したいと思い、幸いに費用の問題はなかったので、当時日独伊三国同盟で行きやすかったドイツに行く計画を建て、旅順工大予科で南先生に三年間習ったドイツ語を更に伸ばすべく、ドイツ語の勉強を始めました。大連にはドイツ領事館がありましたので、領事館に行ってドイツの大学等を調べている間に、MISS PANSING と言う女性と知り合いになり、大変な美人で、スタイルも良い人で、良く誘い出してコーヒーを飲みに行っ

たり、ロシア料理に行ったりしまして、ドイツ語の会話の先生になって貰い、将来ドイツに行った時は協力して貰う約束を交わしました。

しかしドイツも敗戦となり、ドイツ行きの夢は実現不可能になりましたが、彼女はアルバイトをして居り、ドイツ語の練習に彼女とのおしゃべりを楽しみました。ＫＡＮの脱出後彼女がどうなったか、どんな運命に会ったか判りませんが今でも彼女の幸運を祈っています。

ドイツ語のヒアリングの練習には、大連の小村公園の向かいにあるペロケダンスホールが文映館と名を変えて、ドイツ映画を専門に上映していました。ＫＡＮは学校が休みの日曜日や休日の日は、朝開店と同時にパンを一つ買って、これをかじりながら一枚の切符で何回も見れましたので、何回も何回も繰り返し見てドイツ語の勉強をしました。最後は六割位は聞き取れる様になりました。今でも当時の大好きだったドイツ人映画俳優のジョンキープラ、マルタエゲルト等の名を覚えています。

此の当時から付き合い今も東京に行った時よく会っている日本人女性Ｗさんがいます。大連聖徳小学校でＫＡＮの一年下だった、妹の同級生だったＷさんは、妹と仲良くなり、次第に家庭同志の付き合いとなり、Ｗさんは良く彼女の両親も連れて、ＫＡＮの家にやって来て、一緒に中華料理や餃子を作って皆で食べて居りました。ＫＡＮもＷさんと次第に親しくなり、妹は昭和高女にＷさんは弥生高女に進んだあとも、彼女が敗戦後１年半位で引き上げるまでも、再三会っていました。彼女の父親は大連工専の教授でしたが、引き上げ後は名古屋大学の教授

になって居られます。彼女とは次第にお互いに心と心が引き付けられて行くのを感じましたが、約束を交わすまでは行かず、彼女は東京に引き上げました。彼女とは台湾に渡ってから再び会うことになります。

当時中国人の間ではやった言葉に

「此処不養爺、只有養爺処、処々不養爺、爺々投八路」

意味は「此処で我等の世話を見てくれない場合、必ず我等の世話をしてくれる所がある。何処でも我等の世話を見てくれないなら、我等は八路軍に入る」

と言うものです。それまでは「聴中央、望中央」と言って、蒋介石の中央軍が来るのを期待していた、大連の人も、瀋陽での中央軍の色々の情報が入ると、中央軍への怨嗟が広がって来ていました。

大連臨時中学に来て演説をした、旅順工大の中国人大先輩張さんは、その後北京で科学技術委員会副主任になった人ですが、彼の線と点の話は何時までも耳に残りました。全くその通りで、日本軍も山海関を越えて中国本土に踏み込んだわけですが、結局押さえていたのは線と点だけでした。当時国内は国民党と共産党の中国人同志の戦いも各地であり、お互いに地区の奪い合いをやっていましたが、延安から四、〇〇〇Kmの長征をして来た共産党軍は兵器は貧弱で、国民党軍はアメリカの援蒋ルートで送られた、最新の兵器で武装していましたが心の訓練が全く出来て居らず、各地で一般住民の心を掴めませんでした。

八月十五日の後、瀋陽近所の日本軍は全員現地に居た国民党軍に武装解除されたのですが日本軍が鍛えた満洲人部隊数十万人が武装解除されたまま残りました。此の部隊は日本軍がソ連に対抗する為に、特に体の頑丈な満洲生まれの中国人を選んだ精鋭部隊だったのです。彼らは南京に移っていた蒋介石に国民政府の中央軍に編入して欲しい。若し編入を許されたら必ず東北の共産軍を追い払うと申出でたのです。蒋介石はその気になったのですが、参謀総長の陳誠は彼らを中央軍に編入するなんて、とんでも無い、彼らは偽軍であると徹底的に反対し、遂に陳誠の意見通りになりましたが、当の数十万の軍隊も、青年学生も国民党に失望落胆、延安から共産党軍にはいれはいれ、誰でも受け入れると呼びかけた、林彪（りんぴょう）の呼び掛けに応じて、共産軍に入り共産軍は大成功を治めました。そして中国中南部に転戦、揚子江を渡り各地で国民党軍を打ち破り嚇々たる戦果を上げました。しかし此の林彪も紅衛兵運動を指導、毛沢東の後継者と謂われながら、クーデターを計画、計画半ばで計画が漏れ失敗、軍用機でソ連に脱出の途中蒙古で墜落して死んでいます。お互いに何時殺し合いになるか判らぬ時代が続きました。此れは武器を使うか使わないかの違いで日本の政界も同じ争いを繰り返しています。特に今の台湾は極端とも言うべき政争が行われています。

中国では国民党が一九四九年一斉に退去したあとで、東北籍（満洲生まれの）国会議員が一時「殺陳誠以謝天下」即ち「陳誠を死刑にして国家に謝罪せしめよ」と叫び出し、一時は大変な騒ぎになったことがありました。陳誠は当時台湾に渡り、国民党の副総統でしたが、民衆

は「彼の判断ミスで国民党は全中国を失った。中国東北に張学良（張作霖の息子）と馬占山（張学良の部下で対日ゲリラ戦で著名な人）を派遣して居れば、民心を掌握出来たのでは」と言う考えでした。

最初の結婚

妹の学友、Wさん一家も日本に引き上げられ、音信不通になり、ＫＡＮの母は世の中の不安を考えると早く孫を抱きたいと、ＫＡＮに結婚をすすめ、ＫＡＮは反対でしたが、母は頑固で、ＫＡＮが途方に暮れている間に母は勝手に縁談を進め、当時学校の先生をしていた、最初の妻と結婚、不老街の持ち家に、上に当時中学校教師のＫＡＮ夫婦、下に衛生局長をしていた長兄が住みました。ＫＡＮの自宅は部屋が十もあるなかなか大きな家で、開放後大連を訪問出来るようになって訪問の折り、真っ先に行って見ましたが、十所帯が勝手に住み込んで居り、「俺の家だったので、中を見せて欲しい」と言いましたが、「それは昔の話だろう。今は俺達の家だ」と断わられました。妻は日ならず懐妊しました。しかしＫＡＮの結婚生活は一年ちょっとで終わることになります。

大連脱出

ＫＡＮはあるとき、大連臨時中学の生徒を引き連れ、もと関東州庁の大連市政府前に出掛け、「食料が不足し、市民は困っている、市政府は食料の確保を実行せよ」とデモを仕掛けました。市政府警備の軍隊は二階のベランダから、空に向かって機関銃を発砲し、生徒はビックリ仰天して逃げ出し、生徒の前に立っていた五名の先生が逮捕され、後ろに立っていたＫＡＮは逃げ仰せましたが、暫くはほとぼりを冷ます為に、田舎に行って隠れました。大連市の市長はロボットで実権を握っていたのは、長兄の先生だった副市長です。

一日長兄は此の副市長に呼ばれ、机の上の書類の束を見せ、「お前の弟は反共行動が多い、而も大地主出身で、資産階級の思想が抜けていない。この様に沢山レポートが上がって来ている、このままほっておけない」と言われたそうです。兄は家に居る時、ＫＡＮに耳打ちして、「此の様に睨まれている。なんとか考えよ」と申しました。兄は此の時、ＫＡＮが逮捕されても致し方ないと思っていたようですが、まさか脱出するとは思ってもいなかった様です。当時国民党軍は普蘭店と言う、金州から北の線でとまり、その南は石河と言うところまでソ連が押さえていました。瀋陽――大連間の路線は此処で切れていますから、全く物資食料の輸送は出来ず、農地の少ない大連地区は極端な食料不足になりました。ＫＡＮは旅順工大予科の時、何時の間にか自習室の机の引き出しに、国民党、共産党の宣伝ビラが入っていたりしましたから、回り

に両方の特務、日本敗戦までは、日本の特別高等警察や憲兵に、二重三重に見張られているのは感じていましたが、恐らく教え子の中にも色々のオルグ（オルガナイザー）が居たことと思います。ＫＡＮの日頃の言動は決して親共的とは言えませんし、若し逮捕されたらひょっとすると殺されることも有ると考え、共産地区から死を覚悟で脱出する以外生きる道は無いと結論を出しました。ことは秘密を要しますし、自分の回りの誰一人相談してはならないと考えました。

こうして誰にも告げずに大連を脱出したわけですが、当然ながら後に残った親兄弟等は大変な目に遭うことになり、ＫＡＮは親兄弟や親戚に一生かかっても償えない不義理をしてしまうことになりました。ＫＡＮが急に行方不明になったので、先ず里に残っていた母親が大変な目に会いました。毎日のように数キロ先の訊問所に呼び出され、「ＫＡＮは何処に行ったか白状せよ」と二時間程訊問されます。母は体調も悪かったのですが、一切返事せず、黙秘を貫いたそうです。

一方、色々の方面で聞いて調べたところ、ＫＡＮの一家は善良な名門で、貧乏な人を何時も助けていたことも判り、母は体刑を受けることなく釈放されたそうです。勿論母だけでなく他の親族も訊問され、なかには体刑を受けたものもいました。考えればＫＡＮの父親が早くに死んでいたことは、この場合はよかったと言えます。もし元気で生きていたら、母以上の苦しい目に遭ったと思います。中国の諺に「不做傷天害理的事、不怕有難」（天を損ない、理を害

する、即ち悪いことをしなければ、何も怖いことは無く、災難にも会わない）と言います。ＫＡＮは何時もこの事を忘れずに、世を渡っています。

当時は大連駅からソ連支配の北限の石河まで毎日一～二便の汽車が出ていました。ソ連の軍票があれば切符は買えます。ＫＡＮは知っていた林檎園に行き、昔働いていた**苦力**（クーリー）（山東からの出稼ぎ労働者）から丈の長い綿袍と言う古い服を貰って来て、帯は草のつるで結び、汚い労農者の格好にして、偽の通行証を持って、妻にも母にも告げずに大連駅に来ました。ソ連の軍票は一歩石河を越えれば紙切れですので、切符を買うのと多少の用心の金だけ持ち、万一の用意に、指輪を三個小さい袋に入れて、パンツの紐に括って内側に垂らしました。大連駅では体に触って検査を受けましたが、誰にも咎められず乗車、汽車はノロノロ走って夕方には終点の石河に着きました。宿を捜したところ、駅の近くの民家で部屋を貸していました。

石河はそれこそ何も無いところでしたが、とにかく一夜の寝る所が有ればＯＫです。同じ部屋にもう一人入れると言うことで、もう一人の若い人が入って来ました。何と大連二中の一級下の知り合いでした。それではお互いに縁があったのだから、今晩一緒に脱出しようと言うことになり、連れが出来て心強く思いましたが、これが此の友のせいで危うく命を落とす様な目に遭うことになります。

夜中の三時、小雨が降っていました。脱出者には恵みの雨です。ソ連の警戒網をくぐるのには好都合です。丁度三時、最後の軍票で宿代を払って二人で人生を替える大冒険に出発し

旅順港（中国　大連）

ました。真っ暗な中を北へ北へと歩きました。間もなく前方に東西一〇〇m置きに光が見えて来ました。ソ連の警備小屋です。各小屋にソ連兵が二～三人ずついました。近づくに連れて小屋の中がはっきり見えます。二人は何も研究していませんでしたので、相談の結果、「よし、匍匐（ほふく）前進だ」となりました。二人とも軍事教練で日本の軍人教官から腹が痛くて笑うことも出来ぬほど鍛えられた匍匐前進です。あの腹ばいになって、肘と両足を交互に滑らせ、頭を上げずに行くあれです。幸いに運がよかったのは小雨で視界が悪く、ソ連兵は小屋の中にいました。小屋と小屋の間は一面の収穫のすんだ玉蜀黍畑です。命がけで二人はほふくを続けました。脱出を計っているのは我々二人だけで無い様で、起き上がって走り、ソ連兵に見つけられ、例の自動小銃で打たれ

ている音が聞こえます。此処でつかまったら、大連に送り返され、共産党に引き渡され、その後の運命はどうなるか判りません。二人とも闇の小雨の中で必死でした。

約三㎞も匍匐をしたでしょうか、幸いに監視小屋の灯が遠くなり、次第に見えなくなりました。もう大丈夫と立ち上がり歩き出しました。綿入れの綿袍は袖が破れ中の綿がはみ出し、膝からは血がにじみ出ていましたが痛みは感じません。幸いに両足はどうも無く歩けました。教練の匍匐の練習は長くても五〇m、それでもふうふう言ったのがその六十倍は匍匐で這い通したのです。このときは本当に人間死ぬ気でやればやれるものと思いました。立ち上がって歩き出しますと、闇の小雨の中に、あちらこちらに同じ運命を歩む人がいます。皆無言で誰とも口をききません。そのまま前へ前へと歩いて行くと、何時の間にかパーンと銃声が聞こえ、怪しいと見られた者が、囲まれて体全体を調べられます。なんでなんでと言う感じです。一体何を調べるのかとさっぱり判りませんでしたが、中に「お前は国民党の特務だろう」と詰問されています。それで判りました。彼らはあとで判ったのですが、林彪（りんぴょう）指揮下の東北民主聯軍でした。後に新四軍（第四野戦軍）と呼ばれ、大陸解放に最も力を発揮した精鋭部隊だったそうです。

此の普蘭店と石河の間の数十キロの間は、無政府地帯で、農民は皆逃げ出して誰も住んでいませんでした。そこを共産軍の遊撃隊が占領していたわけです。遊撃隊は時々林から出て来ては、歩いて来る者を囲んで色々訊問しています。何も取られませんので、皆次第に恐怖感が無くなり、自然な態度で応対出来る様になりましたが、此の訊問を何回も受けました。道路は

馬車が通る泥道ですから、轍のあとが深くくぼんでいて歩きにくい道でした。約一〇Km位歩いたところから、次第に夜が明けて来て、約二Km毎に道路に面した民家の軒下を利用して、中共軍の訊問所がありました。真ん中に机を置いて両側に長椅子を置き、真ん中の机には偉い人が座り、両側の長椅子には部下の者が座り、後ろには兵隊が守っていました。訊問を受ける者を一列に並ばせ、一人一人平服の偉い人の前に出ます。

最初にＫＡＮに「お前は何のために国民党地区に行くのだ」と聞きます。ＫＡＮは「大連は食糧が無くなり、このままでは餓死してしまいます」と答えます。前もって色々答えを考えて置きました。顔には絶対に怖いと言う表情を見せない様に、努めて平静を装いました。次の質問は、「お前は何をしていたのか」

ＫＡＮは「私は林檎園の園丁の**苦力**（クーリー）でした」と答えると、「手を見せろ」と言います。両手を見て「嘘を言うな。お前の手は農夫の手では無い」と言います。これにはちょっと困りましたが、ＫＡＮは「休戦になってから、林檎園の木は皆切り倒され、仕事が無くなってから二年も経つのでこんな手になりました」彼は「何故林檎の木を切ったか」

ＫＡＮは「林檎は今まで資本家、金持ちの食べるもので、工農階級はそんなものより林檎を切った後に全部、高粱、玉蜀黍を植える様になり、結局仕事が無くなり、二年間遊んで暮らしていました」と答えますと、偉い人は一分間位じーっと考えていましたが、「そうかお前は国民党でないんだな」と言います。

ＫＡＮ「国民党地区は食糧があるから行くのです。私は農民だから食料さえあれば良いので、政治のことは全く関係のないことです。」と言うと、彼は「そうか良く返事してくれた、お前はもうよろしいから先へ行け」と言いましたが、内心ホッとしながら、顔には出しませんでした。あとの連れの者がどんなことを聞かれ、どう返事したか、もう聞く気にもなりませんでした。とにかく彼はあとから付いて来ました。この様な訊問処が五～六ヶ所ありました。どこでも訊問されることは同じ様なことで、手を見せろと言われたのは、一ヶ所だけでした。

暫く無人地帯を歩きますと、突然銃撃戦です。国民党と共産党の撃ち合いです。国民党は普蘭店南郊の山の上に陣地を構え、森や民家の中の共産党軍に弾を撃ち込みます。共産党の遊撃隊がこれに反撃します。ＫＡＮや皆は森の中や民家の中に逃げ込みましたが、我々逃亡者の中で死傷者は出なかったようでした。小競り合いは三十分程続きましたが、共産軍は小銃だけですが、国民党軍は機関銃も野砲も持って居り、盛んに撃ち込んで来ます。これは大変な戦いに巻き込まれたと思いましたが、決死の覚悟で脱出して来ましたので、死を怖いとは思いませんでしたが、過去のことや色々な思いが交錯して来ました。ようやく撃ち合いが止み、歩き出すと又始まり、隠れる、止む、歩き出す。又撃ち合い、隠れる、止む、歩き出すと三回程戦闘に出会いました。そのうちに夜がすっかり明けました。

それでも国民党が占拠している、普蘭店外周の山の近くまで出ましたら、一安心です。そこまで来ると今まで出会わなかった人たちと出会います。夫々違うルートを歩いて来たので

しょう。

国民党占拠下の普蘭店の分界線近くまで来ました。東西に鉄条網が張り巡らせてあり、道路の突き当たりに、服までアメリカ製の立派な装備の国民党の兵隊が十人ほど自動小銃を持って立ち、鉄条網に一ヶ所、人一人が通れる道を明けて、脱出者を一人一人入れています。ここでは何事も無く無事に通れましたが、あとから付いて来た連れの男が、鉄条網を入った途端に、国民党の兵隊に向かって「気を付け、皆俺に敬礼しろ。俺は大連で特務任務を果たして、瀋陽に戻る国民党軍の士官だ」と威張り出しました。

ＫＡＮは彼に構わず先に行けば良かったのですが、余りの事に唖然として立ち止まり振り返りました。国民党軍の兵隊は「証拠を見せろ」と言いますと、彼は靴を脱いで、靴の中に隠した一枚の地図を出して、「俺は大連、旅順地区に行ってソ連軍の状況をこれだけ調べて来たのだ」と偉そうに言います。兵隊は「此の地図だけでは、お前が国民党か共産党か判らない。身分を証明するものを出せ」と言いますと、彼は黙ってしまいました。兵隊は「お前が国民党かどうか、山の上の司令所に行って調べるから来い。一緒に立っているお前も来い」と言います。ＫＡＮは「私はたまたま一緒になって歩いて来ただけだ」と言いますが「兎に角一緒に来い」と二人は後ろから自動小銃を突きつけられて山の上まで来ますと、途端に又共産軍との撃ち合いが始まりました。国民党軍の兵士は広東語でがちゃがちゃ言いながら、野砲、機関銃、小銃を撃ちまくります。二人は岩陰に隠れていました。撃ち合いが止むと彼らは二人を、ちょっと

低い所にある、鉄板製の小屋に入れて外からガチャンと鍵を掛けてしまいました。中は真っ暗で何も見えません。手探りで何か木箱の様な物に腰を下ろしました。そしてあちらこちらを手探りで触って見ますと、大小色々の箱があり、どれも皆重たくてちょっと押しただけでは動きません。その内に大きな砲弾型のものに手が当たりました。なんと二人は弾薬庫の中にぶちこまれたのです。

連れの先ほど威張ってとんでもない事に私を引張り込んだ彼の男は、脅えだし「此処に大砲の弾が当たったら、俺は木端微塵だ」とわめきます。ＫＡＮは「共産軍は大砲は持っていないから心配するな」と言いますと、彼は黙り込んでしまいました。

折角ここまで来て命を落としては、ＫＡＮは自分はなんと惨めな人生なんだったのだろうと思いました。そこで彼に「お前は本当に瀋陽から派遣された国民党の特務なのか」と聞きますと、彼は「絶対に本当だ、自分は瀋陽の東北行轅本部＝蒋介石の東北軍司令部からの身分証明書を忘れて来たのが失敗だった」と言います。もうＫＡＮは此れ以上彼と話す気が無くなり、二人共黙って時間が経って行きました。腕時計を持っていませんでしたので、何時間経ったか判りませんが、辺りが暗くなったようで、六時間位たったでしょうか。疲れ切っていますのに眠気を催しません。目が覚める一方で、ただただ自分が死ぬか生きるかで頭が一杯でした。

突然二～三人の話し声が聞こえ、鉄板のドアが開きました。その途端外の明るい光が差し込み、暫くは目が見えませんでした。そうして兵隊は連れの男に「瀋陽の本部と連絡が取れ、

君の身分が証明されたから、もういいから出て行って良い」と言います。

途端に先ほどまでは砲弾の爆発に脅えていた連れの男は、「上司の俺に敬礼しない」と文句を言い出します。ＫＡＮはあきれ返りました。聞いたところによれば、彼は大連二中を卒業後、満洲の満洲軍官学校（日本が満洲人の陸軍幹部養成に作った日本の陸軍士官学校と同じ性質の学校）を出ていました。やたらに部下に威張りたがるどうしようも無い男でした。ＫＡＮは最後に彼に「お前は本当にどうしようもない大阿呆だ。君のお陰で私も危うく命を落とすところだった。もういいから此れからは各自東西（お互いに不干渉）だ。これからも君には絶対に会いたくない。君は国民党中央軍の士官でも将軍でも良いから偉くなってくれ」と捨てぜりふを残して分かれました。

以後彼とはそれっきり会っていません。普蘭店に入り街を歩いていましたら、大連臨時中学の教え子に何人も出会いました。

「先生も脱出して来ましたか。ご無事でよかった、よかった」と抱きついて喜びます。

彼らも皆同じルートで大連を脱出して来ていたのでした。普蘭店に入ると食べ物も売っていますし、大連とは別世界のような感じです。予て遠い親戚がいると聞いていたキリスト教会を訪ねるべく教え子に聞きますが、皆よそものですから、誰も知りません。そこで街で出会った老人に聞きましたら知っていました。此の方角で此処から約五㎞位の所だと教えてくれました。約五㎞歩きますと、言われたとおりに屋根に十字架が立った古い教会の建物が見えて来ま

した。そこには遠い親戚とだけ聞いていたどんな親戚かも覚えていない、婦人三人、母と娘二人が教会の留守番をしていました。この母娘三人は大連で私どもの家に住み込みで一年程滞在して居り、娘二人にはＫＡＮは週に二～三回、退勤後家庭教師として数学を教えていました。そしてＫＡＮが大連から脱出する前に、いつの間にか居なくなっていたのです。

聞きますとＫＡＮと同じルートで脱出の途中、同行していた彼らの叔父さんが国民党の特務の嫌疑を受け、共産遊撃隊に連行され、厳しく調べられ、たたかれたりしていじめられひどい目に会いましたが、彼はもともと商売人でしたので、最後には国民党の特務でないと判り帰され、瀋陽に行きましたが、暫く療養してやっと健康を取り戻したそうです。

何れにしても母娘三人は久々の再会を大変喜んでくれ、教会の牧師だった病気で亡くなられた父親が残した服を出して頂き、風呂にも入れて貰い、破れ汚れた綿袍を脱ぎ捨て着替えました。そして久しく食べていなかったご馳走を作ってくれ、心からのもてなしを受けました。ＫＡＮは特に宗教心はありませんが、本当に地獄のあとの天国でした。

翌朝ＫＡＮは瀋陽に行くと言うことで朝食後母娘と別れて普蘭店の駅から瀋陽行きの汽車に乗りました。母娘は全く国民党の紙幣を持っていないＫＡＮに切符と道中の小遣いも出してくれました。此の娘二人は後に母を教会に残して瀋陽に出て来て、二人とも瀋陽の高等中学校に入り、よく勉強して医科大学に入り、色々苦難の道を歩きましたが、最後には姉は大連で、妹は瀋陽で立派な医者になりました。一時期姉の方は学資が続かなくなり、当時瀋陽に居たＫ

ＡＮに相談に見えたので、大連から持って来た、指輪を一つ差し上げましたが、このことを良く覚えて居られ、シンガポールから再度中国を訪問出来たＫＡＮと再会したとき、当時のことを涙を流して感謝され、御主人は大連理工大の教授になって居られて積もる話をしながらすっかり御馳走になりました。妹さんは瀋陽で医者で大学教授と結婚、姉妹とも良き医者の伴侶に恵まれ、二夫婦とも名医として幸福な家庭を築いて居られます。

瀋陽に辿り着く

普蘭店から七時間位かかって瀋陽に着きました。旅順工大の先輩が作った当時世界最高速のアジア号は大連～瀋陽間を、途中大石橋で止まり、四時間で走っていたところです。しかしとにかく無事瀋陽に着きました。列車の中で近くの座席に国民党中央軍の将校が座っていました。立派な軍服に腰には拳銃を下げていました。誠に立派に見えました。普蘭店の山の上でＫＡＮを弾薬庫に六時間以上も閉じ込めた連中も、アメリカ式の自動小銃や大砲を持っていました。こうして東北にビルマ作戦から回って派遣された国府軍の精鋭も、アメリカ式の近代装備を持ちながら、蒋介石か陳誠かの判断ミスで、東北では全く言葉の通じない、南の気候しか経

験のない第一軍、第六軍を派遣した為に、冬には零下二〇度以下になる瀋陽では実際には余り役に立ちませんでした。

事実広東語は数字の呼び方から北京語（マンダリン語）と全く違い、ＫＡＮは一応英語、日本語、中国語とロシア語は判りますが、広東語は全く判りません。中国に侵攻した日本軍が街で買い物をして値切る時に「我是　的朋友」（お前は私の友達）等言っていましたが、商売上手の中国人商人に旨くやられてしまいました。此れは国民党がはるかに装備の劣る共産軍に勝てなかった理由の一つだと思います。国民党の第二の失敗はみんな来い来いと呼びかけた共産党の林彪に対し、国民党の陳誠は経歴にこだわり彼らは偽軍だと言って受け入れなかったことです。勿論現在の共産党は自分等のオルグが選んだえり抜きを共産党に入れ、毎年一回徹底的に思想教育をして、官僚機構を固めていますがとにかくえり好みした為に、満洲に武装解除後残った日本軍が教育した数十万の満人精鋭部隊を敵に回してしまいました。同時に青年、学生まで怒らせてしまったのです。今でも華中、華南の人は東北の人を田舎者と見ている人がいます。

清国は満洲族が出て行って作った国ですが、一旦民族蔑視の思想が植えつけられると容易に改める事が出来ません。日本人に明治以後植えつけられた中国を蔑視する思想はなかなか根本からは抜けないのと同じだと思います。国民党の第三の失敗は官僚の汚職と経済金融政策の失敗だと思います。しかし此れはＫＡＮが尊敬してやまない鄧小平も手を打てなかった汚職で

す。誠に此の鄧小平が改革開放に舵を取らなかったら、中国はもっともっと世界に遅れたと思います。しかし国民党を滅亡させた原因の一つ、官僚の汚職は手をつける時間がありませんでした。今、朱鎔基総理が最も力を入れているのが、此の汚職と金融政策ですが、中央政府は思い切って縮小に踏み切りましたが、力を付けた地方の行政機構を改善するのは大変な仕事です。

瀋陽から安東（丹東）へ

瀋陽には旅順工大の中国人先輩や同窓生も沢山いましたが、旨く連絡出来ませんでしたので、母の実家の母の妹の息子で貿易会社の瀋陽支店長をしていたところに置いて貰いました。彼らは三人兄弟で、長兄は天津で貿易会社社長、次兄は旅順の田舎の鸚歌石と言うところで農業をやって居り、一つ年上の此の三男は大連で良くＫＡＮの家に泊まって居りＫＡＮの父親の紹介で当時の奥町の大型食料品店に勤めていたりしていたことがあり、割に近しい関係でした。此処で暫く居候をしている間に、同窓や先輩と連絡が取れました。旅順工大の先輩は中央政府経済部資源委員会に接収された大型工場以外の、かっての日本人経営の中小企業の工場を接収した、東北生産管理局に勤務して居りました。

そこを訪ねましたら旅順工大予科在学中にア式蹴球（サッカー）の部長をやっていた先輩の譚（たん）さんが、中央政府が接収したばかりの安東（丹東）の東北生産管理局の分局に居て、人手が足らずに困っているので行ってみたらどうかと勧められ、その気になって安東に行くことにしました。旅費や当面の滞在費を貰って、朝、瀋陽駅から汽車に乗り、幾つもトンネルをくぐって夜になってやっと安東に着きました。早速分局に行きましたが、皆退勤後で誰も居りません。やむを得ず今まで会ったこともない遠い親戚を安東市役所の官舎を訪ねましたら、ともかくも食堂の机にマットをひいて寝かせてくれました。

翌朝早く譚さんの事務所に行き、譚さんの出勤を待ちました。譚さんは大変驚きましたが、大歓迎と言って其の夜は自宅に泊めてくれご馳走を頂きました。譚さんは中央政府の東北生産管理局安東分局、工務処長（工務部長）でした。分局に行き旅順工大先輩の張局長と先輩の重役二名に紹介されました。此の張局長は後に台湾に渡り、国立師範大学の教授になりました。譚さんは大連一中卒後、旅順工大採鉱科を終えた優秀な方ですが、ＫＡＮが中国を再度訪問出来るようになった折り、旅順の母校を訪問の折に御会いすることが出来ました。お互いに死線を越えて来た仲間です。暫くは涙を流して抱き合い、言葉になりませんでした。譚処長は早速分局の機械廠の責任者になってくれといわれ、ＯＫして現場に案内されました。

工場は安東の南の鴨緑江（おうりょっこう）を下った、安東市内から大分離れた所で六条溝と言うところにありました。此の工場の向かいに、張学良が経営していた大きな六合成造紙廠がありました。も

のすごく大きな工場で、鴨緑江を上流から筏(いかだ)で下って来る木材を原料に紙を作っていました。私が担当することになった工場は、もと日本人が経営していた小型の機械工場で鋳物や機械加工をやっていました。鋳物はむかしから有名で中華鍋を作り、生産が間に会わない程良く売れていました。安東は気候も皆の話す言葉も風俗習慣も大連と良く似て居り、ＫＡＮにはとても住みやすいところでした。事実大連とは同じ海岸沿いに三〇〇㎞も離れていません。ここでちょっと落ち着いた気持ちになり安東での生活が始まりました。安東からは広い鴨緑江の向こうの川岸で朝鮮婦人が洗濯をして居り、朝鮮特有の砧で叩く音が聞こえました。安東の現地人は大抵朝鮮語を話すことが出来て、又朝鮮人も沢山いましたが、工場の工員には朝鮮人はいませんでした。此の安東で半年ほどいました。チョンガのＫＡＮは日曜毎に同じくチョンガの先輩の家に行き昼食を御馳走になりました。海鮮料理は特に美味しいものでした。

又大連で父が経理をしていた、政記輪船公司の安東支店長に叔父がいました。此の会社は会社専用の埠頭を持って居りました。此の政記輪船公司は天津、上海にも専用埠頭を持つ大きな会社でした。叔父は父の紹介で此の会社に入ったのでした。此の叔父を訪ねると叔母は何時も水餃子を作ってくれ、御馳走になりました。叔父の長女は安東の銀行家の息子と結婚し女の子が一人いました。何時も土曜日には昼食を御馳走になり、昼からはその長女が安東をあちこち案内してくれ、映画にもよく行きました。此の安東の思い出は楽しいものでした。此の長女とその主人も後に台湾に渡り、台湾銀行の外貨管理の仕事をするようになりました。

或るときＫＡＮが此の御主人を訪ねますと、机上にはタバコが一杯置いてあります。彼は煙草を吸いませんが、来客が見えたときに、中国の習慣に従って、自分の煙草を勧めます。受け取って置いて置くのがたまったのだと言います。此れはＫＡＮは悪い習慣だと思いますが、中国人は官庁などを訪ねるときは、自分は煙草を吸わなくても、ポケットには必ず煙草を入れて置きます。此の叔父の家には奥さんの叔母より若い婦人が居て、紹介はされませんでしたが、ＫＡＮにお茶を出してくれたり、水餃子作りを手伝ったり、炊事を手伝っていました。家族の一員のようでしたが、女中でもありませんでした。ある日従姉妹の長女に尋ねましたら、中国でも余りありませんが「借種」と言う言葉を初めて聞きました。これは結婚してから長く子供が出来ない場合、どうしても子供が欲しい夫婦が、極く秘密裏に親しい友人に自分の妻に良い種を宿してくれる様に頼むのだそうです。

此の叔父は二男二女に恵まれ、大きな船会社の支店長を勤め、頭も良いので、子供に恵まれない友人に頼まれて、「借種」をして上げたのだそうです。勿論叔父の妻、叔母も承知のことです。ところが此の友人の奥さんに欠陥があったのか、なかなか子供が出来ず、即ち「借種」出来ない間に、頼んだ友人が病死してしまったのだそうです。余りに内密なことでそれ以上聞けませんでしたが、主人の死後此の叔父の家に住んで、家族同様に生活の面倒を見て貰っていたのでした。最近色々子供の無い夫婦がアメリカまで出かけて顕微鏡的な「借種」をしていることを、日本の新聞で見ますが、ＫＡＮにも此の「借種」は初めての話でした。

安東脱出

安東での生活もようやく落ち着き、平安な生活に入り、身辺無一物だったのが、新しい洋服、下着、日用品も一揃い揃えました。工場では毎日の中華鍋作りに忙しく、販売にも一生懸命でした。ところがある日午後三時頃、作業服で工場にいましたら、かなり離れた安東市内の分局の現地人のメッセンジャーボーイが自転車で飛んで来て、「譚処長の連絡で来ました。今直ぐ安東駅に行って下さい」と言います。「何事だ」と聞きますと、「直ぐ共産軍が安東に入って来ます。最後の瀋陽行きの汽車に乗れる様に、直ぐ急いで安東駅に行って下さい」と言います。

工場周辺は何事も無く静かです。此れには本当に驚きました。今まで全く情報が入っていません。正に晴天の霹靂です。そのままメッセンジャボーイの自転車を借りて、一切を捨て、作業服のまま安東市内に入りました。市内は大混乱です。あちらこちら目茶苦茶に乱れて居り、行き交う人の表情も無言で厳しく、市内を走ったり荷物を担いで何処かへ行く人ばかりです。先ず駅に行く前に分局に行って見ましたが、誰一人居らず、紙くずが散乱し、机や椅子がひっくり返っています。親戚の家はちょっと離れていますので、行くのをやめて駅に向かいました。

自転車を乗り捨てて駅に入りましたが、まさに大混乱、停車している列車の、客車は言う

に及ばず、貨物車はもとより列車の屋根まで人で一杯です。入口は人がはみ出し、片足は宙に浮かせてぶら下がっています。機関車まで行って見ましたが、機関車の前後、両側も人、人、人です。駅員は一人もいません。これではどうにもならんと思いました。列車の発車時刻を聞いても誰も知りません。プラットホームには列車に乗れない人があふれています。そこで考えたのは、譚さんはＫＡＮにこの駅に来る様に連絡してくれたのだから、必ず何処かに乗っていると思いました。そしてＫＡＮの来るのを待っているはずです。それでプラットホームを列車の最初から窓を覗き込みながらゆっくり、ゆっくり歩き出しました。十五分程歩きましたら、急に列車の中からＫＡＮの名前を呼びます。駆け寄ると窓を開けて列車内に引きずり込んでくれました。譚先輩と分局の人達です。本当にホットした表情でした。若い人が席を譲ってくれました。此の安東からの最後の列車は乗り込んでから十分程するとゆっくりゆっくり動きだしました。

今でも思い出して、もしあのとき最後の脱出列車に乗れなかったらどうなっていただろうか。安東で捕まって処罰されるか、大連に送り返され処罰されるかちょっと想像も出来ません。

本当に間一髪の脱出でした。トンネルまたトンネル、屋根の上の人は大丈夫かと思いました。空には一杯の星が光っていました。瀋陽には早朝五時頃到着、直ぐ市内に戻れと言われましたが、夜間は市内は戒厳令がひかれ、駅から一歩も出られませんし、街も歩けません。六時になると戒厳令が解除され、やっと夜も明けて来ました。機関車にくっついたり、列車の屋根に居

た人の中には、大分振り落とされたり、煙にむせて死んだ人が大勢居たようです。顔を真っ黒にした人が、友達がいなくなったと泣いていました。なんとか先輩を見つけてもぐり込めたＫＡＮは自分の幸運を思わずには居れませんでした。瀋陽駅から直接、従兄弟の店に行きました。まだ起きていない人もいました。従兄弟も安東が危ないとの情報は入っていましたので、どうしたかと心配してくれていましたので、無事帰って来たのを見て、本当に喜んでくれ、早速お祝いの宴を開いてくれました。

国共戦争は次第に激しさを増して来ました。瀋陽と長春（日本当時の新京）の中間に、四平街と言う戦略的要衝があります。ここを国府軍の陳明仁将軍が守って居り、共産軍が大きな犠牲を出して攻撃しましたが、攻略出来ず勝利を収め、やはり国府軍は強いと市民に評判になっていましたが、暫く経った後に陥落しました。

瀋陽には日本時代の都市ガス工場が瀋陽煤気廠（ばいきしょう）となって、中国人の大先輩薛海東（へい）（昭四）さんが工場長、そこに日本人で企画室の技術顧問としてやはり先輩で前の此の会社の社長の大坪直路（大正五）さん、それに同じく旅順先輩の前満洲石炭液化研究所の所長さんだった方が顧問として居られました。そこでＫＡＮは企画室で二人の先輩と一緒に働くことになりました。廃油を再精錬して重油と軽油及びガソリンを分離する小型の試験装置を作り、試験に成功すれば瀋陽市から資金を出して貰って大規模な工場を建設すると言うことでした。都市ガスは従来通りにレトルト式で作って市内に送り、残りのコークスは良い値段で工場等に売れました。此

の工場の人事室に王さんと言う三十才位の婦人が居り、私が日本の大学卒と聞いて、特に親切にして頂き、親しくなり、いろいろ彼女の話を聞きました。彼女の主人は石炭の街、撫順の鉱務局の技師として、日本の設備の接収に行っていました。東京工大の機械科を卒業し良い家庭の出でしたが、撫順に共産軍が入り、列車の連結器を発明して中国で有名な技師、詹天祐さんが殺されたと聞いて居り、王さんの主人も「凶多吉少」と連絡して来ましたが、その後消息が途絶えました。ＫＡＮもわが身に照らして共感を呼び、何度も彼女の家まで招待され、水餃子を御馳走して貰いました。自宅には女ばかり、大きな立派な邸宅に、祖母、母親、彼女と一緒に暮らしていました。

四平街が二度目の攻撃で陥落してからは、愈々瀋陽も安全でなくなり、王さんは祖母、母親と相談し、彼女一人で瀋陽を脱出して最後の目的地は台湾に行くと言う計画を立て、ＫＡＮに一緒に行こうと誘って来ました。女一人では心もとないので男のＫＡＮを見込んでの考えです。王さんは主人はもうこの世にいないだろうと言います。ＫＡＮは考えた上で若し主人が戻って来たら、王さんは主人と一緒に行きＫＡＮは残ると言うことで、同行をＯＫしました。そして約三ヶ月後に出発することにして、ゆっくりゆっくり準備に入りました。ところが出発予定の二週間前に、王さんの主人が撫順から脱走して戻って来たのです。勿論皆大喜び。ＫＡＮも一緒に王さんの為に乾杯を上げました。当然ＫＡＮは約束通り同行を遠慮、彼女は主人と一緒に出発しました。王さんの主人は自分の不在中にＫＡＮが色々世話をしてあげた事を何度も何

度もお礼を言って別れました。

この夫婦とは台湾で何度も会いました。最初は台湾中部の梧棲港と言うところに居られ、奥さんの王さんはその後早くに亡くなられ、主人はその後台中の大学教授になられました。

ＫＡＮはこのまま瀋陽に残らざるを得ず、共産軍が入って来たら、悲惨な目に会うことを覚悟していました。と言うのは瀋陽――錦州間の鉄道は共産軍に目茶苦茶に破壊され、全く交通遮断状態でした。瀋陽は全くの孤立状態、瀋陽――北京間の飛行機は飛んでいましたが最低でも片道一人五十両（金の延べ棒五本）の相場です。諦めざるを得ませんでした。

瀋陽脱出

その当時思い出したのが、大連臨時中学で先生をしていた時、大連市政府の工商局長をしていた、旅順工大の大先輩、張さんがやって来て、演説していった言葉です。「点と線は国民党軍の手中にあるが、面は共産党軍が押さえている。必ず共産党軍は勝つ」やはりそうなるのかなと思い出していました。瀋陽は東北（満州）に於ける首都、それなのにもうその頃では、市民の国民党への信頼はなくなり、何時共産軍が入って来るかわからない時期になり、市民は自分の将来だけしか考えなくなっていました。

当時日本の降伏間もなく重慶に遷都していた国民党政府はいち早くもとの南京に遷都して居り、かっての日本軍の占領地区に先ず各省の省長、ついで各市の市長、日本の残して行った資源接収の為、経済部所属の資源委員会の幹部を航空機で送り込み、それからが問題で、民間で言われた「天上飛来的、地上走来的、以及地下鑽出来的他們、全部是中央政府的接収大員」その意味は「空から飛んで来た偉い人、地面から汽車等でやって来た中及び下の官僚、地下から這い出して来たものは全て政府の偉い人」此の最後の人達が大問題。今まで地下に隠れていたもの、戦争中日本と関係のあったもの、商売人が、派遣された人達の親戚、友人などが、偉い人の傘の下に入って官僚になるか、又は重慶から帰って来たとみせびらかすと言うものです。特に偉い人ほど収入が多い中国では昔から「升官発財」(官が上がって儲かる)と言います。当時の汚職はひどいものです。日本の敗戦で各大中工場の鋼鉄や製品在庫を片端から売ってしまって自分達のポケットに入れる。此れが国民党の失敗の原因の一つです。

瀋陽では国民党の汚職に対する批判だけでなく、良く聞く話では、共産党の軍隊が農村の部落に行くと、農民を手伝って、一緒に畑を耕し、鶏、あひる、牛、羊等の飼育の手伝いをする、此れに反し、国民党の軍隊が部落に行けば、鶏、あひる、牛、羊、犬まで、とに角殺せるものは皆殺して全部食べてしまうといわれ、又事実でした。これも国民党が人心を把握出来ない理由の一つでした。国民党の汚職、軍隊の無規律による失敗は予想出来ましたが、蒋介石は手の打ち様がありませんでした。此れに対し、共産党は汚職は全く無く、軍の規律も厳正で一般の

民衆に歓迎されました。

ＫＡＮは瀋陽駅の近くで、国民党の兵隊の一人が馬車に乗り、降りたところで馬車夫が料金を請求したところ、馬を打つ鞭で馬車夫を鞭打ったのを見ました。このときは国民党はもう駄目だと思いました。何れ瀋陽は共産軍に占領される。早く瀋陽を脱出しないと、自分の将来はどうなるか判らないとつくづく心配になりました。

瀋陽ガス工場の単身者寮は、大広場の丁度ヤマトホテル（今の瀋陽賓館）の向かいにあったビルの二階にあり、一部屋貰って、ドアに施錠して毎日出勤していましたが、ある日退勤して部屋に戻って見ますと、部屋のドアは開いて居り、中を見ると泥棒にやられていました。真冬で夜は零下二〇～三〇度になる時で、暖房があまり効かないので、布団の上に掛ける新しい厚手の毛布も、米袋の中に半分はあった米も、引き出しにあった半月分は残っていた給料も皆とられていました。泥棒も食えないからとって行くんだと、あきらめました。瀋陽の当時の治安はそんなものでした。盗まれた毛布の代わりを買う為に、日曜日に町に出て歩いていますと、二人づれの馴染み深い顔に会いました。「先生、先生」と駆け寄って来ます。大連臨時中学の教え子で、二人とも便服（普段着）でした。お互いに今までの境遇を話し合いました。二人は大連から脱出後、幸運にも国府軍の空軍に入り、今は中央政府空軍の第一軍区司令部の下士官でした。二人とも名前は李でした。後日談ですが、その中の一人の李は後にやはり瀋陽を脱出して、台湾に渡り、空軍で桃園近くの大園飛行場で勤務していましたが、正式の空軍士官であ

りませんから、退役出来て、ＫＡＮの紹介で貿易会社に入り、良く働き貿易の仕事を勉強して、独立したいと相談に来ましたので、ＯＫ、不足資金を出してあげて、ヨーロッパの宝石を切る工具の輸入代理権を取り、事業を拡張して行きました。もう一人の李は随分捜しましたがどうしても見つけることが出来ませんでした。名前は李民禄と言う人でした。

二人の教え子は先生の為に、空軍家族の無料切符が入手出来ると言います。これこそ天の助け、是非頼むよと頼みました。二週間後に瀋陽――北京は難しいが、瀋陽から錦州に飛ぶ飛行機の切符が手に入るから、一週間後に切符をお渡ししますと連絡がありました。一週間後に約束通り切符を持って来てくれました。瀋陽――錦州間の空軍家族用の軍用機の切符です。約束通りに旅の準備をして皆に別れを告げ、出発日に指定の集合場所に行きますと、二人も別れを告げに来てくれていました。

切符を見せて連絡バスに乗り込み飛行場に向かいました。アメリカ製の第二次大戦で活躍した輸送機Ｃ46でした。乗り込みますと席は機内に向かい合いに腰かける様になって居り、余り沢山は乗っていませんでした。乗っているのは空軍の家族だけです。やがて飛行機は瀋陽を飛び立ちます。やっと助かったと万感胸にせまる思いで、遠ざかる瀋陽の街を眺めました。錦州は一時間足らずです。着陸後公共バスですぐ錦州大学に向かいました。

錦州大学には瀋陽の飛行機の切符をとってくれた教え子が、同級生だった同じ教え子一人に連絡してくれていました。此の一人は頭が大きく、名前の葛の下に大頭をつけて、「葛大頭」

と呼ばれていました。瀋陽の教え子と一緒に三人とも、数学が良く出来ました。此の葛の学生寮で泊めて貰い、食事も学生食堂で食べました。粗末な食事でしたが美味しいものでした。翌朝葛は錦州駅まで見送りに来てくれました。

彼とはそれっきり会う機会がありませんでしたが、昔の知人に会う度に彼の事を聞いて居りましたら、彼も私を捜してくれて居り、或るとき大連賓館に泊まっていた私を、彼がひょっこり訪ねて来てくれました。二人は抱き合って再会を喜び、時の立つのを忘れて話合いました。彼はその後大連に戻り、大学の教授となり、定年後もあちらこちらの顧問をして居り、ＫＡＮは大連に行く度に彼と会って昔の話をするのを楽しみにして居ります。

錦州から山海関へ汽車は走ります。ここは複線ですが、一本はレールの継ぎ目をはずして大きく上に曲げたり、無くなっていたりで、一車線だけで走っていました。共産軍が夜の間に、線路を破壊し、国民党軍が昼間に修理すると言う、いたちごっこをやっていました。錦州から瀋陽は国民党軍の勢力が弱くなり、昼間の修理が出来ずに、全面交通遮断されていたのです。山海関に着いたのは日が暮れてからでした。汽車はここまでで明日は別の北京行きに乗り換えですので、山海関駅近くの民宿に泊まりました。大連から脱出してソ連勢力下終点の石河で泊まった民宿と同じく、オンドル部屋で粘土の上に油紙を張り下の煙道に薪か石炭を焚いて暖めるもので、その油紙の上にござを敷いて、二～三人が一緒に寝ます。薄い掛け布団でも体全体が暖かく寒い夜でも良く休めます。

翌朝、汽車の出る前に早く起き出して、万里の長城東最後の関門、山海関の城門に登って見ました。城門の上の壁に大きな字で「天下第一関」の額が掛かっています。清朝の名書家の書になる立派な字でした。北京行きの列車は朝八時に出ると言います。夜間は共産軍の襲撃を恐れ汽車は走りません。日本占領時代も大連――ハルビン間の夜間の列車は必ず窓の鎧戸を下ろさせていました。夜行列車の灯火を見て、当時の抗日の遊撃集団が襲撃して来るからです。早めに切符を買って朝食をすませてから汽車に乗り込みました。山海関から先は、線路の破壊程度が少なく、天津に近づくに連れて汽車の窓から見る限り、線路破壊のあとは見えなくなりました。それだけ此の辺は未だ中央政府が押さえていたのだと思います。

終点北京にはやはり夕方に到着しました。早速母の実家の関係の叔父の宅を訪ねました。長い間天津で貿易の仕事をしていた叔父は年はとっていましたが、未だ元気そうでした。老君堂胡同（胡同＝都会の中の横道、住宅街）の自宅は立派な四合院で、入口の門をくぐると右が客間で左が客用の寝室で、シングルベッドが四台置いてあり、四角い敷地に回りを囲む様に部屋があり、門の突き当たりの部屋は先祖を祭る部屋でした。ＫＡＮより半月前から泊まっていた、叔父の親友が今まで此の客用の寝室に一人で泊まっていましたが、その日からＫＡＮと二人で泊まることになりました。ＫＡＮより十才位年上の、なかなか立派な紳士でしたが、お互いに気を使って身の上のことは聞きませんでした。後で叔母から聞きましたら、日本敗戦まで日本人と関係のある仕事をしていた様で、ＫＡＮは昼間は良く散歩に出ましたが、此の紳士は

全く外出しませんでした。

その当時民間ではやった言葉が、「国民党的税、共産党的会」（国民党は税金ばかり取り立てる、共産党は会議ばかりやる）と言うのがあり、全くその通りでした。

天津へ

二十日間位、この叔父の家で居候で暮らしました。天津の従兄弟の住所を叔父から聞いて天津に行って来ますと言って叔父、叔母、その子供達、それと此の紳士に別れを告げて、北京から汽車で天津に向かいました。天津では北京の叔父と提携して、やはり貿易の仕事をしていた、母の妹の長男（その弟には瀋陽で世話になりました）の店を訪ねました。

仕事は大成功の様で、ニューモデルの輸入の小型自動車を持っていました。当時はオートバイでもなかなか持てない時代でした。店にしているのはもと日本租界にあった、天津裕徳里と言う日本人時代は遊郭と女郎屋の街で、その中の女郎屋だったビルを買って店にしていました。面白いところを買ったものだと思いますが、場所柄安く買ったのでしょう。従兄弟が仕事を終わったあと、一緒にもと英国租界にある彼の自宅に行き泊まりました。一軒建の英国式の立派な邸宅でした。彼も共産党に言わせれば金持ち資本家になりますから、何時も恐怖感を持っ

て居り、足もとの明るい間に、台湾に渡って事業を広めたいと思っていたのですが、なかなか踏ん切りが着かないと言っていました。毎日従兄弟と一緒に彼の店まで行きますが、それからはＫＡＮはすることが有りませんので、天津では町をぶらつくことが楽しかったし、而も大好きでした。毎日のぶらぶらが役立ち、幸いに台湾人で大連臨時中学の教え子の陳君にぱったり会うことが出来ました。

台湾へ

ある日いつもの様に、もと日本租界の昔デパートだった中原公司の近くをぶらぶら歩いていましたら、「先生！先生！」と声を掛けられました。振り返って見ますと、大連臨時中学の教え子の陳でした。彼も数学が得意で成績が良かったので、良く覚えていました。「此れは此れは、陳君か」と言うわけでお互いの身の上話をしました。彼はＫＡＮと違ったルートで大連を脱出していました。陳はもともと家族全部台湾生まれで、陳の父親は台湾から、お茶の葉を仕入れ、大連で製茶をして包装後問屋に卸す仕事をしていました。大連で一番大きい製茶工場を持っていました。富裕な家庭の長男だった陳は小学校も中学校もＫＡＮの後輩で、日本敗戦時は大連中学の四年生でした。台湾に戻ってから台湾大学（もと台北帝国大学）に入学、機械

科を卒業した優秀な学生でした。彼の家族、父母弟妹全員六名で今の大連――旅順を結ぶ三つのルートの中の旅大南路にもと結核治療のサナトリュームが有り、風光明媚な小平島から、大連で積み上げた一切の資産を捨てて、中国式帆船のジャンクをチャーターして未だに国民党が支配し、台湾向けの定期船が出ている天津に向かいました。途中風まかせの帆船は逆風で出発地の小平島近くまで押し戻され普通一週間の船路を二週間かかって天津にたどり着き、これから二～三日後の台湾行きの定期船に乗って台湾に渡るところでした。早速ＫＡＮの考えを告げて、天津の従兄弟の住所を渡し、台湾で先生の仕事があったら直ぐ連絡してくれる様に頼みました。

約半月経ってから彼の台北からの手紙が届きました。彼の母親の弟が台北工専（日本時代と同一名称）の電気科の主任をして居り、機械科の主任の林さんと仲が良く、その二人の主任とも日本の九州帝国大学出身の同窓で、丁度機械科には教師が不足しているので直ぐいらっしゃい、特に旅順工大出身なら大歓迎ですとの知らせでした。早速従兄弟に「勤め口が見つかったから台湾に行くよ」と知らせ、台湾行きの船を調べましたら、天津――基隆間を唯一つの客船、「美信」と言う船が往来していました。従兄弟に頼むと早速切符を買ってくれました。ＫＡＮは難民の身分だから、三等で良いよと言いますのに、従兄弟は今度別れたら何時会えるかも判らない、せめてもの餞別だよと二等の切符を買ってくれました。埠頭で従兄弟の家族に送って貰って乗船しましたが、なんと船はアメリカから払い下げて貰った、六〇〇トン位の吃水の

浅い掃海艇を改造した小さい船で、一、二等はデッキの上に別に作った木造の小屋の中に一人一人のベッド、三等はデッキの上に直接敷いた畳の上に雑魚寝でした。船は一、二、三等満員で数百人も乗っていました。

基隆までは四昼夜の船旅です。御馳走を出してくれましたが、よく揺れて九〇％の人は船酔いで吐いていました。ＫＡＮは吐きませんでしたが、折角の御馳走が喉を通りません。四日経ってお腹がからっぽになった頃に基隆に着きました。船が揺れなくなってから、お腹一杯食べて上陸しました。丁度天津を出てから五日目の朝でした。「ああやっと命の危険がなくなった」との思いで一杯でした。早速下船、埠頭近くの駅から汽車に乗り、台北に向かいました。一時間半位で台北に着きました。早速天津の従兄弟の仲のよい友人で貿易商をしている周さんの店を訪ねました。

「よく来てくれた」と歓迎されました。この店は一階が貿易会社で二階は畳の部屋が四部屋あり、その中の六畳一室を使わせて貰うことにしました。他の二室には別の友人が、一室は空いていました。翌朝陳君のお宅に行きますと、直ぐその叔父さんの所に連れて行ってくれ、叔父さんは「今日からでも良いから工専に出勤して貰ってもよいよ」と言われ、早速その日の午後から台北工専に出向き、機械科主任の林さんに会いました。林さんは九州帝国大学機械科出身の日本の学士で、背は普通ですがどっしりした体格の人で、早速各教員を紹介、各教室を回り、各組の学生を紹介してくれました。一ヶ月も授業をしない間に、夏期休暇に入りました。二・

二八事件の後でしたので、未だに全国に戒厳令が敷かれて居り、夜間外出は禁止されていて、夜になると街は静まりかえっていました。

二・二八事件は一九四七年二月二十八日に台湾の主要都市で一斉に起こった台湾人による、反中国、反国民党政府への蜂起で、日本敗退後、中国本土から乗り込んで来て、台湾を支配した国民党への反感がつのり、ある日官憲の煙草密売人に対する暴行が引き金となったもので、民衆は台湾の高度の自治化を要求したものですが、軍により弾圧されました。今でも主として中国中央部から軍艦や船で、上海、青島、香港、広州等から一斉に渡った蒋介石及び指揮下の軍隊及び一般官僚、市民は所謂外省人と呼ばれ、この時に有名な北京の故宮博物館の至宝も軍艦で海を渡りました。此れに対し中国から逃れて来たものは身分は難民と同じで、入国後申請して台湾居住民となりました。何も証明するものはないのですから、若い者は皆徴兵を恐れて年を偽り、中には名前も替えて申告していました。ＫＡＮも六才年を増やして申告、その後此れが登録された記録となり、今でもシンガポールのパスポートは六才年をとっています。

中国共産党政府は一九四九年の革命後、台湾解放を常に国民に宣伝し、各所に大きな看板を立てていましたが、鄧小平の改革解放宣言（所謂鎖国終了）後、台湾に逃れた人もすこしづつ自由にビザをとって中国本土の親戚知人を訪ねることが出来る様になりましたが、それまでは通信もままならず、アメリカに渡った親戚や香港にいる親戚を介して連絡をとったり、たまに公式団体で日本に来た親戚に会いに日本まで出かけていました。ＫＡＮが自由に大連を訪ね

ることが出来るまでには長い年月が必要でした。今でも一般中国人は観光で自由に外国に行けません。今でも共産党と国民党の戦いは終わっていないのです。台湾資本がどんどん大陸に進出出来る様になっても、政治は別と言うわけです。ＫＡＮが台湾に渡った当時は台北の住居には玄関の外にポーチがあり、亭子脚と呼ばれる柱がありますが、此の柱と柱の間に煉瓦で壁を作り、空襲や市街戦に備えていました。

台湾に移った国民党中央政府は盛んに「反攻大陸、反共抗俄」（俄はロシア）をスローガンにしていました。それでもＫＡＮは台湾の国民党中央政府の軍隊には正確な組織、指揮系統、規律が無いように感じました。瀋陽で見て来た国民党軍のイメージが残っていたこともありますが、何かそんな感じを持ちました。台北の市街でよく黒色の中山服と呼ばれる（中国の人民服、日本の戦時中の国民服と類似）服を着た日本人を見かけました。蒋介石が日本に於ける好朋友（ハオポンユウ）（親友）岡村寧次将軍に頼んで、台湾の軍隊の組織改革、指導にあたる為、日本から来てもらった日本のもと陸軍将校でした。皆陽明山と言うところに住み、日本の陸軍士官学校出身のＫＡＮの従兄弟が当時国防部情報局員としてその通訳に当たっていました。

台湾の人達はＫＡＮが渡った時は、台湾語（福建語）と日本語が一般に通用していましたが、その内に本省人が北京語を覚えて、北京語が一般通用語となり、今はこれと福建語が一般に通用しています。今でも福建語の中には日本語がちょいちょい混じっています。名前も林一男など日本人の名前をつけた人が多数います。当時は日本の大学を出て日本語が出来ると言うとど

こでも優遇されました。同じ総督府を置いた日本の行政でしたが、恨に籠った韓国と今でも日本統治時代の総督府をそのまま総統府として使っている台湾とでは今でも大分対日感情が違います。

二・二八事件は蒋介石の政策の後遺症としてあとあと尾を引きました。日本敗退後、南京中央政府から派遣された陳毅将軍の接収部隊は一般的な中央軍で、装備も服装も貧弱で草鞋履きで天秤棒に鍋釜を担いで船から台湾に降りて来たそうです。基隆（キールン）でも大勢の人が出迎えに行き、この状態を見てがっかりして帰ってしまったそうです。彼らのしゃべる言葉は中国の地方語で北京語でなく、台湾人と言葉が通ぜず、上陸すると途端に偉そうに威張るので、一層反感を買ってしまいました。台湾島人は日本軍を見て来ていますから、この上陸して来た中央軍にはびっくりしたものと思います。装備優秀な東北に来ていた、第一軍や第六軍に民衆に対する接し方をしっかり教育して、台湾にやって来たら二・二八事件は起こらなかったかも知れませんが、これも「ればたら」です。

あとで起こった台湾独立運動の口火を切った、台湾南部の美麗島（びれいとう）事件はこの二・二八から尾を引いているように思います。

蒋介石時代には台湾独立分子を片っ端から捕らえて、台東東側の緑島（りょくとう）と言うところに送りました。蒋経国（しょうけいこく）に替わってからも同じでしたが、実際は当時行政院長（総理）だった孫運璿（そんうんたん）を副総統にした後、蒋経国のあとを引継ぎ総統にする積もりだったようですが、あいにく孫運璿

は中風になり、車椅子の生活になった為、蒋経国は次に考えたのが李登輝でした。李登輝（りとうき）は絶対に台湾独立分子でないと見たようです。蒋経国の死後、李登輝は総統になりましたが、次第にその主張が替わって来ました。鄧小平が夏の幹部の避暑地である、北裁河（ぺたいほ）での高級幹部会議で、「李登輝は台湾独立を目論んでいる。今から要注意だ。」と注意したと伝えられています。孫運璿が総統になっていれば、彼は優秀な電気技術者で汚職がなく、一般国民からも尊敬されていましたから、台湾は大分違った方向に向かったと思いますが、これも「ればたら」です。

台湾を今日のような現代科学技術の先端を走るようにした最大の功労者は李国鼎（りこくてい）と言う人物です。ＫＡＮが基隆の近くで沈船引上げに従事していたころ、李国鼎は基隆造船所の総経理(社長)でした。その造船所の乾ドックの近くに沈船がありましたので、ＫＡＮはよく連絡の為、李国鼎総経理を訪ねました。ＫＡＮが沈船引上げの申請書を持って行くと李総経理は直ぐ係の人を呼び、申請書に赤で指示の文言を書き入れて渡し、ＫＡＮに安心して計画通りやって下さいと伝えてくれました。その場で直ちに決済してくれたわけです。ＫＡＮはこの人は偉くなると思いましたが、その後中央政府の経済部長（通産大臣）になり、蒋経国の許可を得て、米国に渡り、台湾から米国に渡っていた留学生を集めて、「台湾で先進技術の科学園区を作るから、皆さんは直ぐ帰国して、台湾の技術発展に力を貸して下さい」と話し、色々な優遇条件を示しました。

一方台湾の新竹市の外れにある土地を計測して新竹科学園区を開発、優秀な帰国留学生を

有利な条件で引張り込み、台湾の先進技術発展の基礎を作りました。まさに李国鼎は台湾の科学技術発展の大恩人だと思います。

蒋経国時代、汚職の取締り、社会の動乱を静める一方、中国大陸との統一も胸に納めていました。ある日突然、蒋経国が「一般台湾国民の大陸訪問を開放する」と発表、引き続き「商工業の大陸への投資を許可する」と発表しました。中国側は此の突然の発表にどう対応するか迷う一方、一番驚いたのは鄧小平でした。鄧小平曰く、「蒋経国との囲碁の勝負で最後に負けたよ」と言ったそうです。ＫＡＮは蒋経国を心から尊敬しています。若し彼がもっと長生きしてくれたらと思います。これも「ればたら」ですが。

台湾の学校の先生は公務員ですから、学歴証明が無いと申請出来ません。ＫＡＮは旅順工大の卒業証書は共産軍の追求を恐れて、母が早くに他の写真等と一緒に焼いてしまったものと思われ、何もありません。困っていましたら、台湾では証書の偽造がはやっているから偽造してはと教えられました。そこで早速に台湾に居た旅順の先輩の卒業証書を借りて、市内の割に低級な地区、万華区の小さい製本屋に、同時期に台湾に渡った同窓の友人と二人で行って頼み、数日間で見事に偽造して貰い、赤い印鑑は、街で買って来た芋に、先輩の本物の印鑑を写して、芋判を作り捺印したものを提出、無事受理されましたが、旅順工大は三年制高工であり、大学でないと言う判定でした。台湾政府の認識不足で、笑うより他はどうにも仕様がありませんでした。そのため四年制大学卒と大分、給与に差がつきました。折角入れて貰った台北工専でし

たが、夏休みが終わって新学期が始まると同時に、この資格審査が問題となり、止めざるを得ないことになりました。色々ご心配をお掛けした電気、機械の主任にお別れの挨拶をして、これからは学歴審査の問題が無い実業の世界で働く決心をしました。

同じ宿で次第に親しくなっていた、王さんが台湾工鉱公司機械分公司と言う日本の七つの中小企業を接収した組織の総務主任をして居り、彼の紹介で嘉義の第四機械廠（あとで嘉義機械廠に名義が変わる）に入社、鍛造工場の主任に就任しました。此の工場は鋳物、鍛造、機械加工まで揃った工場で主に織機を作っていました。そこでは日本統治時代にアメリカに爆撃された嘉義飛行場の格納庫の修理や鉄橋の製造などもやっていました。一年位勤めましたが、やはり台北で仕事がしたく、台北の第五機械廠（日本時代は北川製作所で、後に松山軌鋼廠と改名しました）に転職しました。所謂伸鉄工場で、基隆沖から引き上げられた沈船を解体、その鉄板を小さく切り、加熱して圧延ロールにかけて建築用鉄筋にしていました。その後此の会社の基隆の子会社でサルベージ（沈船の引き上げ）会社の主任に転勤になり、再び台北を離れて、雨の都、基隆に行きました。ここでは日本人の留用（日本敗戦後も希望されて残留した）潜水夫二人を使って、戦時中アメリカ空軍に沈められた、基隆港内にある日本の輸送船六隻を引き上げる作業をしました。

まず爆薬で沈船を一塊六〇～七〇トン位の大きさに切断して、八〇トン容量のクレーン船で引き上げて、岸壁に運び、ここで更にガス切断で小さく切断して、台北の本社に運び、シア

リングマシンで更に切断後、加熱して、圧延ロールにかけて、コンクリート用の鉄筋にして、市場に出すと言う仕事です。三年掛かりで基隆で六隻の沈船を引き上げたころ、台北の交通部（運輸省）に新しく出来た新中国サルベージ公司が出来て、そこからＫＡＮにサルベージの台湾唯一人の専門家と言うことで招請され入社しました。ＫＡＮはそれまでサルベージ等全く経験がなかったのですから、如何に戦後の揺動期とは言え思いがけないことになりました。基隆で一緒に働いた二人の日本人潜水夫も一緒に入社、新たに日本からもう一人若い潜水夫を招請し、トビ（高所作業専門職）も日本から一人招請、大所帯となりました。それに二十余人の一般作業者を率いて、高雄の南の東港と言うところに、事務所と全員の宿舎を借りて、近くの海に沈んだ船の引き上げ作業を始めました。

深いところは一二〇フイート（四〇ｍ）ありますから、基隆で使っていた四人で手押しする潜水夫（ダイバー）に空気を送るポンプでは空気量が足りませんので、電動式のコンプレッサーで空気を送らねばなりません。此の会社の社長、副社長ともアメリカ留学経験のある海軍技術中将でしたので、アメリカ海軍の資料を借りて貰って、勉強をして、ダイバー専用のエアコンプレッサーを日本から輸入し、アメリカ海軍の手順書どおり、三人のダイバーに減圧の動作を訓練し、水深に従って海の中で働く作業時間や海面に上がって来る時の減圧のやり方を決めて行きました。一つ間違うと、ダイバーが潜水病にかかり、時に死ぬことになりますから、全員真剣そのものでした。

一応三名のダイバー全員が完全に出来るようになってから、深海の潜水作業を始めました。船体爆破に使う火薬量も次第に増やして行きました。サルベージの台湾唯一人の専門家（エキスパート）として招請されたとは言え、ダイバーの命がかかった、ＫＡＮにはすべて初体験の大仕事、今思えば若さがやり遂げさせたものと思います。

爆破の度に海底から浮き上がって来る魚も大きくなります。種類も多くなり、時には長さ一・五ｍの大きいのが浮き上がって来ます。引き上げて此の戦利品を二人で天秤棒で担いで宿に持ち帰り、紹興酒を用意し、さしみにして全員で食べます。浅いところの魚より美味しいものでした。毎日紹興酒とさしみを楽しみました。こうして最初に二〇トン位の鋼塊を引き上げたときは皆で歓声をあげて大喜び、早速乾杯、乾杯でした。台湾の新聞には大見出しで報道され、曰く「交通部の新中国サルベージ公司のＫＡＮ氏はエキスパートで而も経験豊富、我が国初めての深海サルベージに成功」と詳細な記事と写真が載りました。

暫くしてから行政院長（総理大臣）から公電が入り、「ＫＡＮ氏を国家希有の専門家とする。何れ大陸反攻の場合にはあなたの経験と才能を真っ先にお借りすることにする」と言うものでした。米国の潜水作業に関するパンフレットには、深度潜水で気をつける一つに、潜水作業の前の晩のセックス禁止がありました。ＫＡＮは此等の注意事項を、三人のダイバーに繰り返し繰り返し注意を与えました。

ある日、通常通り、潜水船と作業船を現場に出して、潜水作業中に、あとで日本から招聘

した一番若いダイバーが急に異常を連絡して来て、規定通りに減圧して浮き上がらせて、カブトを外しましたら、その途端に目玉が飛び出して来て、まるで幽霊の顔です。此れは潜水病だと判断し、急遽全員を引き上げることにして、此の潜水病にかかったダイバーに再びカブトを付けさせ、水中に沈めて、船をゆっくり走らせながら、ダイバーには空気を送り続けました。夜中になり、カブトから彼の顔をのぞきますと、平常の顔に戻っていました。早速彼を宿舎に連れて帰り、ベッドに寝かせましたが夜中の三時頃彼が突然大きなうめき声をあげて、背中が痛いと言い出しました。直ぐ近くの病院に運びましたが、宿直の医者も潜水病を診るのは初めてとのことで、ともかく鎮静剤を注射して、色々の薬を貰って宿舎に戻り、寝かせましたが、四ヶ日目から次第に痛みがとれたようですので、ＫＡＮは彼にＫＡＮが指示した禁令を破っただろうと問いただしますと、彼は潜水の前の晩、飲み屋で女と遊んだことを白状しました。一応健康を取り戻したのを確認して、ＫＡＮは台北の本社に報告を出して、彼を日本に送り返しました。

潜水病は本当に怖い病気です。彼の場合健康になりましたので、ＫＡＮは責任を取らされませんでしたが、若しも彼が命を落としでもしていたら一大事でした。一度交通部所属の各部門の幹部が集められ、台北郊外の北投で運輸に関するセミナーがありました。基隆港務局、高雄港務局からも港務長、副港務長も出席して居り、八割は国民党党員でしたが、彼らからＫＡＮは盛んに国民党への入党を誘われましたが、ＫＡＮは大連脱出前後に、国民党も共産党も良

く見ていましたので、「絶対政治には関わりたくありません」とその場で断りました。

しかしどんなに頑張っても矢張り公務員では給与は安く、かつ学歴審査の影響で資格が随分低いクラスになって居り、なんとか個人の会社に入る努力を続けました。幸いに紹介があって、台北聯華実業公司に入社出来ました。社長は中国山東省烟台市から来た人で大きな体格で台湾の青年実業家として有名な人です。山東では商売をしていましたが、ＫＡＮが入社した頃は、台北市内で製粉工場を立ち上げ、後に製粉公会（組合）の理事長を勤め、台湾の製粉工業の発展に尽くした人です。

第二の結婚

一応台湾での生活に目途が立ったところで、大連に残して来た妻と、生まれているであろう子供を台湾に脱出させたく、船員をしていた叔父に手紙を託して連絡をとってみました。当時はまだ解放前ですから、普通の方法では連絡出来ません。船員の叔父から、香港の船会社経由天津の従兄弟に、そこから大連に連絡をとって貰いました。再び逆のコースで連絡され暫くしてから母から船員の叔父に渡った手紙が届きました。

妻は何も言わずに居なくなってから男の子を出産しましたが、ＫＡＮと全く連絡の方法が

無く、一年そこそこの結婚生活でしたので、あきらめを着け、新聞に一方的な離婚広告を出していました。そして妻の勤務先の小学校に勤務していた男と同棲生活を始め、その人の子を懐妊していました。ＫＡＮの親類もいつの間にか居なくなったＫＡＮは恐らく台湾に渡ったものと想像していました。母からの手紙はＫＡＮの無事を聞いて安心した。ＫＡＮの妻は既に他の男と同棲しているし、ＫＡＮは台湾で良い人を見つけて再婚しなさいと書いてありました。そしてＫＡＮが居なくなってから生まれた男の子は元気ですとありました。黙って捨てて来たＫＡＮは言う言葉もありません。

ＫＡＮとしては、その頃大連では自然災害で食料が極端に不足し、木の皮まで剥いで食糧にして居り、餓死者も沢山出ていると聞いていましたので、何とか妻と男の子が香港まで来てくれれば、香港から台湾に渡らせられる方法がありますし、事実此のルートで何人も台湾に渡って来ていましたので、是非来て欲しいと思っていたのですが、あきらめざるを得ませんでした。こうなればやはり将来を考え再婚を考えるほかありません。

ここで再婚の対象に最初に考えたのは、大連で心を通わせていた日本人のＷさんです。旅順工大先輩の中国語の上手な増田さんに頼み、たまたま増田さんの奥さんが勤務して居られた、東京にあった関東州残務処理事務所で調べて貰ってＷさんと連絡が着きました。

平塚に住み東京で会社勤めをして居り、未だ独身でした。それから文通を始めお互いの心を確かめ合いました。何回か手紙の交換をした後、聯華実業公司の社長に事情を打ち明け、東

京に社用で出張させて貰い、彼女に会いました。彼女はカソリックの信者になって居り、彼女の教会にも連れて行きました。そこで話の中で、カソリックでは既婚者とは結婚出来ない戒律があることを知り、ＫＡＮは彼女に結婚を申し込むチャンスを失い、そのまま帰国しましたが、ＫＡＮは諦めることが出来ず、次の訪日の機会に名古屋の彼女のお父さんに会いに行き、結婚させてくれと申し込みましたが、彼女の父は当時台湾は共産軍と金門島を挟んで対峙、毎日砲撃戦をして居り、何時全面戦争になるか判らない緊迫した空気になっていましたので、彼女の父は「そんな危険なところに娘をやれない。どうしてもと言うなら、ＫＡＮさんが日本に来るのなら結婚させます」と言います。

ＫＡＮはその後色々調べましたが、日本人ですらなかなか食べて行けない当時の日本の事情でとても永住ビザは取れず、どうにもなりません。その後聯華の社長も自分で日本に行って彼女にも会いましたが、帰国してからの話では「難しいことだ」と言う言葉でした。その後ＫＡＮが日本に行った時も彼女に会いましたが、その時は彼女はカソリックのシスターになって居り、「私は一生結婚しません。ＫＡＮさんのお幸せをお祈りします」と言って別れました。ＫＡＮはこのことで、最高の懺悔を感じました。永久に忘れられない胸を痛める懺悔でした。

ここまで来ると聯華の社長や友人から次々と縁談を持って来ます。しかしＫＡＮは五年程は一切結婚を考えませんでした。同時に持病の喘息もあり色々悩みました。

そのとき天津の従兄弟が「結婚するなら家庭的な人を選べ」と忠告してくれました。そし

て今の妻を選びました。妻は広東省の北部から来た女性で、台北護士（看護婦）専科学校を出ていました。七年間も付き合い、ＫＡＮは「一生結婚はしない」と言いましたが彼女は諦めません。とうとうＫＡＮも決心して、最後に決めるとき、ＫＡＮは「私には台湾に来て始まった喘息と言う持病がある」と言いますと、妻は「喘息は病気でない、心配要らぬ、奥さんになってあげる」と言い縁談がまとまりましたが、台湾に渡ってから十年目の結婚でした。

彼女は大連の最初の妻も子供が出来ていることも、ＫＡＮが大連脱出後、最初の妻が新聞に一方的に離婚広告を出して、他の男と同棲を始めた事も、すべて知って居り、Ｗさんのことも詳しく知っていました。ＫＡＮの喘息は家内の言う通り、シンガポールで住む様になってから完治しました。Ｗさんからの手紙も妻がすべて保存してくれていました。その上大連の最初の妻にも今の妻が会いに行きました。

改革解放が始まり台湾から本土にわたることが出来る様になると、直ぐ今の妻は広州の潮州にある、彼女の父親の墓参りに行きました。それまで死んだとわかっても墓参りにも行けなかったのです。ＫＡＮの母親の場合も同じでした。そこの広州から彼女は大連の兄の次男に連絡を取り、兄の次男及び、最初の妻の間に出来た、当時結婚していたＫＡＮの息子夫婦と三人で北京まで迎えに来てもらい、北京観光を四人でした後、大連に行き、最初の妻と会い、一晩泊まって色々話をして来ました。ＫＡＮの想像では当時最初の妻と同棲した男は、前の夫が台湾に居ることを聞くと、解放前はこと台湾に関係があると判ると厳しく調べられますので、怖

くなって逃げてしまった様です。今の妻が訪ねた時は前の妻の一家は生活も安定しているようで、住まいもＫＡＮの父の海外関係者と言うことで、会社の最高幹部が住むのと同様の宿舎に住んでいました。以上を細かくシンガポールに帰ってから報告してくれました。あとは妻は大連郊外の、共産党幹部が泊まり、毛沢東や周恩来総理の別荘がある、棒錘島賓館に泊まったそうです。ここは大連の東南にあり、風水で都の東南が最も幹部の別荘に良い方角と言います。此の棒錘島賓館は入口の門には武装した兵隊が立っていますし、大連市内から離れていますが、当時は最高のホテルでした。宿泊者用のプライベートビーチや室内プール、カラオケルーム、三ホールのゴルフコースや各種ゲームを備えています。今はもっと良いホテルが出来ていますが当時としては最高のホテルでした。

今の妻が前の妻や息子を訪ねてから二年少したってからＫＡＮは今度は今の妻と一緒に、前の妻と会いました。前の妻とは多くを話しませんでした。お互いに色々のことがあったのですが、ＫＡＮが妊娠していた彼女を捨てて台湾に逃げたことは、回りの親類のものたちも想像していたことですし、一年そこそこの新婚生活は二人を永久に結びつけるまでに至らなかったわけで、彼女が他の男との同棲を当時生きていた母の手紙で知ったあとは、「済まない」と言う気持ちはなくなっていました。息子は素直に喜んでくれました。その後息子とは毎年の様に大連に行くたびに会って、色々援助してやっていますし、最初の妻とも時々会っています。

最初の妻が同棲した男が逃げ出す時に懐妊していた子は女の子だったそうです。親戚の話

によると、ＫＡＮの最初の妻は、此の女の子は叔母さんの子を預かっているのだと説明していたそうです。叔母さんの子なのに、最初の妻に「嫣々（まあまあ）」（お母さん）と呼びかけて居り、なんでと思ったそうです。此の女の子は小学校に行く前に病気にかかり死んだそうです。

郷里の岔溝会（さこうかい）には、北の山の麓に父及び祖先の墓が一〇〇基余り並んで居り、岡の斜面に前に川が流れ、南の遠くには山が龍が伏せった形に連なり、風水の専門家が最高のお墓と称賛していたのですが、日本敗戦後、墓は皆盗掘に会い、先祖が生前愛用した宝石類や色々の陪葬品はすべて持ち去られて居り、人民公社になってからは、平地にして全て畑になっていました。今では人民公社の人々が政府から借りて農地にして居り、せめて両親や祖父母の墓だけでも返却して欲しいと、大連市政府と交渉しましたが、市政府の人は自分達ではどうすることも出来ない、大連市の中に、北京に本部を置く、台湾対策を任務とする、統戦部の大連支部があるから、そこで交渉してくれと言います。其の統戦部に出かけ交渉し、シンガポール華僑が帰国して墓参りしたいが、先祖のお墓がないと困ると言う理由で申請しましたら、認めてくれて、昔の人民公社を経営している幹部とも相談して、両親及び祖父母の関係の五基だけ返却してくれることになりました。畑の真ん中の元の位置に戻して貰い、墓参りに行きますと、林檎畑を通ります。するとそこの管理をする農民が出て来て、「林檎に触るなよ」と言います。以前は皆私たちの林檎園だったのです。思わず親戚と一緒に苦笑いをしてしまいました。

今の妻は仏教を信仰していて、シンガポールではその団体に入り、自宅にも仏壇を置き、

仏堂には毎週熱心に通って居り、仏教団体の皆と一緒に中国の黄山、峨眉山、九華山、五台山、武夷山等お寺のある山や最近は南アフリカ等に団体で出かけています。ＫＡＮは特に信仰心がありませんから、この点はお互いに不干渉ですが、前の妻の問題と言い、Ｗさんの問題と言い、私だけでは全く解決出来なかった問題を円満に解決してくれた、心の広さには有難いと思っています。台湾で親しい従兄弟の勧め通り、家庭的な良い妻と結婚出来たと思います。ＫＡＮが三十七才の時の再婚でした。台湾で二人の男の子が生まれました。

台北聯華実業公司

ＫＡＮが入社した台北聯華実業公司でのＫＡＮの最初の任務は、製粉工場の副工場長でしたが暫くしてから工場長になりました。入社してから、小麦を粉末にするロールを、最初はロールの直径が一〇インチだけであったのを、ＫＡＮは再三日本に出張し、日高社、東京製粉機、明治機械などから、二十四インチ、三十二インチとどんどん新しい能力の大きな設備を輸入し、最後には台湾では最初のスイスのビューラー社から最新鋭の設備を導入しました。ＫＡＮは台湾希有のサルベージ専門家から、今度は製粉専門家に変身したわけです。どれも旅順工大時代には具体的には習ったことの無い機械ばかりでしたが、ＫＡＮは各会社の技術者に台湾に来て

貰い貪欲に新しい技術を吸収して行きました。台湾は日本の技術者が引き上げた後は誰も専門家と言われる人は居らず、丁度明治維新の時の日本の事情に似ていたと思います。

台湾の人は素直でとにかく良く働きます。二・二八事件以来長い間戒厳令が引かれていましたし、輸入品には高い関税をかけて台湾国産を奨励して居りましたが、日本と違い土地売却税制や個人の所得税が日本ほど高くなく、生活を地味にして良く働けば、皆貯蓄を増やすことが出来ましたし、これがために個人の企業が健全に発展出来ました。勿論このやり方は貧富の差を大きくしますが、金が欲しい人は支出を押さえて一生懸命働けば良いのですから台湾の人は国際的には極めて不安定な状態にありながら、お金を蓄え、将来の為にちょっとお金の出来た人は、子供をアメリカやオーストラリアに留学させ、その地で根を下ろさせると同時に、英語と国際感覚を身につけさせる様にしています。

貯めたお金の投資も、台湾内の事業に個人資金で投資するだけで無く、アメリカに居る子供たちから来る混じり気の無い情報や自分でその目で耳で確かめて、ロスアンジェルスやニューヨーク等の豪邸などを安く買って資産を増やしています。

日本でも日本内の英語教育では受験英語の力だけで、実際の交渉には全く役に立たず、海外旅行でもブランド製品の買い物だけに熱中して、中学校以来十年も習った英語は全く役に立たないことが、日本人も最近気がつき、盛んに海外の学校に留学させるのがはやっていますが、出かけた子供は教室ではまったく授業に付いて行けずあとは同じ日本人同士で群れています。

台湾では最近の総統選出の総選挙の折りには、李登輝が従来の方針を変え、所属の国民党内の分裂を図り、台湾独立を主張する民主進歩党の陳水扁（ちんすいへん）が総統になりました。中国政府は台湾対岸に攻撃兵器を配置して、大規模な軍事演習を行い、威嚇を繰り返して居ります。台湾の民衆にとっては恐怖を感じる問題で、本省人、外省人を問わず、カナダ、米国、オーストラリア等への移民申請を起こしています。ＫＡＮの友人にも、一人は台湾で大きな貿易会社を経営し、その息子は台湾で弁護士、兼大学教授ですが、カナダのバンクーバーに移民申請中で、許可が下り次第移民すると言っていますし、他の一人の友人は、奥さんが次男を連れて先ず五年前にカナダに移住、今は公民権をとって居り、台湾に残っている、友人とその長男は「いざ鎌倉」と言う時は、何時でもカナダに移住出来る準備を整えています。その外ＫＡＮの友人で、オーストラリアに家族一緒に移住したのが二家族居り、先日オーストラリアに行った際、メルボルンでその二家族を訪ねましたが、皆良い生活をしていました。その外、従来から台湾に住んでいた所謂本島人も事業に成功した人は、米国に大きな住宅を買ったり、投資をして争乱に備えています。

九九年の租借を終えて、香港は中国に戻りましたが、多数の人がオーストラリア、米国、カナダに移住してしまいました。オーストラリアはもともと白豪主義で移民を厳しく制限していましたが、或る程度の預金を積めば中国系の移民を認めて居り、今や人口二、〇〇〇万人のオーストラリアは中国系が大きな割合を占める勢いです。シンガポールを扇の要として東南ア

ジアは華僑と呼ばれる中国系住民が経済を握っていますが、その波はオーストラリアに及びつつ有ります。オーストラリアにとって最大の貿易相手国は日本であり、多くの商社が来ていますが、居住権をとって永住する日本人は極く一部です。ただ先に申し上げた様に、オーストラリアにはかちかちの白豪主義者も多く、ＫＡＮがシンガポールの団体でオーストラリア南部の島、タスマニア島を訪ねた時、同行のシンガポール人と一緒に夕方道を歩いていましたら腐った林檎を投げつけられました。この島にはこちこちの白豪主義の婦人国会議員がいると聞きました。

日本の大臣で外国の政治家と英語で渡り合えれるのは、戦後最初に日本を率いた、吉田総理のほかは数えるほどしかいませんでしたが、今度の小泉内閣には小泉総理のほか、田中真紀子外務大臣他海外で留学経験のある大臣が多く居られ、英語で他の国の大臣と話が出来るのをＴＶで見て、ＫＡＮは大変良い傾向と思います。ＫＡＮは日本の子弟が若い間にどしどし海外で留学して、英語を身に付けられることを希望しています。

ＫＡＮが台湾から渡ったシンガポールは七三％が中国人ですが、公用語は英語です。ＫＡＮが大学時代は工学の専門書はドイツ語が多く、医者もカルテの名が示す様にドイツ語が出来ないと仕事にならなかったのですが、今はＥＵがスタートし、ドイツ国内でも英語が出来ないと就職が困難になっています。

日本も英語教育に力を入れないと今後ＡＳＥＡＮ諸国にも太刀打ち出来なくなるのではと

心配しています。ＫＡＮは日本人の小学校、中学校、大学で学んだ中国人です。ＫＡＮが中学校でたたき込まれた、教育勅語は戦後間もなく廃止され、今の日本人の子供は小学校の時から修身無しで教育を受けています。今はシンガポール人の中国人ＫＡＮは疑問でなりません。ＫＡＮは今でも毎年二回は日本で開催される小学校、中学校、大学の同窓会を楽しみにして訪日して、かつての同窓生と旧交を暖め一緒に大連の母校を訪問、その後の今の母校の先生と交流を深めています。

中国海軍の海軍病院となった旅順工大は今はありませんが、大連の聖徳小学校は東北路小学校として健在、大連中学は今は陸軍関係の営業機構となっています。大連から逃げ出し、今はシンガポール国民で中国華僑となったＫＡＮには大連はふるさとであり懐かしいを通り越した街です。ＫＡＮは台湾、シンガポールで一生懸命働き、安心して生活出来る蓄えもありますし、今後売買自由になった大連で、良い家を見つけて、夏は大連で冬はシンガポールで暮らしたいと思って、大連に行く度に良い家を捜しています。ただ大連に余り関係無く育った今の妻は此の計画に余り熱心ではありません。大連の同窓生とつき合って思いますが、大連育ちの人は日本内地で育った人と違い、明るく進取の気性に飛んでいる様に思います。ＫＡＮは幾人もの日本人同窓生の奥さんから「うちの主人は日本人じゃない」と言われました。やっぱり中国で育った日本人は違うようです。

帝政ロシアが残した美しい大連の街はそこに居た中国人にも、日本の取った無税港政策が

影響を与え、他の地区の中国人と違い、明るく進取の気性を持っている様に思います。ＫＡＮの二人の男の子はシンガポールで基礎教育を終えた後、長男はカナダ、モントリオールのMcGill 大学で Food Science を専攻後、ＭＢＡを卒業、長男の卒業式にはＫＡＮ夫婦はアメリカを回ってカナダに行きました。

次男はカナダ、トロント大学で Engineering Science 専攻後、アメリカのスタンフォード大学の大学院で三年半経済分析法を学んで、Master を終えて帰国、長男は商売が好きで、中国の香港を経て今は成都でスウエーデンの Atlas Copco のコンプレッサー、及び Volvo の大型車の総代理権を取って商売をして働いています。次男のスタンフォード大学院卒業の時は、ＫＡＮは妻と一緒に出かけ、次男の卒業を祝った後、妻と二人でアメリカ、ヨーロッパを見て回りました。二人の子供にカナダ、アメリカで教育を受けさせるのはＫＡＮにとっても大きな負担でしたが、やはり良い教育と豊富な英語知識が此の子らの将来の役に立つと思い、やりとげました。

幸いに次男はシンガポールの有力銀行に就職、外国為替の業務につき、先年のタイのバーツ暴落の時は旨く売り逃げ、銀行に日本円で二十五億円の利益をもたらし、銀行は次男に一億二千万円のボーナスを支給してくれました。当時次男は三十六才、そのときシンガポールではもう一人同じ様な金額のボーナスを貰った男が居り、ビッグ2だったわけです。初め次男は私どもに黙っていましたが、次男の嫁から妻に漏れました。その翌年は三、二〇〇万円のボー

ナスで、次男の嫁は此れが前年の一億二千万円の税金と一緒で、今年は差し引きゼロですと笑っていました。

妻の信条は親は絶対に子供に手を出してねだらないとの方針ですので、ＫＡＮも外国旅行の場合は自分の貯金を下ろし、次男に最も有利に外貨に交換してくれと言いますが、相当の外貨を渡してくれて、ＫＡＮのシンガポールドルは受け取りませんでした。同時に南アフリカに宗教団体の旅行で行く妻にも現地のドルを交換せずに渡していました。

次男はＫＡＮが何回も裸一つになってスタートしたのを聞いていますから、金に溺れることは無いと信じています。長男の妻は長男がカナダの大学に居た時の同級生で今はシンガポールで中学校の教師をして居り、長男は中国の成都に単身赴任です。次男の妻はシンガポールの国立大学出で、銀行でマネージャーの仕事をして居ります。

今日本ではリストラで多くの知識人が働き盛りで職を失い、連日新聞でも書き立てていますが、この人達の親はＫＡＮと同じく戦後裸一貫で再スタートして今の日本の繁栄を築いた人たちです。バブルがはじけたと言いますが、アメリカの国民が先日のロシアルーブルの下落で行き詰まった、ヘッジファンドを国家の金で救済するのを、「ラスベガスで大ばくちですった者を何故国民の税金で救済するのか」と反対していましたが、今の日本の銀行、ゼネコンの国家資金による救済も同じ原因と同じ対策です。

台湾にもシンガポールにも所謂財閥と言われる企業があり、此の台北聯華実業公司も現在

の社長が一代で築いた会社ですが、他の財閥と同じく根本は自己資金です。先年もバブルの頃日本の三菱系の土地投資会社が、こともあろうにアメリカ人の魂である、ニューヨークのロックフェラーセンターを買収して居り、当時シンガポールにいて此のニュースを新聞で読んだ時、優秀な人材を抱える三菱系の会社がなぜと思いました。中国の天安門、日本の宮城前の大楠公の銅像のところを外国人が買収するのと同じです。数年もしない間に此の会社は大きな損失を出してここを売却しました。幹部の国際感覚の欠如としか言い様がありません。しかしソニーや松下のパナソニックの様に、特にソニーは、アメリカ人はアメリカの会社と思っている人がいます。松下は中国に溶け込み、そして肝心のところの契約はしっかり押さえて置く。松下は愈々中国での足場を固めています。

編著者注記：戦時中漢口の揚子江岸を占拠した日本企業は、日本軍の敗退で、その埠頭の権利を安値にたたかれ中国人に売って退却、日本軍が再び進攻、軍の要請でまた中国人から高値で買い戻していましたが、中国政府としっかり弁護士を介して土地使用権をとっていた、欧米系の石油資本は共産党政権になっても、国際法で守られている土地使用権は残りました。言葉が自由に出来ない日本人は現地の中国人通訳が正しく通訳しているかも判断出来ませんでした。是非日本の学校教育で此の外国語教育と修身教育は考え直し早く実践に踏み切ってほしいと思います。そうしないと先人の血であがなった権益が失われて行きます。

台湾の将来を色々憶測する記事が日本の新聞に出ます。此の台北聯華実業公司の社長ももとは山東人ですが、常にこの問題は念頭に置いています。中国の山東、上海、広州にも大きな投資をする一方、タイ、シンガポールとアメリカへの資本の分散、企業の国際化、それと良い人材の確保です。ＫＡＮもそのお陰で良いポジションを得ることが出来ました。台北聯華実業公司の海外投資の第一歩はタイ、バンコクの人造繊維工場と酸素工場でした。この酸素工場の建設にＫＡＮはバンコクに派遣され、一年程で小型の酸素工場を建設しました。タイは工業の発展に一生懸命でしたが、当時まだ液体酸素工場はありませんでした。台北聯華実業公司は最後には大型の液体酸素工場に進出する計画でしたが、提携相手の人が四十代で急逝し、計画が途切れました。

ＫＡＮはバンコク滞在中にタイの移民局長と知り合いになりました。タイでは移民局は警察の管轄で、此の局長は警察でも有名な偉い人でした。ある日ＫＡＮは友人の紹介で局長の自宅に昼食によばれ、その昼食の席で局長は、ＫＡＮが機械屋で色々の工場建設の経験を持っているのを知って居り、タイではＫＡＮの様な技術者が是非必要で、ＫＡＮに永住権を差し上げます。続いて居て頂ければ公民権を差し上げますと言われました。

ＫＡＮは厚くお礼を言って別れましたが、その翌日移民局から電話があり、日本の警察大学を出た部長級の永住権の決定権限を持った偉い人から接待を受け、その場で永住権の手続き

をしてくれました。その後、此の部長とも仲良くなり、よくバンコクの日本料理を一緒に食べに行きました。

その後、提携相手の急逝で台湾に帰りましたし、タイの永住権は一年毎に延長手続きが必要ですし、且つＫＡＮはシンガポールの公民権をとる事になりましたのでタイの永住権は放棄しました。これも「ればたら」ですが、若しタイの提携相手が元気なら、今頃はＫＡＮはタイで公民権を取って仕事をしていたかも知れません。

台湾に戻った後にＫＡＮはアセチレン、酸素、窒素、アルゴン、水素等の工業ガス工場の数々の工場の建設を手がけましたが、その間に海外発展の次の目標を考える為に、社長に同行してグアムに三回、シンガポールにも四回程往復し、現地の経済発展局と何回も打合せを行い、社長は最終的にシンガポールを目的地に選び、ＫＡＮは最初に大型酸素工場ＡＩＧの建設にたずさわりました。此の間に聯華社長に同行アメリカ各地を巡り、投資の見込みを実地を見て研究し、打合せをして来ました。

シンガポールの友人

ＫＡＮと一緒にシンガポール国籍を得た譚攸沺と言う友人がいます。彼は実業の能力、即

ち先見性と実行力があり、今はシンガポールで有力な実業家になっています。彼の父は台湾聯華実業公司の株主、彼の父の没後、この株を資金にしてシンガポールで事業を起こしました。彼は最初は聯華のシンガポール、ガス工場の責任者だったのですが、ここを辞め、聯華の株を売って、同じく酸素会社を造りそこで一儲け、次はドイツの会社の酸素製造工場と提携して、資本をシンガポールに導入、共同経営を行い、マレーシアのジョホールバルにケーブルとワイヤの新工場を設立、株式市場に上場、今は台湾に電子部品の会社に投資して成功しています。彼は中国にも進出、上海で工業ガスの工場を設立しました。当時シンガポールで国籍を取るのには、永住権を取得してから、十年目に初めて申請出来る規則になっていました。それが譚攸沺さんは公民権を申請から六ヶ月で取得しました。そうしてＫＡＮにも盛んに公民権の申請をする様に勧めます。ＫＡＮはあまりその気はなかったのですが、海外に出る場合、シンガポールのパスポートは日本のパスポートより効力があると言う魅力に引かれて、それでは申請して見ようかと言う気になり、移民庁に申請書を出しましたら、三ヶ月で許可が下り、今度は譚攸沺さんがびっくりしました。考えますとＫＡＮの学歴、職歴、現職を調査し、特にその頃各地で港湾局の入札に参加していた、航路標識（ライトブイ）及び灯台は特殊技術になりますので、移民庁長のサインで許可になったものと思います。普通は申請者の資料が各部局長を回って調査の上、最後に移民庁長に戻るのには十ヶ月以上かかっていました。

妻の方はすぐに許可になりました。シンガポールのパスポートは共産国家、及び中国以外

は世界中のどの国でもビザ無しで行けますから、大変便利です。シンガポールは小さい国ですが、国際地位はトップクラスです、これはリークアンユー前首相が築き上げた基礎によるものです。

台湾の友人

高雄で製鋼会社を経営する邱社長も小振りですが。優れた経営者です。ＫＡＮが高雄で仕事をしていた時、アセチレンプラントの鉄鋼組み立て製品を高雄の彼の工場に頼んだのが縁の始まりでした。父親の代、日本統治時代から高雄市内で小さい鉄工所を経営していた父に小さい時から厳しく鉄工所の技術と経営をたたきこまれ、学校は高等学校しか行っていませんが、先見性、実行力ともに備わった経営者です。その時代から親交を深め、母親が台湾人と結婚した日本人で、その娘との結婚にＫＡＮは仲人をたのまれ、今でもＫＡＮが高雄に行くと、何時もは接待には出ない人が、ＫＡＮが滞在中は散髪まで一緒に行ってくれます。此の邱社長の仕事には絶対手抜きがありません。それでＫＡＮも絶大な信用を置いて、高雄工場の仕事を頼んだのです。常に朝八時には工場の社長室に入り、常に現場を回り、すみずみまで目が届いています。

奥さんが外交上手でふたり常に携帯電話で連絡を取り、経理は奥さんが一切握っています。

ＫＡＮはよく「此れでは浮気の一つも出来ないね」とからかいますが、彼はにこにこ笑っています。台湾国営の機械工場が行きづまり、入札で売ることになり、邱社長は日本円で五億円で買い取りました。二、〇〇〇トンの鍛造プレス、二〇トン二五トンの電気溶解炉、圧延設備と三万坪の大工場です。お定まりの役人経営で五億円の借金をかかえて行きづまったものです。今邱社長夫妻は全力投球で此の工場の再建に取り組んでいます。邱社長は今まで仕事をして儲けた金をすべて当時坪二、五〇〇円だった良い場所の土地に投資、それが今六万坪、坪十万円になっていましたから、六〇億円の資産です。奥さんは「私は今の生活で十分満足、これ以上の冒険はしないで欲しい」との意向でした。

邱社長の会社の役員会は朝の出勤の車のなかです。七階建の自宅に一緒に住んでいる、奥さんの母親（日本人）ともう一人の昔からの重役ですが、「男一匹やりたいことをやらせましょう」と言う結論で、政府の許可に一年位かかり、スタート、邱社長は早速今までの工場を古い腹心の人にまかせ、ここには日本の学校を卒業した娘を一緒につけて、自分は三万坪の国営工場の再建です。始め追加資金十億円、合計十五億円を予定しました。

一年足らずの間に工場は見違える程整頓され、ただ座っているだけで高給をとっていた、公務員の技術者は退陣願い、目下新たにチタンに進出を考え、日本やロシアのチタン関係の工場から技術導入して準備を進めています。邱社長自ら欧米日をまわってチタンの行方を見定め

ＫＡＮ夫妻と次男（アメリカスタンフォード大学で）

ています。当時は台湾は日本と違い取得不動産を売却した時の税金は、販売価格の一〇％でした。日本は個人の所得税も高過ぎます。沢山の所得を得る人はそれだけ能力のある人ですから、どんどん力を付けさせ発展させて更に税金を頂く方が合理的と思います。日本は戦後財閥解体のアメリカの政策を拡大解釈、能ある鷹の爪を切ってしまっている様に思います。これでは次に発展出来ないのではと思われます。

台湾の将来

誰にも予測の困難な問題ですが、台湾人であったＫＡＮの個人の意見としては、

李登輝が総統を十年続ける間に汚職はひどくなり、フランスから買った最新鋭の戦艦、ラフェットはシンガポールが同じ船を買った値段の二倍であった等と言われました。李登輝が所属する国民党を内部分裂させ、民進党の陳水扁が総統になり、最近「両国論」「本土化」を唱えだしています。一九八〇年台湾、中国の両岸が交流しだしてから、遅れていた大陸は予想以上の速度で発展し、上海のような大都市が出来上がって来て、上海だけをとって見れば、民衆の生活水準は台湾と大差は無くなって来ています。

香港、マカオの一国二制度も一応認められて来て居り、台湾での統計によれば、台湾が本土と仲直りして一国二制度にする方に賛成する人が次第に増え、台湾独立を標望する人が次第に減る傾向にあります。扁李（陳水扁＋李登輝）と連宗（連戦＋宋楚瑜）の二大陣営対立の様相を呈して来ています。又新党の力も軽視出来ません。今の台湾の政党は極右派の新党、中間で左よりの民進党、国民党と親民党が中間右よりとなります。何れも米国のバックアップを頼りに台湾が大陸に飲み込まれぬ様に苦心惨憺ですが、中国は台湾対岸の福建省海岸に着々と攻撃基地を作りつつあり、全く予断を許さぬ状況です。又李登輝を国民党から追い出すべしと主張する人も増えて来ています。李登輝時代最も台湾の国民を悩ませたのは黒道政治です。黒道がはびこり、政治にまで黒道が浸透し、国会議員や政府高官にまで入り込んでいました。

実業人は勿論一般国民も台湾の将来は誰にも予測出ませんが、一生懸命に働き、世界で五指に入る外貨を蓄え、今やパソコンのボードは世界一の品質と生産量を持つ台湾は立派な独立

体と言っても過言ではありません。

台湾がやれずにいるのは、公害防止です。ＫＡＮの喘息は台湾の汚れた空気が原因です。排水処理もやかましくなって居りますが、金儲け第一の台湾人はなかなか守りません。しかし最近は政府も国民も一生懸命、公害防止に取り組み出しました。次第によくなると思います。

日本はすっかり綺麗になりました。空気も水も街も綺麗です。ただ街のゴミ処理はシンガポールが進んでいます。今や地球資源も限られていることがはっきりしています。中国も汚職と人口抑制及び環境問題に全力をあげていますが、日本は今少子問題が取り上げられていますが、世界的には日本の人口問題の成果は見本となるものです。中国の様にある一定の線を越えると人口抑制は非常に難しくなります。一人っ子政策、断種と思い切った政策を打ち出していますが、皆長生きになって、今度は社会主義の大事な政策、退職者を一生面倒を見る政策が養い手が居なくなると言う問題が出て来ています。

ＫＡＮは今八十才に近い年ですが、幸い持病の喘息もシンガポールに来て全快、健康ですので、働ける間は働こうと思っています。親は子に手を出さない原則を最後まで守りたいものです。台湾は国民党の名残りの役人の治める国です。その遺伝症はなかなか抜けずやはり汚職はあります。アジアで汚職の無いのは、シンガポールと香港です。日本の忠臣蔵は日本人が大好きなドラマですが、やはり汚職の物語です。香港も返還後最初の大事業、香港新国際空港の開場で荷物搬送のコンピューターが旨く動かず大恥をかきましたが、今まで汚職のなかった香

港がなぜとＫＡＮは疑い出しています。

何れも、もと英国の統治地です。英国人のすばらしさを感じます。シンガポールには貧汚調査局、香港には廉正公署と言う汚職取締りの専門の部局があり、目を光らせています。中国もＫＡＮが脱出するときは共産党は汚職のない組織でしたが、安定と改革解放後はまたまた汚職まみれになっています。此れは中国の将来に大きな影響を与えるものと思います。

中国には定年退職に三種類あり、解放後ずっと五十五才又は六十才まで働いた人は、離休と呼ばれ、定年後も死ぬまで同一給料を貰い、物価上昇に応じて増額されます。勤務先を替わって定年になった人は退休と呼ばれ、現職時代の七～八割の給料を保証されます。会社の組織変更等で辞めさせられた人は下崗と呼ばれ、此の特権はありません。この種の人が国営工場の組織変更で追い出されどんどん増えて来て社会問題になりつつ有ります。

中国山東省烟台

聯華社長が中国、出身地山東の烟台に製粉工場を日本円で三十億円投資して作ることになり、製粉工場の立ち上げに経験のあるＫＡＮに建設の監督から工場立ち上げの監督を委嘱して来ました。一九九八年から何回も烟台に通い、工場建設立ち上げ時は十ヶ月も滞在しましたが、

汚職にはＫＡＮも根を上げました。それと烟台は冬は寒く、暖かいシンガポールに居るＫＡＮにはこたえました。前にも煙台は同じくシンガポールの製粉会社プリマ社の招聘で製粉工場の建設で行きましたが、プリマ社の当時は改革開放直後で壁に耳ありの時代で、自動車のなかでもうっかり政治の悪口を言うとあとで引っ張られる時代でしたが、今回は何をしゃべっても天下御免で、中国も変わって来たと感じましたが、ＫＡＮが中国脱出時の共産党にはなかった汚職がはびこって来ていました。

　此の工場は台湾資本だけの投資、所謂独資でＫＡＮの宿舎も、今はすっかり昔の様子はなくなり、近代的な風景に変わった煙台でも第一のホテルに宿をとってくれていました。又三ヶ月に一度は休暇がとれ、シンガポールへの往復はビジネスクラスかファーストクラスの飛行機で往復させてくれました。

　日本でも汚職はありますが、中国は地方政府を含めて十万元（一五〇万円）以上の収賄には、最高で死刑で臨んでいます。ちょっと考えられない重刑です。それも日本では死刑を宣告しても年に数人しか死刑が執行されませんし、執行が新聞に出る度に、死刑反対論者の声を新聞は報道します。中国人は年に死刑執行が毎年五、〇〇〇人位と言われていますが、ある中国人は毎年一万人でもまだ足らない等と言っています。

　烟台である日、台湾から連れて行った電気技術者が、最高技術顧問のＫＡＮに一〇〇ｍある地下ケーブル用の電線の一巻が、使って行ったら八〇ｍしか無いと報告して来ました。同時

に彼は早速購買担当者を呼び質問すると、直ぐに上等の酒と最高の品質のたばこを彼のところに持って来ました。彼は「私は酒は要らない、不足の二〇ｍの電線がないと工事が進まないのだ。電線の不足分を出してくれ」と言いますと、その係員は「この酒は最上級の酒です。たばこも最上級ですよ」と食い下がりましたが、結局すったもんだの結果不足分は手配して持って来たそうです。又製粉工場は原料の小麦をストックする大きなサイロが立ち並んでいます。

そのサイロの出口は円錐形状になりますが、工事を引き受けた建築業者が無錫の下請けで作らせたものが入荷しました。図面をもとに調べて見ますと、サイロの円錐形のところの鉄板・大小まちまちの鉄板で溶接されています、鉄板の厚みは一応図面指定の通りです。ＫＡＮはこの夫々のサイロには二、〇〇〇トンの小麦が入る。その重さに耐えるには、図面通り竪に同じ大きさの鉄板で溶接してもらわねば持たない。それにサイロ内面の溶接箇所に巣が多い。磨きも不十分だ。このまま小麦が入ると、その巣の穴に小麦に混じっていた虫の卵が引っかかり、成虫になって製品の小麦粉の中に入る。無錫の製品は返却して、造り直せと言いましたが、その鉄工所及び建築業者はＫＡＮが休暇でシンガポールに帰っている間に副総経理に圧力を掛けて来て、副総経理を困らせていました。

しかしこのままでは駄目ですので、溶接は烟台は港で造船所が多いので、最も溶接の厳しい、造船所の溶接工を呼んで来てやり直せと命じました。ＫＡＮは技術顧問ですから命令権はありませんが、ＫＡＮがサインしないと、聯華の社長は金を支払いませんから、やっとやり直しに

同意しました。こうして何度もやり直して、どうにか受入れ出来るものが出来ました。しかしこうすると皆に嫌われます。聯華の社長はＫＡＮのこのところを信頼してＫＡＮに委嘱したのですが、丁度妻が体調を崩しましたので、聯華の社長に頼んで後任の人に来て貰いました。此の後任者はお酒も、美味しい料理も、女の居るカラオケも大好きですから、皆とは円満に行っていると思いますが、ＫＡＮにして見ればどんな設備が出来るやら心配でなりません。

中国ではこの接待攻勢を三陪と言います。陪吃、陪喝、陪睡で飲ませて、食べさせ、抱かせるの意味です。抱かせる場所は二次会のカラオケです。カラオケに居る美女のなかから、意中の女性を連れて、一緒にカラオケで歌った後に、意気投合してホテルに行くと言うシステムです。

中国全土に広まったカラオケはもともと日本の発明が、世界中にカラオケの言語のままで広まったものですが、中国の場合女性がカラオケで働き、抱かれるのを待っているシステムになりました。

大連と上海

大連は中国一の整備された都市に生まれ変わりました。道路は広くなり、立体交差も多く

なり、住宅はヨーロッパ調の中低層のビルが並び、ビルと道路の間や両側には四季色々の花が植えられています。小崗子、寺子溝、南山路及びロシア街の古い建物も撤去されました。大連の主要道路、特にＫＡＮの母校、もと大連中学の付近には、アカシアの花をイメージした、一本に一〇八ヶの電灯の付いた街路灯が並んでいます。毎年五月初めのメーデーや十月のナショナルデーには一週間の休日があり、大連を初めとして全国のあらゆるホテルはどこも観光客で一杯で、主なホテルは外国人までが部屋をとるのが大変な状況です。

二～三年毎に上海に立ち寄りますが、上海の発展ぶりはまさに驚異的です。つい二～三年前までは古い方の空港、虹橋空港から市内への交通は万年渋滞でしたが、最近は幾本も高速道路が出来て居り、渋滞は解消しました。「架空公路」と名づけられ、全上海の高層ビルの間をシャトルの様に貫いています。上海は香港に負けない程のビルが出来つつあります。行く度に変わって行きます。特に新しい浦東空港は素晴らしい出来映えです。市内の中心まで、ドイツと合弁の磁気浮上のリニアカーが建設中で、完成したら一時間が二〇分になるそうです。

中国のその他の都市も同じような発展ぶりを示しています。ＫＡＮは今までに、中国のハルビン、長春、撫順、丹東、本渓湖、吉林、鞍山、営口、北京、天津、承徳、南京、武漢、西安、鄭州、洛陽、成都、南寧、桂林、広州、深圳、中山、昆明、貴陽、厦門等に行きましたが、一番印象に残るのはやっぱり自分の里の大連でした。

台湾の企業

ＫＡＮの好朋友、高雄の邱社長が国営の製鋼工場の買収を決めた時、日本人の鍛造、熱処理、溶解の退職専門家を三人捜してくれと頼まれました。早速先輩同窓に人材派遣をお願いしました。しばらくして先輩から、「誰も手を挙げない」と返事が来ました。説明に、先輩の良く知っている大手の特殊鋼会社二社で大阪支店長から全社的に声をかけて貰いましたら、誰も手を挙げて貰えず、一人だけ熱処理で手を挙げた人がいて、面接に出向こうとしていたら、直前に断って来たそうです。理由は「七十になって今更何で遠い暑い国に行って働くのだ。ちゃんと暮らせる国の年金と企業年金を貰っているのに、わざわざ寿命を縮じめることは無い」と家族に猛反対されたのだそうです。

先輩は「今回のことでよく判ったことが二つ、一つは完備した老後補償は折角長年蓄えた技術と経験の蓄積を、社会に役立たせないまま、墓の中に持って行く大きな無駄、もう一つは日本の世界に誇る産業技術は、現場で一工員から叩き上げた軍隊の下士官とも言うべき、職長が担って居り、今回の人材募集のように企業全体とその将来を頭に置いて現場の実務を指導する人材は居ない」と言うことでした。ＫＡＮは学校で習ってもいないサルベージの技術はアメリカ海軍の資料を一生懸命勉強して得たものですし、製粉の技術も世界各国の技術資料を取り寄せ勉強しましたし、特にスイスのビューラーの技術資料をもとに、幾つもの新工場を作って

来ましたが、日本の世界に冠たる技術は、頭だけの知識層と実践部隊に分業化されていることが判りました。発展途上国はこの両方を教えてくれる人を要望しています。頭だけの知識層の人に、もう一度現場に飛び込んで頂ける老人は居ないものかと思います。日本はこの百年間に蓄えた優れた技術を持った国です。是非世界の発展途上国の底あげに力を貸して欲しいと思います。ＫＡＮは色々の経験をしたお蔭で台湾やシンガポールの製粉業界で、一応名が通った製粉技術者となり、八十に近い今でも各方面からの招聘を頂いて居ります。

このとき思い出したのが、此の先輩からもらったエッセイでした。ＫＡＮにもなじみ深い旅順で、百年前の日露戦争の時、旅順港に欧州から回航されて来るロシアのバルチック艦隊の到着まで、ロシアの東洋艦隊は戦力を温存するために、旅順港深く逃げ込んでいました。旅順港口はＫＡＮも毎日眺めて暮らしましたが、大変せまいもので、日本艦隊はこの港口を、オンボロ商船を使って沈め、ロシア艦隊の出口を封鎖する作戦を考えたのだそうです。三回やって結局失敗したそうですが、ＫＡＮも毎日眺めていたのでよく判りますが、港口の一方は黄金台と呼ばれる五〇ｍ程の小山でロシアはここに沢山の砲台を築いてねらい撃ちにするのですから、思うところに商船を持って行くだけでも至難のことです。

先輩のエッセイは此の第二次封鎖隊に居た杉野兵曹長の話で、日本では船を沈めて退艦しようとした、艦長の広瀬中佐が部下の信頼する下士官、杉野兵曹長をさがして、見つからず戻ったところを、ロシアの砲弾に直撃されて、飛び散り、杉野も戦死と報道され、軍神として銅像

までになった人が、実は生きていて、葫蘆島（ころとう）の中国人漁師に助けられ、今回の日本敗戦まで生きていて、葫蘆島から引き上げる日本人の世話をしていたと言う話ですがＫＡＮはその話の中で、「海軍は長い経験を持つ下士官を大事にしていた。上級の士官より下士官の着る外套は数段上質の生地で出来て居り、何時も甲板で走り回る下士官が海に落ちても、軽く水を吸わない下士官の外套は戦争当時二月の寒い海でも寒さを守り浮きの役目をしていた」と言うことに大変興味を持ちました。現場の経験を積んだ職長は日本の宝だと思うのです。たとい学歴はなくても、邱社長は大工場を見事に経営しています。是非退職職長にも台湾に力を貸して欲しいと思います。

好朋友、新幹線博士

ＫＡＮは日本に行く度に新幹線を利用しますが、開業以来一度も事故のない此の新幹線の技術は素晴らしい物と思います。ＫＡＮが旅順工大当時、南満洲鉄道会社に居た旅順の先輩は当時世界一の速度を誇る特急アジア号を作りＫＡＮも何回も乗りました。窓が開かない全車冷暖房の素晴らしい列車でした。その伝統が新幹線に生かされたのだと思います。此の開発をした技術者の中にＫＡＮと中学校、大学も同期の日本人がいます。学生時代から仲良しでした。

彼は東京都立大学の電気科主任教授でしたが、新幹線の電気系統の開発を行い新幹線博士第一号と言われています。彼は中学校時代から数学が得意でよく勉強して居り、ある夏の夏休みが終わって、級友は皆真っ黒な顔をして登校して来たのに、彼だけ真っ白な顔をして居り、皆から散々ひやかされていました。彼が東京都立大学の教授時代、彼を訪ねましたら、彼の教え子の立派な女子学生をＫＡＮの東京観光の案内につけてくれました。二日間色々のところを案内して貰いましたが、ＫＡＮは本当に良い学生だと思いました。

その後数年経って、彼から連絡が入り「実はその子と結婚した」と言うのです。早速お祝いの手紙を書きました。その後お互いに忙しく時々手紙のやりとりで日が経った数年後、突然彼から「結婚生活が旨く行かないので、離縁の間際まで来ている」と連絡がありました。ＫＡＮは直ぐピンと来ました。ＫＡＮが尊敬するドイツ語の南順三先生と同じケースだと思いました。南先生は素晴らしい語学の天才でしたが、勧められて良い御家庭の令嬢をもらって結婚後二年足らずで離婚されました。南先生は奥さんをほったらかして勉強に打ち込み家庭が崩壊したのです。此の同期生も素晴らしい頭の持ち主です。此れは仕事に打ち込み綺麗な奥さんをほったらかしたなと思い、早速便箋八枚位の長い長い手紙を書き、南先生の話を書いて「とにかくもっと奥さんを大事にしなさい」と厳しく叱りました。身ごもった妻子を捨て、生まれ育った大連を捨てたＫＡＮは幸いに台湾で良い妻に出会い、ＫＡＮが存分に仕事が出来るのは此の妻のお陰です。良き伴侶は人生最高のものと思います。この考えを繰り返し同期生に伝えました。

しばらくしてから同期生から「お陰様で貴兄の言われた通りに仲よくなりました」と手紙が来ました。彼らはその後三人の子供も出来て、奥さんは今でもＫＡＮは二人の大恩人として尊敬して頂いて居ります。

同窓会の総会の折り彼に誘われて、彼の奥さんの運転で、彼の住居の近くの山の中にある、全て離れ作りの立派な料亭に案内されました。そこで素晴らしい和風の御馳走を頂き彼の自宅に行き、泊めて頂いて、翌朝お家をくまなく案内されました。広い敷地に三階建の外観、内装ともに素晴らしい建物です。聞けば奥さんは高校の先生をして居られるそうですが、建築に造形が深く、最初に買った古い二階建の家を壊して、奥さんの設計通りに二度やり直して出来た家だそうです。裏の庭は野菜畑になって居り、各種の野菜から梅干しまで自家製の有機栽培の食品で三度の食卓を賄い、果樹も植えて居り、近所のスーパーには滅多に行かないとのこと。誠に美味しい野菜で、ＫＡＮは東京の近郊でもこんな生活が出来るのかとただただ驚くばかりでした。

日本でも少し事業がうまく行き出すと、直ぐおめかけさんを作る人がいます。子供のことも考えずに直ぐ離婚します。やはりＫＡＮが考える様に、小さい時から「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ」とたたき込むべきと思います。五ヶ条の御誓文と言い、日本を世界に開いた明治天皇は偉い人だと思います。開国以来文明開花にひた走った日本は、富国強兵で大戦に突入廃墟と化しましたが、戦後交通網復活を第一に唱え、ＫＡＮが見ても世界で

最も交通の便利な国になりました。

文化大革命で二度も失脚しながら、不死鳥の如くよみがえり、中国の世界への門戸を開いた鄧小平も明治天皇と同じく尊敬しています。鄧小平は日本が歩んだ様に、交通網の整備に全力を挙げています。ＫＡＮは中国は前途の発展に満ちた、自信を持って進む国だと思っています。ＫＡＮは共産党に追われて国を捨てました。共産党はその後色々の経験をした後、鄧小平の改革開放で大きく変わりました。今はＫＡＮは共産党に何の恨みも持ちません。シンガポール国民になった今でも、中国はＫＡＮには大事な祖国です。

もう一つの祖国、台湾はＫＡＮを救い上げて育ててくれた国です。ＫＡＮは同じ民族の十二億の中国と二、二〇〇万人の台湾がお互いに納得出来る大中国に発展する日の来るのを祈って居ります。

ＫＡＮが尊敬する聯華の社長も素晴らしい実業家です。ＫＡＮが命がけで働けたのも彼の絶大なＫＡＮへの信頼です。「士は己を知る人の為に死す」と言う言葉がありますが、ＫＡＮはこの心境です。

ＫＡＮはこの聯華の社長の委嘱で色々の仕事に取り組みました。

台北、基隆、高雄、台中ほか台湾の各地は言うに及ばず、タイのバンコク、シンガポール、中国に及びます。作った工場は製粉工場、飴、ピザクラスト、パスタ、インスタント粥等の各種の食品工場、各種のガス工場、織機のワイヤヘルド、おさ、金網、ナイロン網、ＰＶＣコー

ティングの網、亀甲網、シャベル、スコップ、ハンマー製造の鍛圧工場、鍛造工場と誠に色々の工場を作って来ました。設備はドイツ、アメリア、スイス、英国、日本と世界最高級の殆ど全自動の設備を導入しました。ＫＡＮはここまでやらせて貰えると、今は何でも来い、全部一から勉強でも良い、何でも作れるとの信念を持つ様になりました。「成せばなる、成さねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」と言う言葉の通りと思います。

聯華は工業ガス、酸素、アセチレン、窒素、アルゴン、水素、混合ガス、医療用ガス、等の事業に取り組み出しました。台北、高雄を始め台湾の各地に工業ガス工場を次々と作って行き、聯華の社長は「台湾の気体大王」と呼ばれる様になりました。台湾の工業発展と共に、工業の米である工業ガスの需要の増大を見越した聯華の社長の先見性と実行力にはＫＡＮは心から敬服しています。聯華社長もＫＡＮに十分の待遇で応じてくれました。聯華はその外石油化学、電子、コンピューター、製紙の何れも台湾屈指の大工場を建設しています。こうしてシンガポールにも進出した聯華はＡＩＧ＝ASIA INDUSTRIAL GASES を作り、三年間でアセチレン、酸素、水素製造工場を建設稼働させました。

ＫＡＮはその建設で妻と一緒に息子二人も連れてシンガポールに滞在している間に、台湾でＫＡＮを苦しめた喘息が出なくなったのです。妻が結婚決断の時「喘息は病気でない、没関係（メイクアンシ）＝気にしない」と言ったのはその通りでした。台湾はシンガポールから一衣帯水のところです。国は違い今までビザが必要でしたが、今はビザ無しで往来出来ます。中国のビザは一週間か

り、急ぐとかなり高額の申請料金をとります。シンガポール政府はＫＡＮのシンガポール産業への貢献を認め、直ぐに永住権、十年後に公民権が取れました。普通公民権は申告から十ヶ月以上掛かりますが、ＫＡＮには三ヶ月で認めてくれました。現在シンガポールのパスポートは欧州各国やＡＳＥＡＮ十ヶ国はノービザですが、中国、北朝鮮、ロシア、東欧諸国へはビザが必要です。

シンガポール

シンガポールは人口四〇〇万人、七三％は中国人ですが、不世出とも言えるリークワンユー（李光耀）が首相に就任後、次々と良い施策を実施、物価は安定、街は世界に誇れるほど綺麗に清潔になりました。ＫＡＮの喘息を治癒出来たのも此の清潔な空気です。リーはシンガポール生まれで父親は中国南部から渡って来た人です。シンガポールの国父と言っても良い人です。今は次の呉作棟に首相の座を譲っていますが、シンガポール資政上級相として、海外の国際会議では常に卓越した意見を述べています。

シンガポールは英国が早くに植民地として開き、東洋の真珠と言われ、インドネシア、タイ、他華僑が経済を握る国々の扇の要の位置で、発展しています。一時期日本が占領しました

が、日本の敗戦で、此れを契機に東南アジア各国は今までの、英国、フランス、オランダの支配から独立、シンガポールも英国から独立し、最初は大マレーシアに統一されましたが、その後シンガポール共和国として独立しました。先日の東京での国際経済会議でマレーシアのマハティール首相がＡＳＥＡＮ共同通貨を提唱していました。ヨーロッパのＥＵのユーロと同じ構想ですが、実現にはまだ時間が掛かりそうです。

シンガポール政府はリークアンユーが発展の基礎を作って以来、どんどんその様相を替えて来ています。政府関係の公務員の給与は一般の民間会社のレベルより高く、従って公務員は中途退職したり、汚職に走るものが居りません。その上貧汚調査局が目を光らせて居りますから、うっかり軌道を外れる事も出来ません。

ＫＡＮが工業ガス工場を建設するときに、適当な場所を選び、その建設許可を貰う為にＥＤＢ（経済開発局）を訪ねましたが、当時担当に英国留学から帰ったばかりの謝さんと言う背の高い美人がいました。彼女とは次第に親しくなり、聯華の社長の指示で、日本に出張した際に買い求めた、簡単なカメラをお土産に上げました。彼女は丁寧にお礼を言って受取りましたが、半年後に訪ね、彼女にあのカメラは使いやすいですかと尋ねますと、彼女は「大変良く写るカメラです。頂いてから直ぐ上司に説明をつけて呈上しましたら、上司は彼女に預けるから、事務所の皆で誰でも使える様にして下さいと言われ、私が保管して皆で重宝して使わせて頂いて居ります」との返事でした。それを聞いてあらためてシンガポール政庁の厳しい清潔

さが理解出来ました。その後航路標識の会社からも日本からちょっとしたお土産を担当部署の長に渡しますと、丁重にお礼を言って、あとで行くと彼の事務室に飾ってありました。ですからシンガポールの役所に行くときは、お土産は一切不要です。

シンガポール政府は能率向上にも一生懸命です。パスポートの新規申請や期限切れの再発行を申請する場合、用紙に記入して移民庁に郵送すれば一週間で発行され、受取は本人が移民庁に出向き、本人が受取に署名して受け取ります。一般の延期申請は移民庁の窓口に出せば一時間で出来ます。

シンガポール政府は世界中の国から英才、人材を集めるのに一生懸命です。良い待遇で学者、教授、専門家、権威者を招聘して居ります。一方では建築現場作業者が不足している為に、マレーシア、タイ、印度、スリランカ、及び中国から呼んで居ります。毎日出勤日にはジョホール橋は、マレーシアのジョホール州から通勤する、技術者、技術工の乗った車やオートバイで一杯です。シンガポールの賃金はジョホールより遥かに高いのです。たまたま日本からの来客を案内してセントーサ島を案内した折り、北海岸にビニール袋、空き缶、木材、板などが漂っているのを見て、直ぐ環境局に連絡しました。新聞記者もそれを知り新聞の記事になりました。環境局は直ぐＫＡＮにゴミ集めの船を出して清掃しますと連絡して来ました。次にモノレールに乗った時は綺麗な海岸になって居りました。

ＫＡＮは永住権を得た段階で今の住所に半官半民のＨＵＤＣが建てた一四〇平方ｍの部屋

を求めました。各階には四家族が入りエレベーターが二台あり、購入してからもう二十年以上になりますが、次男はそれを売って別の住居を買う様にすすめましたが、ＫＡＮはここが気に入っています。二十五階建の十七階で、年間気温二十四～三十三度のシンガポールでも夏でも冷房が要りません。もっと上の階が欲しかったのですが、当時永住権だけだったＫＡＮは此の階が購入出来る最上階でした。回りにはビルが十ヶほど建って居りますが、ビル同志の間隔が広く、緑の多いコンドミアムで、五〇ｍのスイミングプール、テニスコート、機械体操室、ピンポン、レストラン、バレーコート、子供の勉強部屋、子供の屋外遊戯場、バーベーキューの場所、それにスーパーもあり、シンガポールでも珍しい良い環境のところです。

ベッドルームが三ッありますが、長男、次男がカナダ、アメリカの留学から持ち帰った膨大な本や論文、資料で殆ど一部屋を占領し、それぞれシンガポールに自分の住宅を持ちながら一向に持って行きません。次男の家は車で十分くらいのところで、女の孫が六才を頭に四人居り、次男の嫁もＨＳＢＣ銀行に勤めて居り、その為にインドネシア人のメイドとフイリピン人のメイドが二人いますが、ＫＡＮも妻も孫が可愛くしょっちゅう次男の家に行って居ります。同窓生は皆大きな孫がいますが。三十七才で再婚したＫＡＮの身近に居る孫は皆小さく可愛い盛りです。ＫＡＮは別に買った家があり、ずっと日本人に借りて貰っていましたが、最近マンションの各部屋のオーナーが同意、ＥＮＢＬＯＫで入札の上売却しましたら、買値の五倍に売れました。

ライトブイ会社

シンガポールではしょっちゅう台湾に行き仕事をするほかに、昔から懇意にしていた大阪のアルミ会社の社長に是非にと依頼され、その会社の子会社が作っている、灯台設備及び港湾用の浮き灯台（航路標識）を販売する会社の支店長を十年やりました。ガス会社の方がなかなか離してくれないのでそこの技術顧問と兼任で、毎日半日の出社で良いからとの依頼で、マネージャーをやる訳ですが、次第に業績を伸ばし、支店に昇格して最後は日本人スタッフ三人、秘書一人、運転手一人の所帯になりました。

シンガポールでは毎年港湾用のブイが数十台の入札があり、ある一定以上はシンガポール製品の使用が義務付けられていましたので、良い下請けを捜し、港湾当局者のところにも頻繁に顔を出し、信用されて、親しくなり、情報を得て落札に成功、業績を伸ばしました。主な精密部品は大阪から供給して貰いますが、その会社に勤務していた大学同期の同窓生蒲原さんと一緒に、支店のカバー範囲の東南アジアの港を回り売り込みに回り、毎年四回大阪の本社の営業会議に出席し、その外技術会議やお客様を案内して年に六～七回は大阪に参りました。一度は支店売上げトップの成績を収め社長から大変感謝され記念品まで頂きました。しかし社長が体調を崩され、娘婿が社長になられましたが、ＫＡＮとは心が通わず、前社長が亡くなられ大阪での葬儀に出席、ＫＡＮも同時に同社の規則で停年となり、葬儀後新社長からシンガポール

支店の技術顧問を依頼されましたが、ＫＡＮは「忠臣二君にまみえず」ですと断り一切手を引かせて貰いました。その支店はその後業務を縮小、出張事務所に戻りました。亡くなったもと社長は大変度量の広い方で、最初はＫＡＮに三ヶ月間、大阪の工場で勉強をさせて貰い、ブイの灯器の構造、修理のトレーニングと極秘のところまで外国人のＫＡＮに公開してくれました。今もその恩義に感謝して居ります。

ライトブイ会社のシンガポール支社長をしている間に、水深数十メートルの大型スーパーブイをシンガポールの港湾局（ＰＳＡ）に数基、マラッカ海峡協会に十基ほど、オーストラリア西北部の鉄砿石積出し港に八基ほど納めました。そのためオーストラリアのパースから乗り継ぎで、ＫＡＮは何回も現地に出向きました。

又マレーシアのポートデクソンの山の上に大型灯台を建設し、ヘリコプターで灯台を吊り上げて据えつけました。

最初の烟台行き

シンガポールで当時唯一つの製粉会社、プリマグループからＫＡＮの台湾に於ける製粉工場立ち上げの実績を買われ、中国山東省、青島と烟台に製粉工場の投資をするので協力を依頼

され、そこの社長とは古い友人でしたので、中国は当時充分に改革解放が進んで居らず色々やりにくいことが多かったのですが、ライトブイ会社を辞めて、それを引き受けてシンガポール～青島～烟台を行き来しました。建築の監督及び工場建設の計画を立て、一日二五〇トンの小麦処理量を持つ、スイスのビューラー社の製粉プラントを発注、機械が入荷してスイス人技術者が来華するころに妻を連れて先ず烟台に行きました。解放したばかりの中国はまだ色々厳しく、毎日スイス人の技術者三人、シンガポールと香港から同行した人たちと一緒に、小型バスで現場とホテルを往復しましたが、当時の烟台は街も薄汚れて、バスの中と雖も「壁に耳あり」の時代で、皆うっかり政府の批判など言えず皆黙りこくっていました。時々冗談を言う位でした。

何時も送り迎えする運転手は勤務後の会議に毎日出席しないとならぬのだと言っていました。うっかり政府批判をして誰からか密告され、逮捕された等の話を聞きました。すべて重苦しい空気でした、その後鄧小平が香港近くの深圳開発区を視察、例の「白い鼠は良い鼠」の発言以来、改革解放は急速に進み、最近台湾の聯華の投資で同じ製粉工場の立ち上げに烟台に行った折は、ビルも一杯立ち並び、その変貌に目を見張りました。確かに中国は変わって来たと感じました。同時に先の頃は全く意識しなかった汚職にも目を見張ったものです。

「壁に耳あり」ですが、聞くところによれば、中国に残った中国人旅順工大同窓は日本の大学を出たと言う理由だけで、長い間親の墓参りも出来ず、お墓自体が無くなっている人も多く、

例の「蠅退治、鼠取り、雀取り」の時代は同時に大字報（ターツーパオ）時代で、各工場の責任者をしていた同窓生は、部下の者に壁に大きく五年も十年も前の出来事を書き出され、つるし上げに合い、速やかに反省文を出さないと又つるし上げられると言う目に合い、うっかり不満をこぼすと、直ぐ密告され、最後は自分の子供も妻も信頼出来なくなったと述懐していました。

初めての訪中

鄧小平が経済開放して間もなくの頃の出来事です。烟台へ行くのには青島経由で行きますが、シンガポールから青島は直行便がありませんから、上海から乗り継ぎで行きますが、上海で降りて青島行きを待っていましたが、全然搭乗放送がありません。中国航空に聞いても青島の天候不良で、何時出るか判らないの一点張りです。日本人が四～五人とヨーロッパ人を入れて合計十人位いましたが、皆言葉は出来ず困り果てています。

そこへアメリカ籍の中国人でハワイから来た華僑の婦人が窓口で怒鳴り出しました。「責任者を呼べ」と言いますと、若いのが出て来ました。その男にまくし立てる婦人に「此処は中国、アメリカではありません」と言うと、そのまま引っ込んでしまいました。まさに取りつく島もありません。そのうち日が暮れて来て、ホテルを取ろうにも、往来の多い当時の中国はホテル

不足で外国人が泊まれるホテルは簡単には部屋が空いていません。

ＫＡＮを含めて窓口の隅でただ立っていましたら、流石（さすが）に気が引けたのか、係の或る男が「特に手配して、飛行場近所の新しいホテルに案内する、但し宿泊費は各自で払って下さい」と行ってバスでそのホテル「桜花渡仮村」と言うのに連れて行きました。なんと開店前の未完成のホテルです。部屋に入って見ると一杯の蚊です。勿論蚊帳もなくこれでは寝る事も出来ません。バスの係の男はスプレーをあちらこちらに吹きかけ「明日朝六時にホテルのフロントの前に集合して下さい」と言って帰って行きました。

とにかくベッドで寝るだけは寝て、朝ホテルロビーに全員揃いました。いくら待ってもバスは来ません。七時になってやっとバスが来ました。此のバスは昨日と違うバスで領導から迎えに行けと言われて来たのだと言います。七時半空港に到着すると、空港係はかんかんに怒っています。「貴方達外国人は全く時間を守らない、此の飛行機は七時出発なのに、七時半になってやって来る」と言います。朝食も食べていない外国人は「バスが来たのが七時だ」と言うと流石に係は黙り込みました。

昨日の係の言う様にまさに此処は中国だったのです。例のハワイの中国系アメリカ婦人はその日はあきらめたのか終止無言でした。此れは解放直後のことで最近は各空港とも随分よくなり、上海空港は他の空港に先駆けて構内放送に日本語が入る様になりました。最近完成したハルビン空港、上海の浦東空港、と厦門空港は中国の進歩のシンボルと言われる位立派な空港

になりました。改革開放を指導した地下の鄧小平は遅いと思っているでしょうか、早く出来たと思っているでしょうか。

工場建設の時の第一回の烟台には家内同伴で行きました。青島から烟台までは小型バスで当時は七時間かかりました。今では一級公路が出来て三時間位で行けるようになりました。烟台で唯一つ外国人を泊める海に面した芝罘賓館に泊まりました。解放後間もなくの頃で、ホテルの車を使う他はタクシーもありません。ホテルのフロントで頼み、日曜日に本屋と当時烟台にただ一軒の百貨大楼に案内を頼みましたら、ホテルの車に御丁寧に部屋係の劉さんと言う女の子が付いてくれました。本屋に行きましたが、家内は皆一度読んだことのあるものばかりだと言います。百貨店に行きましたら、運転手は十二時までにホテルに戻らないといけないので、早く買い物をして、十一時半までに駐車場に戻ってくれと言います。

翌日再びホテルの車を頼みましたら、部屋係は劉さんでなく別な女の子です。劉さんは食堂の入口に立って「いらっしゃいませ」と言う係に替わっていました。家内は私たちに半日付き合った為ではないかと随分気をもみました。我々の一挙手一投足はすべて夜の会議で報告されていたことでしょうし聯華の社長に頼まれた溶接工を烟台の工場に入れて貰う為に、台湾聯華社長の兄に当たる人が烟台に居られ、その人の子供を工場に入れる為の話に、日曜日に工場に頼んで車を出して貰って訪ねましたが、外国人は中国人個人の家には入れませんと言います。やむなく運転手と一緒に入り、運転手も一緒に聯華社長の兄さんと話をしました。当然全ての

話は運転手から夜の会議で報告されたものと思います。こうした思いは開放直後に訪中された日本人も皆経験されたことと思います。中国人で外国人のＫＡＮも同じ扱いを受けたわけです。

併し最近では陸海空の交通網も急速に整備され、赤字続きの国営企業も逐次黒字に変わりつつあります。設備の急速な発展は時に従業員のマナーやマネージメントが追いつかず色々の欠点が出て来ました。シンガポールと青島及び烟台を往復した時ですが、ＫＡＮがある航空機のファーストに乗りましたら、航空会社の制服を着た男が後部座席に座って居り、お茶をすすりながら新聞を読んでいましたが、前の席のＫＡＮの側まで足を突き出して来ます。凡そ世界の他の航空機で非番の従業員がこのような態度をとることはありません。中国の航空会社では皆同じです。早くマネージメントを改善をしないと、二〇〇八年のオリンピックで大恥をかくことになると心配して居ります。

旅順

旅順工大卒業生は日本人、中国人を問わず、こよなく旅順を愛しています。普通の郷土愛とは一味違う愛着です。ＫＡＮが学生時代の旅順は桜の時期は学校や寄宿舎のある新市街は正に桜の園になります。果物も豊富で、当時の空は秋などは青々と何処までも澄み切って、ア式

蹴球（サッカー）をやっていたＫＡＮは放課後の運動で、蹴ったボールが青空にどこまでも、どこまでも吸い込まれて行く様に感じました。戦後は大連も含めて空気がよごれ昔の様な青空が眺められません。一時期同じくどんより曇った日が多かった日本が最近青空を取り返している様に是非環境保全に取り組んで欲しいと思います。今の市長も環境保全には一生懸命取り組んでいるようです。

ＫＡＮが知っている範囲ですが、市長が先ず石炭を焚くのを石油に切り替え、而も煙突のある工場は全部市外の遠いところに移転させ、空気汚染をどんどん改善して行っています。

旅順は日本人を含む外国人には（と言っても欧米人は殆ど来ませんから、結局日本人だけとなりますが）大分開放されたと言っても、特定のところだけです。何とか経済を発展させたい大連市旅順口区の対外経済貿易委員会などは、旅順港の西の方に新たに港を作り経済開発区を設け、何れ渤海湾を渡って、旅順――烟台間に一〇〇Ｋｍの橋を掛ける計画があると宣伝、外資の投資を呼びかけています。

ＫＡＮも旅順工大先輩に頼まれて、旅順市内にあるＷ（タングステン）カーバイトの製品を作っている工場を約二億円かけて近代的に改善するのに、シンガポール資本を出して貰って欲しいと要望され、ＫＡＮと一緒にシンガポールの国籍をとり、実業家として成功している譚さんに話をして見ましたら、二億円は全く問題無い、問題は投資効果があるかどうかだと言う事になり、シンガポールから上海経由大連に回り、先輩と落ち合い、昔のヤマトホテル（大連

賓館）に泊まり旅順の工場を見に行きました。二万坪はある広い敷地に一応の設備はあり、鉱山掘削用のビットを作っていました。

中国はタングステンの産出は世界の七〇％を占める程豊富ですが、原料の精製過程が古く品質が劣ります。一緒に工場を回りましたが、何もしないでぶらぶらしている工員が一杯います。工場長の出して来た案では今の五〇〇人の十分の一の五〇人で今の生産の二倍は上げる。売り先には自信があるとの説明です。そして合弁工場は今の工場の一部を仕切ってやると言います。新工場は今の賃金の二倍出すとの計画です。今のぶらぶら組はどうするのだと聞きますと、国営工場なので彼らを首切り出来ない、彼らには別の仕事を与えて今まで通り月五〇〇元を支払うと言います。それでは当然高賃金組と問題が起こるではないかと聞きますと、「没関係（メイクワンシー）＝心配御無用、彼らはやいのやいのとノルマを掛けられて働き、高い賃金を貰うより月五〇〇元でのんびりやる方が良いのだ」との説明。工場のバランスシートを見せてくれと言いますと、大連の上部の会社が持っているので、明日お渡しするとの返事でした。どうも外資で来る外国人の経営者にのんびり工員を鍛え直して欲しいようです。長年やあやあとやって来た相手に今急に厳しいことは言えないのが本音のようです。引き上げてヤマトホテルご自慢の海鮮料理を譚さんに御馳走になりながら、譚さんの考えでは、此処に派遣する社長になる人材が人が少ないシンガポールに居ないと言うことでした。今中国全土の国営大型企業も同じ問題を抱えて居り、先輩とこれは難しい、所謂利益の出る投資にするには、先ず人事管理が大問題

と言う結論になりました。

シンガポールの実業家も台湾の実業家も需要の増大すると予測される物に世界最新の技術と設備で短期に立ち上げ利益を出し、良い所で株を上場、利益を取って工場を拡張するか或いは新しい投資に回すやりかたで、今日本の銀行やゼネコン、商社の様に不動産のばくち（スペキュレーション）で儲けるやり方は取らない様です。アメリカのヘッジファンドにくっついて年四〇％の利ざやを稼ぐのとは違う考えです。韓国は日本の巨大産業の真似をして、巨大投資をして、造船、電機、自動車と走りましたが、今行き詰まりＩＭＦに援助して貰っていますが、ＫＡＮが接して来たシンガポール、台湾で成功している実業家は銀行資金を当てにしませんし、皆自己資金をもとに計画を立てている様に思います。

一般中国人は毛沢東は革命成立の一九四九年までは偉大な人だと言います。皆に慕われた周恩来も改革解放の旗を振って皆に感謝された鄧小平も遺骨は愛する中国の空から撒かれたり、大きなお墓もなく、毛沢東だけ遺体が保存され、毎日地方から出て来る人が天安門広場で行列を作って見ています。一九四九年まで殆ど食うや食わずの沢山の人に、最低月六〇元を保証し、乞食が一人も居なくした、毛沢東は今でも貧困家庭の多い西の方の奥地の人達には神様に近い存在です。毛沢東は生涯海外に出たのはソ連に一度だけ、それも飛行機の嫌いな毛沢東は汽車で行きましたが、今の最高指導者、江沢民はしょっちゅう海外に出かけています。明治天皇が維新後言われた「広く知識を世界に求め」で他国の空気を吸うことは、大きな勘違いを

しない為にも、中国の将来の為に大変良いことと思います。ただ一般民衆は自由に海外に出掛けられません。唯でさえ人口が多い返還後の香港が厳しく入国を制限して居りながら、密航者でどんどん人口が増えて行くのを見ていると、十二億以上の人口の中国人が世界に溢れ出したら確かに大変です。

中国では一週間足らずの裁判で凶悪犯は死刑宣告、数日中に処刑され、聞くところによれば毎年五〇〇〇人が処刑されていますが、日本では状況証拠で大量殺人が確認されているのに、オウム真理教の主犯が延々と裁判をしているのを見て、一般中国人は全く理解出来ません。やはり所変わればでしょう。

ＫＡＮの五人兄弟も今は二人、次男と三男のＫＡＮだけが残っています。たった一人の女の妹は二年程入院、ＫＡＮは全ての医療費を負担しましたが、九九年四月に亡くなり、四男も九九年七月に突然、脳溢血で他界しました。今の妻は深く仏教に帰依していますので、シンガポールの仏堂で、二人の神位を作り、お経をあげて、超度する行事を行いました。

母の棺桶

中国では最近は死んだら火葬する様になりましたが、ＫＡＮの母親が亡くなった頃は土葬

でした。中国人は中以上の家庭では生前に自分の棺桶を作ります。中国人の親への最高の親孝行は、親が生きている間に、親が安心をする様に、立派な棺桶を作ることなのです。ＫＡＮの母親も改革解放で台湾のＫＡＮと連絡が取れる様になった時に、天津の従兄弟から香港経由手紙が来て、是非最高の棺桶を作って欲しいと言って来ました。ＫＡＮは早速十分のお金を同じルートで送りましたが、あとで大連に行って聞いて見ると、どこでどうなったか、お金は届いて居らず、大連の兄弟は皆お金が無く、葬式に来てくれた、天津の母の実家の妹、即ち天津の従兄弟の母が来て、これは従兄弟からのお金ですと渡されたお金を皆は感謝、感激、普通の板を買ってお棺を作ったと言うのです。その頃の親は自分の納得する立派な棺桶を生前に作り、廊下や庭などの隅に置いていたものでした。又死んだ時に着せる刺繍の入った綺麗な服も作って置いておくところもありました。ＫＡＮが折角送った十分なお金はどこかに消えてしまっていたわけです。

ＫＡＮが同じルートで母に何回も何回も送った相当な金額のお金が全く母の手元に届いて居らず、全部途中で消えています。もし母が受け取っていたら、生存当時もっと良い生活が出来たに違いありません。ＫＡＮはなんと不孝な子になったのでしょうか。何時もこのことを思うと悔やしくてなりません。

先にお話した高雄の邱社長は家庭を大事にしています。ゴルフも余程の付き合いで無い限りやりません。土日は全家族とメイドを連れて高雄市外又は南方の別荘地の別荘に奥さんの

母の日本人の方も、子供も家族一緒に一泊か二泊で出掛け、仕事とは一切縁切りで、家族との団欒を楽しみます。プールで泳いだり、バーベキューを楽しんだりで、メイドを連れて行くのは、奥さんの負担を無くす為で、メイドはフイリピン人です。日本人の休暇の様に沢山のお金は使いません。親類、友人との会合も大抵、各家庭で御馳走を作って談笑を楽しみます。先にもお話した様に、万一に備えてお金を蓄えています。日本人は子供に余りに高額なものを買い与えている様に思います。此れは子供の将来の為にも余り良く無いのではと思います。しかし将来に備えて教育には力を入れ、語学習得を含めて海外の学校に留学させています。留学先はアメリカとオーストラリアが最も多いようです。オーストラリアは台湾人にもシンガポール人にも最も人気があります。特にオーストラリアのパースはシンガポールから四時間ですし、人も少なく美しい街で特に人気があります。中には五、〇〇〇万円を払って移住してしまう人もいます。

シンガポールはＫＡＮにとっても第三の祖国ですが、やはり泥棒はいます。ＫＡＮがライトブイの会社のマネージャーをしていたとき、会社の運転手が会社と自宅の往復にバスを使っていましたので、新しいイタリア製のＶＥＳＰＡのスクーターを買ってやりましたら、数日もしない間に家の近所のオートバイパーキングに置いていたら奪られたと言います。それで今度は中古のＶＥＳＰＡを買ってやりましたら、やはり数日で奪られました。とうとう諦めて古いオートバイを買ってやりましたら今度は盗まれずに通勤出来る様になりました。最近日本でＪ

Rのプラットフォームや観光地で分別してごみを捨てるボックスが置いてあり、ＫＡＮは感心して写真に撮り、帰国後シンガポール政庁の衛生部に手紙を出しましたら、直ぐ返事が来て、「残念ながらシンガポールの国民の社会教育は日本ほど訓練されていないので、一度テストしたが、今の所分別の箱を置いても分別して入れてくれない」との返事でした。

シンガポールには作業員として、印度、マレーシア、インドネシア、中国等から大勢入って来ていますので、社会秩序の維持が難しいのだと思います。シンガポールは一九六五年マレーシア連邦から分離独立したのですが、今もマレーシアはシンガポールに追いつけ追い越せで色々シンガポールの真似をしています。シンガポール内ではマレー人も沢山いますが、今は実力本位で給料が決まり、中国人と差別は無く、マレー人の大臣もいますが、一般の給与水準はマレーシアよりシンガポールが上で、それ故にシンガポールの企業はジョホールかそこを越えてマレーシアに工場を作り少しでも安い賃金の人を使おうとしています。そんな状態ですからやきもちもあってマレーシアとシンガポールとは決して仲は良くありません。丁度日本と韓国の関係に似ています。然しＡＳＥＡＮで次に発展して来るのはマレーシアだと思います。

文化大革命で自殺した旅順工大同窓生

一九六六年に始まった正確にはプロレタリア文化大革命は日本人には文化の文字が災いして、意味不明瞭な革命ですが、一九七七年終了しましたが、毛沢東が林彪（りんぴょう）を使って学生を指導、紅衛兵を組織し、当時国家首席であった劉少奇やその一派を「資本主義の道を歩く実権派」として、共産党本来のプロレタリア革命に戻すと言う旗印で所謂知識層の追い落としを計った政権闘争で、かっての同士を次々と失脚させ、遂には林彪も追い落とし、ソ連に脱出しようとしましたが、外蒙古上空で墜落してしまいました。鄧小平はこの間二度失脚しながら一九七七年復活、一九八三年国家中央軍事委員会主席となり、軍を掌握、改革開放の大号令を掛けて中国の鎖国を打ち破ったのですが、此の政府最高幹部の権力闘争の間に、各工場や組織で猛烈な知識階層への追い落としが、紅衛兵によって行われ、毛沢東思想に完全に洗脳された学生、紅衛兵は紅いネクタイに片手に毛語録をかかげ、当時で紅衛兵は二十元あれば三ヶ月旅行して行けたと言う状態で、中国中を暴れまくりました。

旅順工大の中国人同窓は他の日本人大学の卒業生と一緒に格好の標的にされ過去の事を根堀り葉掘り問い正され、公衆の前に三角帽子を被らされ、引きずり出されて頭を押さえて反省を強要されて、メンツを重んじる人々に最大の恥辱を与えました。（編著者注記：ＫＡＮの大

先輩で大連臨時中学に来て演説された張先輩も一時期失脚されました。）

ＫＡＮの親兄弟も同じ目に会いました。

一九七六年は色々の事件が重なりました。四月五日に北京の天安門広場にある人民英雄記念碑に民衆が周恩来総理の死を悼んで献花しようとしたのを、警備の警官に止められたのを切っ掛けに、民衆騒動となり、此れはあとで革命的行動と評価されましたが、七月に北京東方の工業地区唐山でマグニチュード七・九の大地震が発生、二〇万人以上が死亡、此れを苦にしたと言われますが毛沢東が七六年末に死亡、遂に翌七七年、十年余に及んだ文化大革命は終わりましたが、此の間に五名の旅順工大同窓生が自殺してしまいました。

此の五人の同窓生は氏名も判って居りますが、共産党は「自殺は共産党への反逆だ」と言う考えですので、遺族の方も多くを語られません。

ＫＡＮは幸いに早くに脱出して今はシンガポール華僑として、自由に祖国中国に出入り出来て、祖先の墓参りに毎年の様に大連を訪ねて居ります。当時中国に残って色々の苦難に会った同窓生は一〇〇名以上と思いますが、今中国で生存している同窓生は六〇余名、先年三〇余名が旅順に集まって、昔良くカンパをした、新市街の今は無い泰豊楼隣りの、かっての学生寮、清明学舎が今は旅館になって居り、そこで泊まり今は海軍病院になった、大学本館跡や大学向かいのストーム思い出の今は陸軍兵営となった興亜寮を訪ねました。五〇年の歴史の変遷は誠に目まぐるしいもので、集まった同窓生の感慨は誠に深いものでした。そこでＫＡＮを丹東脱

出の時助けてくれた、譚天先輩（昭十五）と五十余年振りに再会、二人は抱き合って泣きました。その後訪中の際には機会を作って譚天先輩を撫順（ぶじゅん）に訪ねて居り、今も文通を欠かしません。

ＫＡＮの脱出は多くの、同窓生、教え子、親戚の助けで出来たものです。今思い出しても本当に幸運に色々の人に出会い、助けて貰えました。此の人達との交流がＫＡＮを助けてくれたのです。今もＫＡＮがかっての同窓生や教え子との交流を大事にするのも、このときの援助への感謝の思いからなのです。何時までも此の縁を大事にしたいと思います。

支那

よく日本人がアメリカで侮辱を感じる言葉は「ジャップ」と呼ばれることです。同様に中国人は支那人と呼ばれると猛烈に頭に来ます。先ほど東京都知事になられた、もと衆議院議員の石原慎太郎知事が新聞などの記事に出て来る発言に「支那」と言う言葉があります。支那は英語のＣＨＩＮＡから出た言葉ですが、英語圏の人がＣＨＩＮＡと呼ぶのと違い日本人が「支那人」と呼ぶと、中国人は非常に侮蔑を感じます。石原慎太郎東京都知事は正に認識不足と思います。

小学校時代に同級生に朝鮮人で崔（さい）と言う小さくて痩せた男がいましたが、ある日ＫＡＮに

「チャンコロ」と言ったので、ＫＡＮは我慢出来なくなり、思い切って崔を殴り飛ばしました。それ以後崔はＫＡＮを見ると遠くに逃げて行きました。

一度シンガポールの中華料理店で隣席の日本人のグループが盛んに「支那人」と言って居り、ＫＡＮはとうとう辛抱しきれずに。立ち上がりその日本人に「支那人とは何事ですか、ちゃんと中国人と呼んで下さい」と怒鳴りつけました。本人は黙り込み謝って来ました。

戦時中のはやった歌に「支那の夜」と言う歌詞が有り、日本人には余り気にしないで使われて来て居りますが、中国人にとっては嫌な言葉です。中国は一九四九年革命で中華人民共和国となり、台湾はもともと中華民国で略称は両方とも中国となりました。是非支那と呼ばれない様にして頂きたいと思います。

南京大虐殺

南京大虐殺（中国では大屠殺）の問題はＫＡＮは大連脱出後、瀋陽の映画館で見ました。今考えてもおぞましいシーンの連続でしたが、ＫＡＮにはどうやって撮影したかは判りませんが、書くのも憚れるおぞましいシーンの連続で、作り事では無いと感じました。それを見た中国人と生き残った当時の日本人は真実を知っていると思います。ことの如何を問わず、多くの

中国人の受けた感情を理解して頂きたいと思います。

石原慎太郎知事の様に国を代表する人物が未だに当時の事情の理解をされて居られぬ事は、理解出来ないことです。平和になった今、やはり皆が正しく真実を理解して、お互いに付き合って欲しいと思います。ＫＡＮが敢えて自分史を申し上げるのも、真の友好を未来永劫に築きたいからに他なりません。読者の方にも南京の大屠殺記念館を御覧になった方が居られると思いますが、一部の人が言われる様に、中国の一方的宣伝とも言えない面があります。真実は当事者しか判りませんが、死んだ人を象徴すると言う、記念館の庭に海から持って来た殺された人の数を意味する沢山の白い石を見ながらＫＡＮは言い知れぬ思いに駆られました。虐殺は八ヶ所位あったとの石碑が立っていました。

シンガポールでも日本人は一～二万人住んで居りますが、買い物は皆殆ど、大丸、そごう、高島屋、伊勢丹に行き、現地のＣ・Ｋ・ＴＡＮ、ＯＧ、ＭＥＴＲＯ等には足を向けません。時に観光客が入っている程度です。

中国の国父孫文先生は「中国人如一把散砂」＝「中国人は一握りの砂のようだ。手から話せばバラバラと散って行く、団結しない」と評されましたが、それは孫文先生の時代で、今の中国人は大分変わって来ている様に感じます。ＫＡＮはよく「何故毎年の様に日本に行くのか」と聞かれます。小学校、中学校、大学と毎年同窓会が行われ、しかも大連に母校訪問をし、五年毎には同窓会総会があって同窓会名簿が作り直されます。日本では同窓の縦と横の繋がりを

重視するからと思います。

シンガポールの色々な友人に話しましたら、「日本人のやることは、何でも徹底しているなー」と感歎していました。シンガポールでは卒業後同窓会も行い、名簿を作るところもありますが、日本人のように徹底しては居りません。

ＫＡＮは今でも毎日日記をつけていますが、今までに最も遺憾に思うことは……

母の最後に側に居れなかったことです。今はシンガポールの仏堂にＫＡＮの祖先と、家内の祖先の神位を置き、旧正月、お盆、旧五月の端午の節句と八月の中秋節と年に４回は子供も一緒にお参りしています。ＫＡＮは昔から「親孝行をする人は、必ず成功する」と教えられました。今でもＫＡＮの日本人の友人にＫＡＮも頭が下がる思いの親孝行な人がいます。此の人、面川さんはそれこそ戦後ルンペンから立ち上がり成功を収めましたが、彼は彼の親の最後まで、側に付添って寝て面倒を見ていました。

一番忘れられないこと……

旅順工大予科時代、たまたま最初の小学校、西崗子公学堂の側を通り、校長室の中を覗きましたら、壁に「有志者事竟成」と墨書の字が掛けてあり、良く見るとＫＡＮが４年生の時に書いた字でした。その時の嬉しさは筆舌に表せられないものでした。

最も理解出来ぬこと……

日本の神風特攻隊が「天皇陛下万歳」と言って死んで行ったことです。

日本では国民の尊敬を集めて居られた昭和天皇の戦争責任を口にすることは憚る人が多いのですが、外国人で教育勅語で教育を受けたＫＡＮには納得が行かないことです。

戦争の最後の局面で、反対する力を押し切ってポツダム宣言の受諾を放送された昭和天皇は、陸海軍を統帥する権力を持って居られた方です。ＫＡＮは平和主義者だった昭和天皇が何故真珠湾攻撃にＧＯを掛けられ、第二次大戦を始められたのか、陸軍が天皇の裁可を得ずに鴨緑江を越えて中国東北に攻め込んだ時何故お止めにならなかったのか、山海関を越えて中国本土に攻め込むのを何故お止めにならなかったか、シンガポールが陥落して和平のチャンスが

あったのに何故和平を命ぜられなかったのか、何れも「ればたら」ですが、最後の最後に勅断を下される前に何れかの時期に勅命が出ていたら、神風特攻隊の三、〇〇〇名と言われる戦死者も出なかったでしょうし、勿論南京の大虐殺も起きなかったでしょう。

ドイツではヒットラーの独裁の結果出た他国の犠牲者に今賠償を払いつつあります。日本も平和条約を締結後多額の国家賠償を払って来ましたが、個人の保証はほとんどされて居りません。一時同盟を結んだ日独で何故この違いがあるのでしょうか。

小学校在学中日本軍が徐州、南京、武漢等の中国の大都市を占領する度に、大連市全部の学生が、授業を休んで旗行列を行いました。参加させられたＫＡＮは自分は中国人なのにと、子供心にも矛盾を感じていました。引率された先生はどんな思いだったのでしょうか。大学を出た中国人同窓のなかにも中国軍籍になったものもいました。幸い戦死者は出ていないようです。此れが米国の日系二世の場合直接日本軍と戦わない様に配慮されてはいましたが、戦後占領軍の通訳として日本にやって来ています。留学生の身分、特に関東州民だったＫＡＮ達は実に複雑な立場に置かれていました。

水……

日本が台湾、朝鮮、関東州を統治していた時代には、日本国内は勿論どこでも水道の水はそのまま飲めました。戦後になって日本国内は戦前と一緒でどこでも水道の水は飲めますが、当時統治されていた台湾、関東州ではそのままでは飲めなくなりました。どうしても理解出来ないことです。ＫＡＮはコーヒー以外には水を飲むのが習慣ですが、今大連及び台湾で水道が飲めないのは悩ましい問題です。

結び

今日本ではリストラの進行で多くの中高年層の方が離職をやむなくされ、大銀行や大企業の方が検察の追求を受けて自殺される方が相次ぎます。終戦後の荒廃を考えれば今は極めて豊かです。どうか落ち込むことなく、新しい道を見つけて元気に前進されることを祈っています。日本は世界に冠たる技術、経済大国です。大いに自信を持って進んで頂きたいと思います。ＫＡＮの大連脱出の時の様に生命の危険を感じて居られる方は少ないと思います。人間死を目の

前にしてやれば何でも出来ます。未経験のことでも今までの経験と教育を元に取り組めば不可能はありません。大事なのは自分の健康と家族の支えです。家族を大事にして一生懸命努力すれば必ず開けます。

ＫＡＮは今まで何回も死線を越えました。ＫＡＮを追い出した、中国共産党は今はどんどん変わりつつあり、ＫＡＮは一切恨みを持って居りません。鄧小平と言う大指導者が示した道を、誤り無く進み、ＫＡＮの第二の祖国、台湾と何時の日か、円満に統一されることを祈っています。

ＫＡＮは何時も此の波乱の人生をどうやって生きて来たかと聞かれますが、ＫＡＮが考えていることは、

１）「喫得飽、睡得着、比上不足、比下有余、知足者常楽、栄華富貴不去想。」

２）「己所不欲勿施於人」

どんなに年をとってもやりたい事は沢山あります。今ＫＡＮはパソコンに取り組んでいます。二〇世紀の語り部として、趣味、知識、経験を生かしたボランティアに積極的に参加して、健康の許す限り世のお役に立ちたいと思って居ります。

３）眠る前には頭を真空にする。

４）睡眠を十分にとる。今でも九時間以上睡眠をとります。

5）夕食には「にんにく」を二粒生でかじる。
6）毎朝ジョギングの後、腹部の運動と、深呼吸をしてその後朝食をとります。
7）週に二～三回はプールで泳ぎます。
此れがＫＡＮの処世です。

ＫＡＮの進んで来た道のお話が少しでも皆さんの元気を引き出すものであれば、望外の喜びです。是非此の手記が皆様のお役に立つ様に願って居ります。御意見、御希望を編著者にどしどしお寄せ下さい。ＫＡＮはシンガポールに居りますが、編著者とは何時も交信して居りますし、年に何回も来日致します。お会いしてお話しさせて頂くのも結構です。終わりに読者の方の一層の御健康と御発展をお祈り申し上げます。

（二〇〇一年七月）

編著者の思い

◎初の訪中

以上でＫ・ＫＡＮの口述をもとにした記事を終わります。編著者はＫ・ＫＡＮが文中で述

べていました、中国人大先輩で早くに太原に行って八路軍に入った張先輩の招待で、一行六名の旅順工大同窓生の専門家集団で、一九五八年、未だ国交前の中国に、文中に出て来ます、相田先輩を団長として、当時最も若かった私が秘書として四十日間、中国各地の工場施設をつぶさに見て回りました。最後に北京で相田団長が日本の自動車会社の社長から密かに託された合弁の話をする直前、たまたま台湾を訪問していた、当時の岸信介総理が当時の総統、蒋介石に本土反攻援助の発言をしてから、共産党政府の方針はがらりと変わり一切の公式接触は道を閉ざされ、折角の朋友だからとて、たまたま行われたメーデーの北京での行事に、相田団長は北京に残り、私ども五名は北京より南下、南京、上海、杭州と回って当時只一つの出入口であった、深圳から同行の新聞記者はパンツ一枚にされて調べられているのに、私ども一行は税関は全く無検査で帰国しました。相田団長はメーデーの天安門前の一〇〇万人のパレードを、天安門前の来賓用の雛段に座り、見事なパレードを見て、周恩来総理と握手、言葉を交わして帰国されています。

その後、私は今までに二十八回訪中、色々日中の技術交流に力を尽くして来ましたが、何処に行っても、中国人教育用の日中戦争の記録館などの施設には案内されたことはありませんでした。

◎九・一八記念館（一九三一年、柳条溝鉄道爆破、満州事変始まる）

たまたま一九九六年に海軍の同期生を案内して、沈陽を訪問の折り、団員のたっての希望で、柳条溝鉄道線路そばの九・一八記念館を訪ねました、地下の展示場には日本軍が中国人婦女子供を銃剣で刺し殺す蝋人形が展示してあり、一行は言葉を失いましたが、二〇〇〇年他の訪中団を案内して訪れた時には、会館は全国の中国人の寄付で、上海の芸術大学の設計のもとに立派に建て直され、例の蝋人形は全く無く、戦争の残虐を示すものは、極く一部の写真だけでした。オリンピック招致、ＷＴＯ加盟を控え、他国民に刺激的な展示は次第に姿を消して居ります。ホールの最後に高さ一ｍ程の立像があり、母親が女の子の手を引いています。日本に帰国出来た孤児がカンパして資金を寄付、上海芸術大学の彫刻家が作ったものだそうで、無言の立像は私どもの胸を打ちます。入口の壁には国辱を忘れるなかれと大きく書かれています。

◎ソプラノ歌手宋茜（そんちぇん）

私がたまたま自動車運転中にラジオでＮＨＫの番組で聞いた上海出身で今奈良に在住、ソプラノ歌手として、また日中の民謡、歌曲を精力的に日中両国でのリサイタルで発表している、宋茜（そんちぇん）さんも戦後生まれ、戦争を知りません。彼女が東京の童謡、歌曲コンクールで歌った歌が「里の秋」。中国戦線に出向いた父を偲んで歌った歌です。それを中国人の歌手が、心を込めて歌い、審査員は涙を浮かべて全員一致で、グランプリを獲得した歌です。私はラジオを聞いて

感動し、早速当時彼女が大学院生として在学中だった奈良女子大に電話して彼女と連絡がとれ、発売前のＣＤの原稿のテープを送って貰い、その後発足した彼女の後援会に入り、彼女の活躍を後援しています。彼女は勿論戦争を知りませんが、南京には例の虐殺が最もひどかった地区を現場保存して、立派な慰霊館が出来ています。宗茜さんの耳にも目にも入らぬ筈はありませんが、一切彼女はトークショーでも此の種の発言はしません。

◎靖国神社と歴史認識

現在の中国政府が靖国神社への総理の参拝を絶対に容認せず、日本の歴史教科書内容への反発をとっても、両国が共同の歴史認識を持つことを事有るごとに求めています。

中国の指導者は国民に日中友好を進める理由に、中国を侵略したのは、九名の戦犯の指令によるもので、一般兵士は命令に従ってやっただけであると教えて来ていますから、戦犯に総理が参拝することは国民に説明のしようがないと言う考え方です。

Ｋ・ＫＡＮには最後に三つの祖国への思いを述べる様に申しましたが、同時に日本への思いの本音も申すように勧めました。友好は思いやりが基本です。日本人は単一民族であるが故に他民族への思いやりが欠けている様に思います。

このＫ・ＫＡＮの手記を読んで頂ける読者にこの思いを是非御理解頂きたいと思います。Ｋ・ＫＡＮが申します様に、人間死ぬ気になればなんでも出来る、今の不況の中で、リストラに又、

長年忠節を尽くした会社、機関の破綻に直面されて居られる方々も、命を奪われる危険に迫られて居られる方は居られないのではと思います。この本がそうした方のお目に止まり、勇気と元気を出して前進される助けとなることを祈って居ります。

靖国神社追記

所謂A級戦犯の靖国神社への合祀に就いては、政府高官でも「知らなかった」と言う人が多く、ましてや大多数の一般国民は「何時の間にか」と言うのが実感です。

靖国神社の協賛会員である私のところには、毎月靖国神社の社報「靖国」が送られて来ますが、それによると

昭和二十八年四月一日から国会の議決を経て、所謂A、B、C、級戦犯の方々で刑死された人も、全て法務死でなく公務死とされて、援護法の適用を受けて、遺族年金、恩給が出されるようになり、従って靖国神社側は当然のことながら、他の戦死者と同じく、合祀の責任を負うことになって、昭和五十三年靖国神社崇敬者総代会の了承を経て、その年の秋の大祭で合祀されたと書いて居られます。

しかし先に述べたように、マスコミも何故かこの問題を詳細に説明せずに経過、中国や他の近隣諸国から、総理参拝に異論が出されるに至って、参拝自体をわいわい取り上げることになったものです。

靖国神社側にして見れば、国会の議決で戦犯刑死者を公務死と決定して、所謂復権して居り、その決定に従って一人一人経歴を調べて合祀申し上げたものだとの見解です。それを今になって、政府関係者から分祀せよとの意見が出るのは、国会で議決した張本人から出るのは心外と言う見解のようです。

ＫＡＮは昭和天皇の戦争責任に就いても言及していますが、たまたま二〇〇一年八月の靖国神社、社報、「靖国」に昭和天皇が昭和二十年終戦の年に読まれた御製が掲載されています。

身はいかになるともいくさとどめけり
ただたふれゆく民をおもいて

昭和天皇の終戦の詔勅の放送を巡る反対者との攻防は数多く語られていますが、昭和天皇がマッカーサーと初めて会われたとき、「すべて自分に責任がある。自分はどうなっても良い」と仰せられ、マッカーサーは一遍に陛下の味方になったと言われていますが、ＫＡＮが指摘するように、「ればたら」ですが何故幾つかの機会に陛下の裁断が出なかったか、陛下を取り巻く高位高官の人々が軍刀片手の一部急戦論者の威嚇に屈したからでしょうが、今後このような事態が起こらぬことを祈るのみです。

◎法輪功

瀋陽の李洪志が始めた法輪功は短時間で中国全土に広がり、数千万の信者となり、共産党

幹部にも及ぶに至り、北京では法輪功を国を誤る邪教と決め、日本のオウムと同様、強硬な取り締まりを行って居ります。李洪志は米国に逃げて、米国の保護のもとにあり、米国は事有るたびに、チベットとならんで人権保護を訴えています。

日本でも法輪功は転法輪と言う書物が出版されて居り、読みますと仏教に根源を置き、とにかく良く勉強しています。

共産党の頭の痛いことは、生活が安定するにつれ、民衆は死とは生とはと考える様になり、心の拠り所を求める様になります。これは一党独裁のプロレタリア政権には教えることが難しい問題のようです。日本も戦時中色々の新興宗教が弾圧を受け、戦後開放されると、急速に信者が増え、政権党になるところも出て来ましたし、中国政府は日本研究所を設け、色々の事態を細かに情報収集して居りますが、此の法輪功は最も神経を尖らす問題の一つと言えます。

最近金持ち層が増え、海外に出て大金を握ってブランド物を買いあさる中国人が増えています。資産階級が増えると彼らを放置出来ず、労農中心の政党が彼ら資産階級を共産党員に加入させて、政権の一翼を担わせないとならないところに来て居り、先日新聞でも江沢民総書記が彼等資産階級の入党を認める発言をして居ります。Ｋ・ＫＡＮが言う様に中国もどんどん変わって行きます。

◎台湾と中国

一九五八年国交前の訪中の折り、各地で「我們一定要解放台湾」の大きな看板が至る所に立って居りました。長年国民党と争った共産党にとってはどうしても譲れぬ相手です。一方台湾は在来の本島人は殆ど福建人です。言葉も福建語を使います。福建人は世界の華僑の大半を占めて、もともと国を捨てた人ですが、団結心が強く、東南アジアでは経済は殆ど華僑が握っています。日本でも外国人犯罪が増えていますが、その中の中国人には福建人が多いようです。

所謂法律で規制しにくい人々です。彼らは武力にかけても、台湾を開放すると威嚇する中国にどんどん資本進出して居り、中国内で会う観光外国人は台湾人が大多数を占めます。旅順にも香港人は来ませんが、台湾人は必ずやって来て、二〇三高地には必ず行くようです。乃木大将が書かれた二〇三高地にある、壘霊山の字をはめ込んだ、小銃の弾の形の表忠党は今も大事に露天博物館として保存され、人民解放軍のなかでも、乃木大将はわが子を二人も同じ戦線で失いながら、力を尽くして戦った武人の鑑であるとの評価をされているそうです。

◎ベンツ

一九九七年、やはり海軍同期を案内して三峡下りに行った際、三峡の工事現場を見学するべく、重慶からの船を桃花村で下船、船着き場で迎えのバスを待って居りましたら、次の船で、四川省省長がやって参りました。その頃からやたらに黒塗りのベンツが集まって来ていましたが、船から降りた省長一行が乗り込むと、物凄い速度で出て行きました。

一九五八年私が北京を発って上海を一行六名で訪問した折りも現地の機関は、小豆色のベンツ三台を用意して迎えてくれました。

北京などでも先導の車を走らせて、時にベンツの行列が猛烈な速度で市内をすべての信号を止めて走っているのを見受けます。

もともと共産党幹部は北京では中南海地区に住んでいると言われますが、幹部の動静は一切発表されません。やはり海軍の同期を大連、旅順に案内した折り、一行のたっての希望で、大連では市街地から離れた棒錘島賓館に泊まりましたが、周囲は銃剣付きの番兵が警護して居り、敷地内には幹部専用のゴルフ場もあり、敷地内にある昔、毛沢東主席、周恩来総理が使った別荘にも人を泊めていますが、プライベートビーチやプール、娯楽施設も完備した立派なものです。二〇〇〇年六月大連開発区の三洋の工場を訪ねた時の話で、五月に江沢民が視察に来ると言うので、道順に木や花を植えるやら、掃除は勿論、壁の塗装もやり変えて待っていたら計画変更で無駄使いしたと言っていました。

◎公安、国家安全部

日本でも警察は一般の人は入りにくい存在ですが、中国人は公安は鬼より怖い存在のようです。北京で調べることがあり、一九七二年当時の王府井通りの建物を聞きに、公安部本部に乗り込もうとしましたら、同行の中国人同窓生は一緒に入るのをいやがります。外国人の強み

で、入り調べてもらったことがありますが、この上にあるのが、国家安全部です。国家転覆や反逆を調査している機関で、やはりあることで、人民日報もと秘書長を知り、市内の人民日報本社の裏の宿舎を訪ねたことがありました。人民日報本社は回りを高い塀で囲み、入口には銃剣付きの武装警察が警備して居り、一々電話で相手の人を呼び出して、面談室で会う仕組みでしたが、二回目からは元秘書長が裏の出入り口に声を掛けて置くから、自分の名前を言って貰えば良いとのことで、彼の自宅で話をしました。K・KANが述べています様に、一時期は外国人は中国人個人の自宅は訪問出来ませんでした。又土地登記所、公安で聞いた結果文革中から一九八二年までの土地台帳、住民登録等は一切わからなくなっているようです。

この元秘書長の嫁がもと国家安全部に勤務して居り、一週間くらい秘密調査で帰宅出来ないのはざらで、その息苦しさに申し出て公安に変えて貰ったと言います。昼間公安派出所を訪ね、そとの飲食店で会いますが、制服では外国人には軍隊か、警察か制服が良く似ていて、見分けがつきません。普段着で出てくるとたおやめです。任務を聞くとバスの中のスリ取締りだと申します。貴方のような華奢（きゃしゃ）な人がどうやって捕まえるのかと聞きますと、バスの中で現行犯を見つけると、運転手にサインを送り、運転手は停留場を無視して、近所の公安派出所に止めると、公安が飛び込んで来て犯人を捕まえるのだそうです。

一九八八年知人を案内して西安を訪ねた時、空港で巨大な日章旗がはためいてのお出迎え何事ならんと聞いて見ると、当時の竹下総理の訪問でした。当時は中国内で日章旗が翻ること

は皆無でしたから、驚きました。翌日西安の名所華清池は、楊貴妃が湯あみして有名で、同時に張学良が蒋介石を監禁して有名な西安事件のあったところですが、竹下（ツオシア）、竹下と言って物凄い警戒です。当然竹下総理の参観通路は一時間前から封鎖され、強引に入ろうとしたのか、屈強の男が更に屈強な私服公安に小脇を抱えられて、走々（ツオツオ）と言いながら引き立てられて行きます。一時間位して総理の一行が五十台位の車を連ねてやって来ました。竹下総理顔は笑っていますが、こわ張ってとても笑顔とは言えません。敷地内の池のそばでついて来た日本のカメラマンが写真を撮りますが、やはり同行して来た日本の自民党の議員が回りを囲んで一緒に写ろうと、総理、総理と大変な騒ぎです。

その夜、ホテルでテレビを点けると、満洲国誕生と言うドラマをやっていました、ゴールデンアワーの一時間物ですが、傅儀が満洲国皇帝に就任するまでの映画ですが、関東軍や満洲国総務部次長の会議はすべて日本語で、中国語の字幕が出ます。傅儀は清朝時代の服装で行おうとするのを、当時の日本の幹部が無理やり、日本の大元帥服に着替えさせて、宣言を読み上げさせます。その模様と日本軍が中国人を惨殺するシーンとが交互に写されます。何で竹下総理が滞在している時にと思い、空港で知り合いになった西安の大学教授で日本に子供四名を留学させている人に聞きましたら、中国でも時が立つにつれて、満州国も知らない人が増えて来て、国民の啓蒙教育に次々と当時のドラマを上演するそうで、次は川島芳子のドラマだと言っていました。

此の教授の二人の男、二人の女の子は皆日本の大学院を出たあと、日本に腰を据え、一人は日本人の男性と結婚、盛大な結婚式に招待を受け、一人の男の子は日本人の奥さんを貰い、仕事で私と密接な関係になって居ります。両親も最近は日本に住んでいます。私が呼んだ中国人技術者や中国の機関の通訳は日本に帰化する人が多くなっています。

彼らが本当に住みたいのは米国かオーストラリアですが、日本が手近で最も安く来れる所だそうです。

日本の交換国費留学生として来日した清華大学出の優秀な大学院生も、三十一才で博士号を取り、日本の大学の助教授として、家族一緒に日本に腰を据えてしまいました。頭脳の流出に悩む中国は盛んに呼び戻しますが、なかなか帰国しない様です。大阪で国費留学生の会が立ち上がり、此の留学生が初代会長になり、招待を受けて、集会禁止の中国では初めてと言って良い、その発会式に出かけましたら、大阪領事館の留学生担当の領事が私ども日本人来客一人一人に挨拶をして回って来られました。聞けば留学生のお目付役だとのことでした。

◎四つの戦争

有るとき政府機関の要人と会談している折り、その要人が日本の経済発展をうらやましがった発言の際、「日本は戦争終結後、政府の指導よろしきを得て、ひたすら経済発展に力をそそぎ、国民も良く働いて、世界第二の経済大国になった。中国はその間に四ッの戦争をしている、朝

鮮、ソ連、インド、ベトナムの四ッだ。大きな国力を失った、それと国内の政争、文化大革命、これですっかり世界に遅れてしまった。鄧小平が開放に舵を切らなかったらまだまだ遅れていただろう、と言います。

日本はそのなかの、朝鮮、ベトナムで特需を受け、経済立ち直りに大きな利益を得ました。憲法九条が盛んに議論されますが、アメリカの五一番目の州でいる方が良いのかなと思ったりします。ロシアが自ら核の削減を言い出しました。核の保有は大変金のかかることのようです。時々カリスマ性のある指導者が出てくると、ヒットラーのように誰も止める人が居らず、ひたすら軍拡に走り、国民は大変な目に会います。

ソ連とのいさかいが起こった時は、瀋陽でも瀋陽の全市民が入れる地下防空壕を掘って居り、今は地下貯蔵庫や地下商店街になっているそうです。

その意味で江沢民の資産階級の共産党への受入れ発言はすごい決断だと言えます。K・KANの三つの祖国が仲よく平和に行ける道を見つけて欲しいと思います。

人類は火星に住むことを研究する積もりのようですが、五十年間に三倍に増えた人口の抑制と、どんどん広がる砂漠の活用が先に手をつけるべき問題ではないかと思います。モンゴルで日本のボランティアが毎年植林を行っていますし、中国政府も精力的に植林に力をそそいでいます。お互いに大陸間弾道弾に巨費を投ずるのをやめて、砂漠緑化に力を合わせる時ではと思います。

Ｋ・ＫＡＮの今までは政治に翻弄された一生だったと思います。彼の常に前向きな性格と勉強に勤めた結果が今の安寧を得たものと思います。どうぞ行き詰まりを感じる人も、もう一度考え直して、新しい道を見つけて欲しいものと思います。

◎日本への不満

Ｋ・ＫＡＮにはこの手記のなかで出来るだけ本音を語るように申しました。人生に「ればたら」はありませんが、一時期Ｋ・ＫＡＮが考えた、日本人女性と結婚が成立していたら、今のＫ・ＫＡＮは当然無かったでしょう。Ｋ・ＫＡＮと一緒に大連に行った折り、Ｋ・ＫＡＮの呼びかけで、中国人の同窓生が十名ほど集まってくれました。Ｋ・ＫＡＮと私が割り勘で費用を持って、大連の餃子で有名な中華料理店で宴会を行いましたが、私の隣に座った優秀な中国人同窓生が「先生なら判ってくれるでしょう」と言いながら、彼の日本に対する不満の数々をぶちまけました。今までに色々の宴会でこの種の発言を私にぶっつけた人はいませんでしたが、聞きながら、全く反論の余地はありませんでした。はしなくも、日本の大学で学んだ彼らの本音を聞かされたわけです。私個人ではどうにもならない問題ばかりでしたが、一見、好、好の間に心の底にある、癒し様のない鬱憤、不満を忘れてはいけないと痛感しました。

孫文も蒋介石も周恩来も日本に留学しています。ひそかに彼らを助けた国士とも言うべき日本人もいましたが、いかんせん、政治の力と時の流れにはさからえませんでした。

小泉、真紀子コンビが国を誤らずに、日本を導いてくれることを祈っています。

K・KANの手記でふれた、松岡洋右外相の日ソ不可侵条約が如何におめでたいものであったか、日本は今更ながら、外交の本質を考えるべき時と思います。私は学生時代グライダーをやって居り、毎週の様に大連周水子飛行場で練習していましたが、背の低いチョビ髭の松岡洋右外相がモスクワからの帰途、大連周水子飛行場に中継で立ち寄り、訓練していた私どもを整列させて、閲兵し「日本の将来は諸君の双肩にかかっている、頑張ってくれ」と激励しました。もうその時は、モスクワで外相がスターリンとの会談でウオッカをしこたま飲まされ、朦朧として、日ソ不可侵条約に調印したと言う噂が私どもの耳に入っていました。K・KANの波乱万丈とも言うべき口述を聞いて、彼のモットー、寝るときはすべて忘れて十分の時間眠る、クヨクヨしない、と言う言葉は、サムエルウルマンの詩と一味相通ずるものがあります。三回も総理を勤めて、戦後の日本を指導した吉田総理は、「長生きしたから総理になれたのだ」と言って居られたそうです。

読者の皆さんも毎日寝る時は全てを忘れてとにかく十分に寝て、新しい活気で前向きにお進み願いたいと思います。必ず前途は開けて来ると思います。

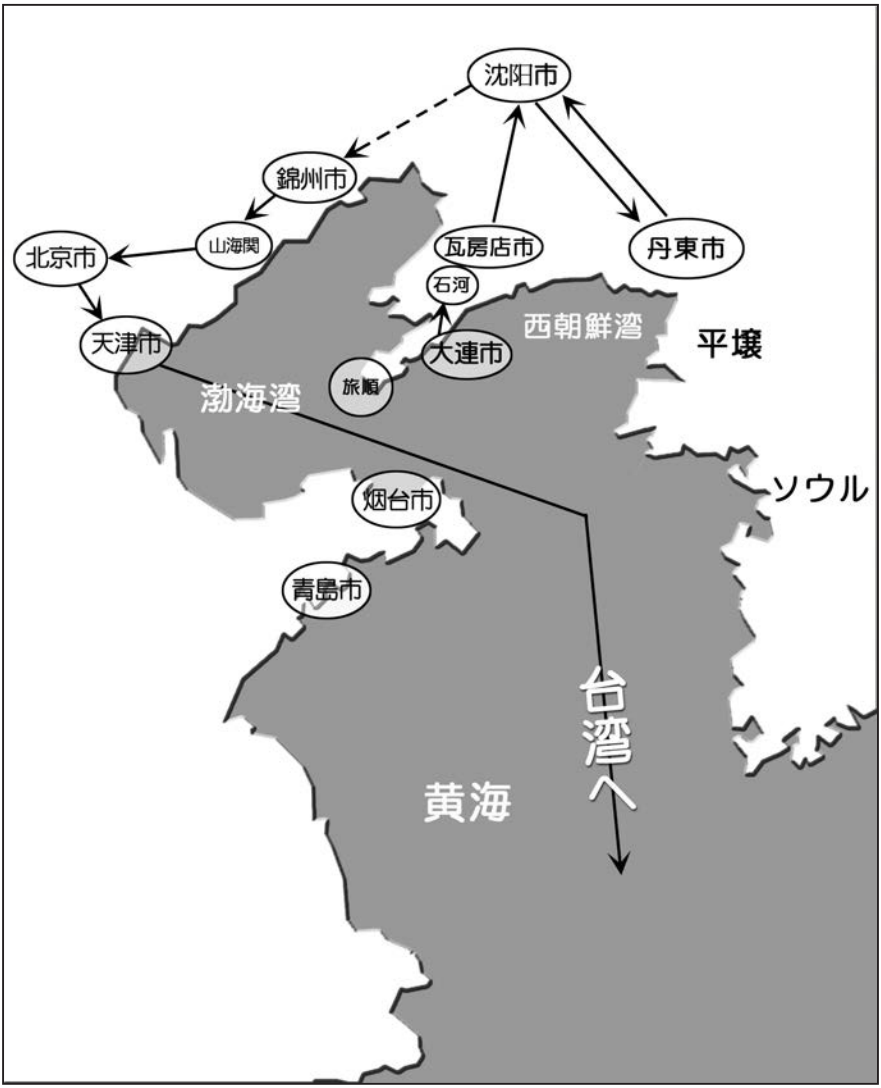
（二〇〇一年七月十日）

K・KANの年譜

年次（年齢）	中国の事件	KANの記録
1922		3月12日　大連市内で出生
29（7才）		西崗子公学堂入学
32（10才）	満洲国建国	大連聖徳小学校5年に編入
35		大連中学入学
39（17才）		旅順工大予備科入学
40		旅順工大予科1年進学
43		旅順工大本科機械科に進学
45（23才）	日本敗戦、	終戦で繰り上げ旅順工大卒業・大連臨時中学数学教師に就職
	満洲国崩壊	
46		最初の結婚
47		大連脱出
48		安東（丹東）脱出
49（27才）	中華人民共和国設立	瀋陽脱出、北京、天津経由／台湾に向かう
		台北工専教師

年次（年齢）	中国の事件	KANの記録
1950		台湾工鉱公司機械分公司に転職
51		同上公司の基隆サルベージ処長／サルベージに従事
53		台湾聯華実業公司に転職／高雄邱社長と知り合う
56	蠅、ねずみ、雀とり運動／大字報運動	
59		今の妻と結婚
66	文化大革命始まる	バンコクで酸素工場建設
68		聯華の台湾での酸素工場建設
72		シンガポールに工業ガス工場建設
		シンガポールに移住
76（54才）	天安門事件（周恩来に献花）／唐山大地震	ゼニライトブイ会社シンガポール支店マネージャーに就任
	毛沢東死亡	

年次（年齢）	中国の事件	KANの記録
1977	文化大革命終了	
82（60才）	鄧小平複権	
86	鄧小平、改革開放宣言	シンガポール公民権取得
87（65才）		ゼニライトブイ会社定年退職
		シンガポール、PRIMAの製粉工場を中国烟台及び青島に建設
89	天安門事件（武力鎮圧）	
91（69才）		台湾聯華顧問兼富岡工場長就任
96		シンガポールに帰国
97（76才）		PRIMAの顧問就任
		製粉工場及び他食品工場顧問に就任
99（77才）		春シンガポールに帰国


沈阳市
錦州市
山海関
北京市
瓦房店市
丹東市
石河
天津市
西朝鮮湾
平壌
大連市
旅順
渤海湾
ソウル
烟台市
青島市
台湾へ
黄海

K.KAN 氏関係地図

（敬称略）

竹内義男
竹崎初太郎
田尻正春
多田寿美子
田中久雄
玉澤健司
地平寛治
陳昭陽
塚本典正
月野弘
角田一郎
鶴岡千秋
土井明
堂坂馨
泊賢一
内藤和子
中尾敬
中尾孝
中沢一忠
永島可進
中田悟
中村浩
中村実
中山勉
名畑豊
成岡満夫
西澤純三
西田明澄
西原修二
西山圭三
野瀬一郎
野宮利雄
萩原四郎
橋本雅江
濱與志隆
林静子
日高三郎
平井善弘
平沢春次郎
平野春雄
平山岳
福嶋良亮
藤川秀信
藤田哲彦
伏見八重
船越一郎
本田健
真玉喜好
松浦卓朗
松尾謙吉
松平正博
松野武雄
松本戌
松本実
松本芳郎
三木重昌
三井周次郎
南富美子
宮本たつ子
村田宏
村松緑朗
森玄三
森本君子
矢口進也
矢崎菊子
屋敷泰次郎
安仲郁
安間秀典
矢野照重
椰野肇
山口寿
山口マリエ
山沢勇
山田博康
山本庄美
吉成豪
吉村博
若月光
渡辺章平
渡辺正人

（敬称略）

K・KAN
青井謙一
青山静
赤城正
秋田三恵子
安住欣二
阿部靖子
阿部義正
荒川喜代一
有福武治
池田佐喜男
池田幸子
石井浩輔
石橋昌彦
石橋良信
伊勢崎實郎
一志徹
伊藤愛二
伊藤志満
伊藤正司
井戸川知子
稲田尚之
井上健太郎
入江久美子
岩本重敏
上村勉
鵜飼治義
浦上清久
江藤肇

榎本武
江原えみ
大石徹
大倉孝三
大河内重信
太田邦子
大谷紀子
大塚喜久雄
岡崎定助
小蒲康雄
小田切岩男
面川磐
甲斐正人
柿原豁
賀来智信
笠間弘
片山和久
加藤八朗
鹿野田秀夫
川口正義
川崎元雄
川畑文憲
蒲原幸生
北村澄
木俣清次郎
木呂子恵美子
國澤徳安
國峰正男
久保徳子

栗原醇
黒川一男
小泉高男
小林重彦
駒見博
小峰静子
斉藤すず江
斉藤節子
斉藤浩子
斉藤依子
酒寄恕
佐田純二
佐藤信太郎
佐藤美枝
晒義廣
篠崎公一
篠田敏郎
庄野澄子
白石勝美
進藤正浩
菅谷一郎
杉本洋
杉山正義
関正命
税所幸子
高味慶典
武居敏彦
竹内笑子
武内修

松尾謙吉（まつおけんきち）

1921 年 9 月 4 日生
1943 年 9 月 旅順工大、機械科卒業、直ちに海軍技術士官を志願、中国青島で訓練後、終戦まで横浜市追浜の第一海軍航空技術廠支廠に 配属、新型爆弾の発火装置の試作に従事
1946 年 2 月 後藤鍛工㈱（現 メタルアート）に技術課長で入社、各役職を歴任、同社が大阪 2 部に上場後、同社取締役を退任。
1984 年 1 月 松尾技術士事務所を開設、同時に中国側機関の要請を受けて、関西日中経済技術交流協会を設立。
自動機の設計製作販売を行う傍ら、中国との技術交流及び中国人高級技術者の来日の援助を続けて居る。

三ッの祖国を持つ、ある中国人
旅順工大生の手記

2001 年 11 月 3 日　発行

著　者 —— 松尾謙吉
発行者 —— 桐生敏明
発行所 —— 株式会社**かんぽう**
大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号（〒 550-0002）
電話……(06)6443-2171 ／ FAX……(06)6443-2175

印刷 …… 今井印刷株式会社
製本 …… 日宝綜合製本株式会社

©2001 Printed in Japan　無断転載を禁じます。